
聖剣伝

上屋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

聖剣伝

【Zコード】

Z53780

【作者名】

上屋

【あらすじ】

人と魔族が争う時代

勇者に封印された魔王はどうとう五百年ぶりに復活した

そして魔王は再び魔族を束ね人類を倒すべく動きはじめた

だが復活した魔王の尻にはなぜか伝説の勇者の聖剣が刺さっていた！
しかしそこに一向に気づかない魔王、なんだか気まずくて指摘
できない部下たち、

尻に剣が刺さったまま眞面目に魔王業を邁進する魔王を部下たちは

必死に止める

どうにもツッコむにツッコメない状況に今日もストレスがたまる側
近の魔族、主人公ギード君の明日はどうだ！

魔王遭遇編壱 尻に剣を刺してはいけません

『それは真なる魔、真なる闇

剛にして轟、粉碎と崩壊の主 虐殺と暴虐の奏者

即ち

我ら真なる魔に仕えん

霸軍として、魔群として、走狗として

我ら真なる魔王に仕えん

我らが命、只魔王の道具として仕えん』

子供の頃からの手習いで覚えた魔王様に捧げる忠誠句を自然とつぶやいてしまう。

我ながら緊張し過ぎだと思つが、現在の状況を考えればやはり仕方がない。

人と俺達魔族の戦いが始まって現在まで七百年程の時が経つている。

かつて我ら魔族をまとめ上げ、憎き勇者を筆頭とした人族と互角以上の戦いをした魔王様が勇者に封印されて早五百年。

その間に俺達魔族はせまる人族に抵抗し続けていた。

だが、この世界に永久はない。

とうとう封印が弱まり魔王様はつい先日、五百年ぶりにこの地上に顕現なされたのだ。

そして、俺はまだ弱輩でありながら光栄にも剣や魔法の技術を評価され魔王近衛隊『朱龍部隊』に抜擢された。

そしていまから偉大な魔王様へ顔見せに行く途中というわけだ。

広々とした魔王城の中央に位置する謁見のための莊厳な大広間

に通され、俺は跪きながら魔王様の到着を待つた。

しばらくの間の胸の痛くなる緊張の時間が過ぎる。やがて小さな振動と、何かがぶつかるような音が徐々に近づいてきた。それが足音だと気づき顔を上げる。遠く離れた位置にある入口から入ってきた魔王様と目が合った。「一メートルを超える逞しき巨躯、全身を覆う禍々しき鎧、黒曜石を思わせる漆黒の肌にまるで血管のごとく線を描く煉獄の朱。頭髪は生えておりずその目には鬼火の青が暗く輝いていた。

俺は引きつけられそうな威圧感を感じると憧れから生ずる昂揚で相殺する。

「……汝が朱龍に新たに属するものか。二十歳と聞いていたがそれよりも若く見えるな」

重く力を持つ言葉が空間に響く。

「つはい！　自分はつ！　ギードと申しますッ！」

玉座に腰かける魔王様と俺が跪く場所は離れており、聞こえにくいうことがないようこと喉も裂けよどばかりに声を張り上げた。

「……つむ、よい声を出すな、これからも任務に励むがよい

魔王様はそういう残すと玉座を離れ元来た入口へとゆっくり歩き出した。

よつしゃーー。」それで俺も出世株、実家のじいさんやお袋にもあとで報告しなきゃな！あと早く嫁さん探して……ん？

そこまで考えて俺の思考は急に停止した。

あれ？

それは退出していく魔王様の後ろ下半身、いわゆる右臀部の位置にあった。

……イヤイヤヤ。

それはおそらく七十センチほどの長さ、持ち手と思われる部分は何か装飾が施されている。

……イヤイヤヤ。

金属で出来ている部分は光沢と色合いでから察すると超金属ミスリル以上の質の金属が使われているようだ。

……イヤイヤヤ。

ちょっと待て。

というかあの形は小さな頃こさんざん覚え込まされたアレに遠田からだが特徴が酷似していく……

……イヤイヤヤ。有り得ない、有り得ない。

出口から出て行く魔王様の背中を見送り、閉まるドアの音を聞きながら俺は必死に今見た物が何なのか考えていた。

何でだ……？

……何で魔王様の尻に伝説の勇者の剣みたいなのが刺さっている
んだ？

魔王遭遇編Ⅲ 見た物を偽ってはいけません（前書き）

一発ネタで思いつきました
もしよろしければ読んだ方なんでもいいですので感想をお願いします

魔王遭遇編武 見た物を偽ってはいけません

壁や床一面をくまなく覆う強固なレンガ、等間隔に配置された魔術照明が俺のイマイチ釈然としない顔を照らす。

謁見が終わり俺は魔王城の広い廊下をトボトボと歩いていた。頭の中では今見たものがグルグルと回っている。

……特徴からして、あれは恐らく……いやまさかそんなことは……しかし最強の防御力を持つ魔王様に突き刺さっているということは……あれはつまり……

『聖剣』

かつて魔王様を封じ込めた憎き勇者が使ったと言われる伝説の聖剣。聖龍を模した柄とミスリルをはるかに凌駕するハイオリハルコンと呼ばれる独自の輝きを放つ超金属によって造られた刀身をもつ、神々の武器。

しかしそれは大火山アグニでの魔王様を封じ込める戦いで行方不明となつていた。

その後、俺達魔族は魔王様を封じ込めるキーアイテムとなるその剣を見つけた場合、即判別出来るようにと子供のころから聖剣の特徴を覚え込まれていた。

それとピッタリなんだよなあ、特徴が。

「おい、お前か？朱龍部隊の新入りの魔人族のギード・ウォーカーというのは」

「ツ！」

バリトンの低い渋めな声にいきなり名前を呼ばれ、俺は後ろを振り向いた。

……山がある。

咄嗟にそう思う。先ほどの魔王様の体躯よりさらにでかく、重厚な鎧で大量の筋肉を覆っていた。その左目には深い刀による古傷が鎮座し、武骨な牙が口の両側から突き出ている。まるでそれは肉食の凶暴な猪と評すべき面構え。

朱龍部隊の長、獣人族でも屈指の巨漢を誇るグランオーク種出身のゴルン・ドーガ隊長だ。

「はっはい！」

俺はまたも緊張で上擦った声で返事をした。

……つうかこの人、入隊の面接の時も会つたけど顔こええ！ 超こえええ！

どうやら俺の緊張を読み取つたらしく口元から笑い声らしき音が聞こえてくる。威圧感のある顔面が更に歪に歪んだ。

……ひょっとして笑つてゐるのか？ それは笑顔なのか！？ グランオーク種伝統の呪いのかけ方じやないよな！？

「まあ、そう堅くなるなギードくんよ。

何か困つたことや聞きたいことがあれば遠慮なく来なさい。

ああ、それからこれは私のおさがりだがおさやかな入隊祝だ。良ければ使つてくれ

「えつ、あつありがとうござります。た、大切に使わせて頂きます

……

渡されたのは一振りの剣、あまり派手な装飾はないが質実剛健とした頑丈な拵えだ。刀身を鞘から引き抜いて俺は驚いた。

ミスリル製の高級品である。新入りにおいてそれとくれてやるほど

の安物ではない。

「……こんな高いものの頂けませんよー。」

返そうとする俺を太い腕で押し止め、山ルン隊長は更に豪快に笑つた。

……だからいええって。

「新入りよ、武器は出来るだけいいものを使っておけ。戦場では極僅かな差が命を分けるぞ。」

飾り気がないのは私の趣味だ。欲しければ自分で着けておけよ。」

「……はい」

俺は見た目で単純に怖がっていた自分を恥じた。この隊長は真剣に部下を心配してくれている優しい上官ではないか。

そうだ、この人なら相談できるかもしれない。俺は意を決して声を出した。

「あのつ、俺、さつき魔王様に謁見したんですけどー。」

「ツー？」

その瞬間、隊長はびくっとその巨塊の体を震わせ、急に落ち着きを無くす。

「おつ、おおつーん、そつか、どうだ魔王様は、い、偉大な方であつただろうー？ といふか偉大だな！」

……明らかに動搖している。これはやはり言つたらマズいのか？ どうする？ どうする？ ええいつ、ならばー。」

「ま、魔王様つて、ええと、か、変わったしつぽしましたよねー。」

「……えつ？」

一瞬の沈黙、時が止まる。……やはり言ひ渡せじやなかつたか？

「……あ、ああーなんとか、やはつ我らのよつなト々の者とは違つた！これぞ魔王とこつ特徴的な尾だなー。」

ああ、そうかこの人もか……

お互に流れるこのなんとも言えない白々しい空氣。

それを突然切り裂くように高く可愛らしい声が投げかけられた。

「あれーゴルンさん、その人新入りさん？」

隊長の体といつ肉の凹凸の横からヒュイッと可愛らしい顔が飛び出す。

そのあまり高くなない背丈は凹凸のヒュイと隊長と並ぶと一層小さく見えた。

肩まで伸ばした紫の髪と氣の強そうな凛とした眼差し、整つた顔立ちに纏う少女にしては妖艶な雰囲気は、恐らくはこの娘が妖人族、サキュバス種かその亞種の出だからだろうか。

そして何よりも特徴的なのは、

「あ、ああ、この新入りはギードくんだ

ギードくん、この娘はメイド見習いのアイアだ」

「よひしくー ギードさん」

その小さな全身を包むフワフワとしたメイド服。

「あ、はーよろしくー」

差し出された手と俺は力無く握手を交わした。

……なんかいつこつ押しの強そうな娘つて苦手なんだよな、いや

それよりもなんでただのメイド、いやメイド見習いなのにこんな軍人になれるならしいんだよ。俺より年下っぽいのに。

「ああ、やついたらギードさんはもう魔王様にあったの？」

「あ、ああもう謁見はしたよ」

「やっぱり凄いよね魔王様！」

「うん、確かにあの威圧感は凄まじいものが……」

「お、おこアイア、ギードは仕事があるからもうこのへんで……」
隊長の制止を聞かず、アイアは笑顔のまま話を続ける。そりゃもうまぶしい無邪気な笑顔で。

「でもー、一番っこいのはアレですよ！」

お尻に剣がさしてある人なんて私初めて見ましたよー！」

……「うん、やっぱり俺はこの娘が苦手だ。

魔王遭遇編参　だから見たものを偽つてはいけません

「あ、じゃあ仕事あるからそろそろこへね…じゃあねギーデくん」

ものの見事に空気を読まないダメイド、アイアが用事があるとい

の場を颯爽とさり、氣まずい空氣のまま残されたのは俺と隊長。

「あの……魔王のアレってやつは勇者の聖剣……ですよね」

なんとも言えないアレな状態の中、隊長は口を開いた。

「お前も……やはりそういう見えるか」

「だつてどうみても……剣ですもんね、尻にぶつ刺さつてる
顔をわずかに上げどこか遠くを見つめながらゴルン隊長は語り始めた。

「……我等幹部連中が魔王様の復活に立ち会つたすでにその時から剣は尻に刺さつていた。そして魔王様はそのことに一向に気がついておられなかつた。

私達はそれがまさか剣だとは思わなかつた……まさか、魔王様が尻に剣を刺したまま復活するはずがない、と」

マジかよ。

「……いややすがにそれは最初に言つたほうが

「そう、誰かが最初に言うべきだつたのだ。だが、魔王様は極めて有能な方だつた……復活してから半月ほどで今では城の様々な部署を周り指揮を取つておられる」

それは、つまり。

「……それ故に魔王様の尻に『何か』が刺さつていることは城の全ての者が知つておる」

「……最悪だ」

「もしお前が魔王様であり今の状態で真実をじらされたら……どうする?」

「死にたくなります」

「だらうな、そしてあれが勇者の聖剣だと否が応でも思い知らされる事態が発生する。

ある日、魔王様のある部下が後ろから呼び止めたのだ。魔王様は颯爽と振り返った。そしてその動きで振り回された聖剣で……傍らにあつた城の柱が一本切断されたのだ

「……え”ええツ！」

「えつ？ マジで？ あの太い柱が？」

「魔王様にはなんとか工事ミスと知らせたが、私はあれが正しく勇者の聖剣だと思いしつた。結局私達は魔王様に真実を告げられず、今日まで来てしまった……」

鬼かあんたは

「つまり気まずくて口ひ言えない状況になってしまったと……」
隊長は顔を下げ拳を強く、骨よ碎けよとばかりに握りしめた。その残された右目には暗く深い後悔がうつる。

「そうだ、そして城の中では『魔王様のアレは尻尾だよ』派や『魔王様のアレは魔王様のドツキリだよ』派、

『魔王様のアレは心の汚いやつのみに見えるんだよ』派、『引っ張ると勝手に走り出すんだよ』派、

果ては『押し込むと中身が勢いよく危機一髪な感じで飛びだすんだよ』派などとふざけた派閥まで現れ分裂してしまったのだ

いやみんなふざけてるよ、ふざけ倒してるよ。この城には鬼しかいないのかよ。

「……ギードよ、城の臣下がまとまらずこいつなつたのは私にも責任があるのだ。だが私には魔王様を傷付けず真実をお知らせする術がない。全く情けないものだ……」

いや臣下が全員『魔王様に刺さつてゐるアレは伝説の聖剣だよ』派になつてもどうしようもないだろ……

「あの……魔王様に気づいてもらうといつのははどうでしょ？」「それで魔王様が剣を抜いてあとはみんなで知らぬふりをすればダメージは最小限になるのでは」

ゴルン隊長は哀しげに俺を見つめた。

「それは何度か試したのだ。夕食のステーキにナイフを刺したまま出してみたり、戦場で尻に刺し傷を追つた男の話をしてみたりしたが気づいてはくれなんだ……」

……この人解つてやってないか？

「ギードくんよ」

「は、はい……」

「どうやら君は冷静に物事を見つめる才能があるようだ、どうかその才能を私に貸してくれないだろうか？」

ちょっと待てなんか嫌な予感がするぞ。

「……それはつまり」

「君を魔王様の近くに置くからにか自分から気づいてきつかけやヒントをつかんでくれないか」

「……マジっすか」

かくして俺と魔王様のツッコむにツッコめない田々が始まった。

口常七転八倒編志 同僚とは仲良くしなくてはいけません（前書き）

更新遅くてすいません

お気に入り登録してくださつた方ありがとうございます
もしよろしければお名前を教えてくれませんでしょうか？

日常七転八倒編壱 同僚とは仲良くしなくてはいけません

世の中には不思議なものなどない、と名前は忘れたが昔の名のある賢者がいつていたのを思い出す。

世界に起こる物事は全て理由と仕組み、つまり因果と結果があり、理解出来ない、解明出来ないものなどないといつ。

そもそもじどうしても理解も解明も出来ないことがあればそれは、それに立ち会っている者の能力に限界があり目の前の自称の解説に足りていないとこりだけなのだと

正直なにやら傲慢なのか、それとも個々の能力を高めるよう啓蒙しているのか、あるいは回りくどい單なる謙遜なのかわかりにくいう言葉だが、今の俺の状況でもしそんな言葉を投げかけられても、その、なんだ、正直キレる。

俺の目の前には全魔族の尊敬と崇拜をその剛毅な背中に一身に背負う伝説のカリスマ、魔王様がいらっしゃる。

そしてその逞しき右臀部、つまり尻には恐らくは勇者が使っていた聖剣が雄々しく突き刺さっているのだ。

どうしてこうなった。
どうしてこうなった。

魔王様の護衛としてゴルン隊長に強制的に付かされて早3日、俺は全くこの環境に馴れることが出来ない。

そもそも魔王様は聖剣に気づいている素振りはなく普段通りに振る舞っている。

護衛として側で観察をして解つたことだが魔王様はまず排泄をしない。食べた物は全てエネルギーとして完全に消化されるようだ。そして風呂に入る習慣もない。

体の表面には常に殺菌と洗浄の恒常作動魔法が展開しているため必要がないのだ。

……たぶんそれが魔王様が聖剣に気づかない原因の一助になつたのだろう。

最も驚いたことは魔王様が椅子に座ろうとする、聖剣の刀身がグニャリと曲がり座るのに邪魔にならずなおかつ魔王様の死角にくるよう変形するのだ。

……なんなんだこの剣は？

一瞬チラリと『魔王様のアレは実は尻尾』派の説がうかんだが俺はそれを頭から振り落つた。あんな尻尾があつてたまるかよ。

「なんだ、お主は？」

それほど御館様の尻が珍しいのか？」

「何々？ ギードってそつちの趣味あんの？ ちょっと悔い改めろよお前」

色褪せた白髪を背中でまとめた白骨。人類の極東の地の戦闘民族、通称サムライの戦闘衣装である鎧と袴に身を包み、腰には同じくサムライの旗印である太刀を下げたスケルトンのムラマサ、

青ざめた顔色と顔面のつぎはぎな傷跡、質素でありながら細やかな刺繡の入ったローブと帽子をまい、首には人類で広い信仰を集める十字架を下げ杖を携えたゾンビの僧侶、グラス。アンデッド二人組がそれぞれが掠れた声と無駄に明るい口調で同時に語りかけてきた。

「……やかましいわお前ら」

「ああ、もつこつらめんべくせこ。

「の二人組、いや正確には死体だから
一遺体か？」

魔王様の護衛として3日前に配属された際に一緒に組まれたのだ。『イツらは元は人類なんだがアンデッドなので魔族側で傭兵として雇われている。

本来ゾンビやスケルトンなどは呪文で使役される存在であり、『イツらのように自由意志をもつてペラペラ喋るのは皆無なはずな』だが。

ゴルン隊長からはとかく腕が良いのと義理堅いのが気に入られて俺と一緒に護衛に配属になつたそうだ。……いや正直アンデッドとはいえ元人類を魔王様の護衛につけるってどうよ？

「ひょっとしてギードは御館様のアレが気になつてこいるのか？」

……実は拙者は『押し込むと中身が危機一髪な感じで飛び出すんだよ』派なのだが

「だからよームラマサ、それは絶対ないつて。あ、おれは『魔王様のあれは魔王様のドッキリなんだよ』派ね」

なんかこいつらまでふざけた派閥に入り始めたな……

「あんな、お前ら

俺達は護衛なんだよ、ふざけた派閥がどうの『うのより真面目に護衛しろよ…』

「心配せぬとも報酬分の骨を折る覚悟と用意はある、動搖めざるな『なに仕事はきちんとやるさ、このグラス脳みそは腐つても魂までは腐っちゃしないぜ…』

「ぐずぐずの死体共が何言つてんだよ、大体グラス…お前はホントに僧侶か？ ゾンビに神聖呪文とかつかえんのかよ…』

グラスは堂々と胸をぱり答える。

「もちのロンよー…こちとら神聖呪文から回復に補助呪文まであらかた出来るぜ。要は気合いと根性の問題よ…』

……気合いと根性で神聖呪文に耐えるアンデッドってなんだよ。それ以前にゾンビに回復とか受けたくねーよ。

なんだかどつと力が抜けた。なんで「トイシ」死んでるのに無駄に元気なんだよ？

「……ギードよ」

「はっはいイツ！」

突然魔王様に呼びかけられ、思わず声が裏返り緊張で背中が硬直する。側ではグラスが俺を見てニヤニヤ笑っていた。チクショウいつか「トイシを天に帰してやる。

「なにやら戯れているよつだが、一つ魔法医を呼んできてくれ、城の一階に医務室がある」

「ツーま、魔王様、どこか御具合が悪いのですか！？」

まさか復活が完全ではなかつたのか？ 不安が俺の胸中をおおつていく。

「何、心配など不要だ。

ただ復活してからいまいち力が出にくくてな、ふつ勇者めにやられた古傷が今頃になつて疼きよるわ」

……尻ですか？…やっぱり尻が疼くんですか？

口常七転八倒編式 怪我人の部屋の前では静かにしまじょ（前書き）

毎度読んで下さるかたありがとうございます
少し書くペースを早めてみました

日常七転八倒編式 怪我人の部屋の前では静かにしまじょ

ミシミシミシときしむ音が廊下から響く。

その音を聞き俺は魔王様の部屋の扉から待ちかねたとばかりに顔をだした。

まず目に入つたのは廊下の天井を埋め尽くす程の恐りくは今が冬だからだろう葉のない枝、そしてその下に連なる深いシワの刻まれた樹木の表面といまいち区別のつきにくい顔、そしてその顔がついた太い幹と羽織った白衣のローブ。

足に当たる根の部分はウネウネと動きながら廊下を走り、老巨木の枝や幹はミシミシと不安げな音を立てている。

魔法医を呼び、こちらに戻ってきたムラマサがその前を走つていった。

「こちらです、先生」

ムラマサが魔法医長、妖樹族の古老であるカルシムを広い部屋に引き入れた。

「ま、魔王様が一体どうされたと！？」

狼狽する古老に俺は魔王様は古傷が疼くらしくと告げた。

「つまり尻が疼くらしい

後ろから小さく呟いたグラスに肘鉄を喰らわしている間にカルシムは部屋の奥で休んでいる魔王様の元へ行き診察を開始した。

俺達はその間部屋の外の廊下で待つことにする。

しばらくの沈黙の後、普段寡黙なムラマサが珍しく最初に喋り出した。

「…御館様の負つたキズは重いものなのだろうか

「それを今診てるんだろう……」

「まーよ、なんにしようか、今魔王様が診てもらつてるキズの箇所つてよ

やめろ、グラス、それ以上喋るな言つたついでにこの世に存在

するな。

「尻、だな」

「おそらくは、尻だ」

ムラマサ、お前も相づりをうつんじゃない。しばしの沈黙が場を支配する。

「……尻、だろ?」

あああああ、俺も言つちましたよ。

「拙者の故郷ではな、合戦中に負つたキズが若い頃は大したことではなくても齢を経て古傷になると急激に悪化して命に関わることもあると聞いたことがあるのだが」

それは俺も聞いたことがある、若い時なら回復もするが負つた大傷は確実にその後の寿命を削り取つてはいるのだと。
だがな、ムラマサ。

「大怪我ならともかく尻をちよつと切つたぐらいなら問題無いんじやないか?」

「だとすればいいのだがな……」

「ギード、ムラマサ、今俺達がここで門外漢の心配しても仕方ないだろうが。まずはあの魔法医の爺さんが出てくんの待とうや」
珍しくグラスがもつともな正論を喋つた、どうやら明日世界は滅びるようらしい。

「つーかさ、今魔王様で診察中なんだよな」

「…それがどうした?」

「尻とか診てんのかな?ちょっとと覗いて…」

よし、まだ世界は終わらない。

俺の右フックがグラスのボディに突き刺さると、カルシム魔法医長が部屋から出でくるのはほぼ同時だった。

「ちょ、お医者さん!助けて、助けて!ヘルプ!!」、「…んーす

まんがワシは生きているものが本業でな、アンテッヂはひゅつと専門外なんじやよ。他いってくれ

するがグラスをにべもなく」とわるカルシム老、さすが年長者だ。

俺もかくありたい。

「あの…魔王様の古傷は悪化しているのですか?」

カルシムは穏やかな表情のまま俺の質問に答えた。

「心配はない、順調に治っているぞ。左腕の疼きも直に治まるだろう。安心しなさい」

「…そうですか、それは安心しました。

俺達も左腕の心配を……」

…左腕?

「あの古傷つて尻じや」

「さて、ワシは次の診察があるから、これで……」

足早に去りうつとあるカルシム老、その顔と動きには明らかに動搖が見える。

「ムラマサー！グラス！」

俺の呼びかけより早く反応した一人が老巨木を押された。

「…なんで左腕なんですか？　尻じやなくて？」

「知らん！　ワシや知らんぞ！　尻に剣が刺さってるなんて見えんぞ！」

枝を揺らしながら体を震わせる老巨木をムラマサとグラスが制止させる。

「…あの失礼ですが魔法医長は派閥はどうで？」

「え、ワシ？　ワシは『魔王様のアレは心の汚いやつに見えるんだよ』派じゃ

……だからか、ていうか見えてるじやねえか剣が。

「……じゃあ剣はどうでもいいですから、尻の傷はどうなんですか？」

「ああ、あんなもん浅すぎて何の問題もないわい」

「…そうですか」

ムラマサとグラスにカルシム老を放させ医務室に帰つもらつた。

「結局、古傷は大したことではないがあの剣でわかつたことは無しか

「まーよ、特に心配ないんならそれでいいじゃね？ヤバかつたらあの爺さんもなんかいうだろ」

「いやしかし、下手にあの剣に触れると中身が危機一髪な感じで飛び出すのでは……」

「いや、それはない」

グラスと俺は同時にツッコんだ。

口常七転八倒編参 食事は楽しく食べましょひ（前書き）

いつも読んで下さりてこる方ありがとうございます

とりあえず、ギャグばかりの話はこれまでで

次の話からは少しシリアスを交えたいたいと思います
ちゃんと笑えるオチはつけますけど

日常七転八倒編参 食事は楽しく食べましょ

どのような異常な状況にあらうと、一週間無事に過ごせればまず大体は馴れる、つまり適応出来ると俺は訓練兵時代の教官に習つた。その教官はさらに言つた。それ故にどれほど混乱的な状況に陥つても冷静に生き残る道を摸索せよ、と。

そして生き残り、その経験と情報を仲間に伝えるのだと。それにより全体の状況に対する対応が早まりより多くが生き残る結果に繋がるのだ。

兵士の仕事は大別すれば死しても己の役割を果たすことと、生きて情報を伝えることであり、最良の兵士とは任務を果たし必ず生きて帰る者だと教えられた。

……教官殿、とりあえず状況には馴れました、馴れましたけどね。「なんつかさ、なんだかんだで馴れたよな、魔王様のアレには」俺の傍らでグラスがチキンソテーをかじりながら咳いく。

「最初の内は面食らつたものだが、見慣れるとそれほど気に障らなくなるな」

ムラマサは酒を小さな杯でチビリチビリとやつてゐる。

……お前それウイスキーかなんか?

「まーよ、人間馴れだよ、馴れ あーゆーもんだと思えばいいのさ」氣楽に喋るグラス。俺はシチューケースをくつたパンをほおばりながら言った。

「……俺も魔王様のアレには馴れたよ。だがな、アンデッドに囮まれて昼飯食うのはどうしても馴れねえんだよ! 特にゾンビの真横つてのがな!」ここは魔王城内地下一階にある大食堂、最大で二千の人員に一斉に食事を振る舞える設備がある。

地下いっぱいに広がる巨大なスペースに所狭しと並ぶテーブル、椅子、テーブル、椅子、テーブルの規則的な海と、丈夫な赤レンガ造

りの壁に床、それらを力強く暖かく照らす照明魔法。

小綺麗に掃除が行き届いているが、テーブルクロスの薄いシミはござ愛嬌だ。

昼飯時の食堂は魔王様や幹部以外の魔王城で働く雑多な種類の魔族でじつた煮状態であり、例えるなら人種のスープ、あるいはこの世に顕現した限定体験版の力オスという状態である。

そして厨房はその混沌を超えた地獄の戦場のような状況であり、その修羅場の中で鬼神のごとく殺氣を振りまき料理をするコックたちはこの魔王城の中で魔王様の次にケンカを売つてはいけない存在だと俺に直感させた。

……アレハマジニロロサレマス。

「なんだよー、ギード？人がメシ食つてんのにガタガタ言つなんよ
グラスはチキンを咀嚼しながら言い返してきた。

「…お前、この前の昼飯に豚足手で持つてムシャムシャかじつて
たろ？あのシーンが無性になんかおぞましくて夢に見るんだよ…」
「まあまでグラスにギード、お主らは味がわかるだけ良かろう。拙
者など消化も出来なければ味もわからずで…」

俺はムラマサの杯をビシリと指差した。

「お前は昼間から休憩中に酒を飲むな！そもそも味わかんないんじ
やないのか？」

ムラマサはキュッと杯を飲み干す。

「別に酔う事は無いからな。それにゴルン隊長殿からは許可を頂いて
おる。それからな、ギードよ。

酒は鼻と舌で味わうのではない。

酒は風流を肴に魂で嗅いで心で味わうものだ
いやなんか名言ぽいこと言つてもダメだろ。それ以前に地下の食堂
で風流も何も無いだろうが。

……それから、向かいのテーブルのいかにも酒好きそうな猿人種の
オッサンが羨ましそうにお前の酒を見てるぞ。

「トロッ、と何かを置いたような音に気づいて俺は前を向いた。

俺の前には花が咲くような笑顔。

低めの背丈に紫の肩まで伸びたストレートの髪、整った顔立ちと無邪気そうな眼差しにわずかに帯びるサキュバス種独特の妖艶な雰囲気。

可愛らしさをフに美人さを3で配合したような容姿をもつ少女。

メイド服をなびかせたダメイド、アイアが俺の前に立っていた。

「あ、あの、ギードくん…これ…」

普段人懐っこく臆せずに話すアイアが珍しく恥ずかしそうにはにかんでいる。

……あれ? ここにいつのまにかなんか可愛いくな?

アイアが置いた皿からは香ばしい一品一品とトマトの香りが漂い食欲をそそる。

「あの、ブイヤベースで料理長から習つて作ったんだけど…良かつたら…味見とかお願いしたくて…」

……え、マジで? 俺でいいの? ホントに?

「あ、ああ、じゃあいただくよ、ありがとうな

ガツツポーズをしたい衝動を必死に抑え俺は料理を口に運んだ。周りからはざわめきやささやきが聞こえてくる、ふつふつふつ、存分に妬み嫉みつらみ怨みを募らせるがいい、その分俺はより光り輝

……へぶしつ

口に入れた瞬間に、一瞬殴られたかと錯覚するほどの衝撃、続いて

その衝撃が生臭さだと気づいた時には猛烈な辛さが舌を襲つ。

身動き出来ない俺にグラスが声をかける

「お、そんなうめーのか? 俺にも食わせ…おぼおつ」

バカめ、お前も道連れだ

「ぬ、おおおあおああああつ！んーつ！んーつ！」
呻き声を上げるグラス、いいぞそのまま昇天しろ。
あ、でも俺もなんかヤバいかも。

なんとか耐えきり俺は意識を保った。

「あの……ひょっとしてだめだつた？」

「いや、これは、ちょっと……」

息も絶え絶えに答える俺。

「ゴルンさん！ やっぱりだめだつたよーー！」

遠くの席にいる巨大な塊、幹部クラスでありながらなぜか食堂でのんびり食事をしていたゴルン隊長に手を振るアイア。

……えつ、やっぱり？

周りからやわめきの中から「今回もだめか……」「犠牲者はアイツか……」といつ声が聞こえる。

…今回も？

…アイアさんひょっとして何人にも試します？

「ゴルンさんが体が頑丈であまり怒らない人ならギードさんがいいつて……」

このダメイドがつ！

ていうか誰か教えるよーやっぱこの城には鬼しかいねえ！

口常七転八倒編四 下衆の勘ぐりは止めさせよ（前書き）

読んで下せりてこるかたありがとひいわこまむ
じいか「ギアード」と「ライア」の過去についてと世界観を少しあげつまむ
あとがきと下ネタです

日常七転八倒編四 下衆の勘ぐりは止めときまじょ

アイア作の「料理長直伝、ゾンビ殺しの悶絶ブイヤベース顔面殴打風味」を食べたその日の晩、俺は夜勤の護衛をしていた。

俺達護衛は普段は夜の警護は交代制にしている。いやアンデッドに寝る必要があるかなんて俺は知らないけど。

夜の廊下を昼間よりも広く寂しく感じるのは、昼の喧騒を体験している分の反動からだろうか。

だが一人廊下に立ち尽くすこの時間も退屈とはいえ、さほどキライでも無い

深夜の魔王城でもある程度は人がいる、たまに魔王様の寝室前の廊下を往来する人員を俺はやや眠くなりながらも観察していた。不意に俺の前に立ち止まる人。

メイドが一人立っていた。

セリナという妖人種で、これまた美人な顔立ちと優しそうな雰囲気の俺に近い年代の二十歳程の娘。城の中でも何度か見かけたことがあり朱龍部隊の面々でも結構人気があるメイドだ。……ぶつっちゃけ俺も好みです。

「ええと、何かご用で？」

今は夜更け、かなり遅い時間帯だ。こんな時間にメイドを呼ぶとは思えない。

「魔王様に夜勤が終わつたらいつでもいいから寝室に来なさいと……不安そうに告げるセリナ。

ええっと、それって、

俺はドアを急いでノックし魔王様に確認を取った。

「……問題はない、通せ」

俺は慌ててドアを開けセリナを通す。ドアを通るセリナの横顔に隠しきれない不安と困惑が見える。

……これは、やつぱり？

その後、おそらくは一、三時間ほど後に再びドアが開かれた。中から顔を手で覆いながら出てくるセリナ、しかし指の間から涙の後が見える。

不覚にもその色っぽい仕草に俺は一瞬見とれた。

「ありがとうございました……魔王様」一礼をして廊下を去つていく彼女を見送り、俺はドアを閉めた。

……「れはやつぱりアレですよね、魔王様？」

「そりやーお前、アレじゃね？、つかアレだな」

紅茶をすすりながらグラスは呟いた。

「ふむ……夜伽、とうやつか

ムラマサはのんびりとキセルをふかしている。

……いやお前、さつきから目や耳の穴からも煙が出てるぞ？

昼をやや過ぎた食堂からは喧騒は少なくなり、食事後の穏やかな時間が流れる憩いの場となる。

昼食を済ませた食後の休憩中、俺はなんとはなしに昨日の夜の出来事を話してみたのだ。

「拙者の生まれた所では別に城主がお付きの娘に手を出すなど珍しくはないがな？ むしろそのほうが出世も開けるし、後ぞえがないなれば正妻……この国では妃というのか？ あるいは側室……妾か愛人といつのか？ として身分もより保証されるしな

一国の王ならば側室など四、五人いても不思議はない。まあそれをしなかつた風変わりなやつもいたがな」

いや、それはわかるんだが、なんというか。

「いやな、ムラマサよ、魔王様も結構生臭い所があるんだな」とさ

俺達は魔王様の警護をここ最近やり始めたが、最初こそはその威厳と威圧感、存在感に圧倒されたが、ついでに尻の剣にも。側についてみれば魔王様はいたつてもの静かな方だった。

日中は自分の封印された五百年の間の歴史や物事、発展した魔法や文化についての本をひたすら、山ほど読みあさっていた。食事は幹部クラスとの会食をして、たまに城の中を歩き皆の働き振りを観察したり、体操代わりに庭で魔法を撃つたりする程度だ。もつとも、外を出て街を歩きたいとおっしゃっていたようだがさすがにそれは止められたようだ。そりや剣が尻に刺さっている様など一般市民には見せられないわな。

「あのな、ギード? 実は俺、昨日夜の警護だったろ? そん時に来ただよ。そのセリナちゃん以外のやつぱりかわいめのメイドの娘がさ。お前の時と同じよ三時間位で出て行つたけど」

……マジで?

「ギード、実はな、拙者はせらにその前の晩に御館様に用事を言いつけるから誰かメイドを読んでこい、と言わてな。たまたま近くを通りかかったアイアを呼んできたのだ」

「…アイアを?」

フウフ…と煙を吐き出しムラマサはキセルを置いた

「寝室で何か言いつかったアイアは部屋を出たあとまた戻ってきた。手には何かポッドとカップを持っていた。その後部屋に入つていつたが、何か騒がしくなつてな。寝室から魔王様とアイアが出て行つた」

「どういふことだ?」

カタリツと骨がぶつかる音を出し小首を傾げるドクロ。

「ただしばらくしたらまたポッドとカップを持つて一人とも戻ってきたぞ。そのあと二人で寝室に入つて、夜明けまで出てこなかつたがな」

アイアは確かに見た目はかなりいいほうだが。
：「アイツまだ十六ぐらいだつたよな？子供じやねーか。

「まーアレだ、五百年だぜ？五百年。魔王様だつて溜まつてたりなんだりするだらうさ。それにこここのメイド結構かわいい娘とか多いじゃん？そりやー魔王様もたまんねえ！てなるんじやね？」

黙れよゾンビ

魔王様が封じられた五百年の間。

人も魔族もそれなりに科学や文化や文明を発展させ、時に対峙し時に貿易や取引を成し、結果としてお互いの偏見をある程度は取り扱うことはできた。

だがそれでも憎しみと怒りと戦うという選択肢を取り扱えなかつた。

遠い存在としての敵が実は近い存在だと知ると、今度は遠かつた時とは別の、近しい故の憎しみが沸くかのように。

世界は五百年の間に人と魔族が対立と緊張、疑心暗鬼の果ての戦争、疲弊による戦争の終了と、復興と回復のためのしばらくの休戦。

そしてまた対立と緊張を経ての戦争のサイクルを数度繰り返していた。

六年前、三度目の戦争の最中に軍人だった俺のオヤジは死んだ。

その後に俺が兵士になつてから一年経つて休戦が結ばれてすぐに魔王様が復活したのだ。

戦争によつて疲れ果てた魔族の国民は魔王様の復活に大いに沸き

立つてこる。

「五百年とこり時間は長い、余りにも長い。しかしうべてを帳消しこ
できぬほど」の悠久ではないのだ。

「五百年だぜ？お前そんな我慢できるかよギード？」「…やかまし
い、だつたらお前は我慢以前にモノが腐つてゐだらうが…」

「ギード、そんなに氣になるならアイアあたりから話を聞いて
みればいいのではないか？」

「……できるか…」

「だがよつ、ギード、マリマサ、そつなるとどんでもない謎が
発生するな」

「?、なんだよ?」「……十二の最中つて尻の剣どうしてんだろ
な?」

……たしかに気になるな。

日常七転八倒編伍 解らなければ聞いてみましょう

「すらりほんやりとした実感、俺の周りが茜色の夕焼けの光で包まれている。

まだ小さかつた頃の一一番記憶に残っていた景色。俺の世界がまだ半径三メートル以内で眼に映る全てが大きく、とても大きく見えていた時。

夕暮れの夏の街並みとお袋と俺と、そしてまだ生きていたオヤジとで買い物をして歩いていた光景。

お店で買った氷菓子を懸命に舐める俺、俺の手を握りしめながら服に垂れた氷菓子の汁をハンカチで拭いてくれたお袋。

そしてその様子をじっと睨むように静かに見つめるオヤジ。

子供の頃、なぜオヤジはそんなふうに睨むのか不思議だった。
今ならなんとなくその訳がわかる、オヤジは刻みつけていたんだ。
いつ死ぬか解らぬ軍人だったから、いつまで共にいられるか解らぬから、自分の網膜に、記憶に、心に、家族の笑顔を刻みつけたかったのだ。

その時のオヤジの顔は夕暮れの逆光でよく見えない。 大き

な体格と俺と同じ青みがかつた銀髪、無精髭の生えたあご下。

だが顔がよく思い出せない、どんな表情だったのか思いだせない。

深く、深く記憶を探れば思い出せるかもしない。
オヤジの顔は……

「おい、ギード、起きる」

眼が覚めて移ったのは眼前一杯に迫ったドクロの顔。

「つおおおおえおあつ！」

絶叫を上げ、俺は飛び起きる。

「…落ち着けギード」

「ムラマサ、お前は顔怖いんだから近づけんなよ…」

「お前とて皮を剥ぎ肉をそげば似たようなものだらうが」

「普通は皮も肉もついてるのが当たり前なんだよ…」

昼食のあの休憩中、俺は微睡んでいたようだ。 食堂からはほとんど人影は消えている。奥の厨房が相変わらず騒がしいのは明日の仕込みをしているからだろうか。

「そんなことよりもほれ、アイア嬢をお連れしたぞ」

長身のムラマサの骨格の隙間から見えるメイド服、紫の髪

に人懐っこい笑顔を浮かべる少女、アイアが立っていた。

……ああ、そうだ、俺はムラマサとグラスとのジャンケンに負けてアイアから話を聞き出す役になつたんだ。

周りを見渡しふと気付く。

「…おい、グラスはどここいつた？」

「グラスは一足早く警護に戻るそつだ、後で話を聞かせてくれと言つていたぞ」

そうか、ならば好都合

「あの、ギードくん、こないだはすこませんでした… それでお話つてなんですか？」

さすがに少し元気がないアイア。

「ああ、こないだのはもういいんだ… 話つてのはさ、あーグラスのやつが聞いたがつてたんだけど… 魔王様の寝室に行つたつて聞いたけど何かあつたのかい？」

質問を聞くと俺をじつと見つめるアイア。

「ヤバい、質問をもう少し考えるべきだつた！ ああ、見るな！ そんな眼で俺を見るな！」

「あの、実は私もそのことで話したいことがあつて…」

えつ、何？何を話すの？詳しつゝか生々しい話は勘弁何だけ
ど。

「こ」の前の夜に私はムラマサさんに呼ばれて魔王様の所へ行つ
たんです。それで魔王様が『眠れないからホットワインでも作つて
着てくれ』て言われたので作つて持つてきました

…まさかそのホットワインは。

「そのホットワインは…美味く出来たのかな？」

アイアは恥ずかしそうに皿を伏せた、なにやらじもじもじとしている。

「…塩と砂糖、シナモンスティックと葉巻を間違えて作つてしまつ
て…魔王様はそれを飲んだ吐き出しました…」

…君よく殺されなかつたね。

「それで魔王様は許してくれたの？」

「はい、『お前はホットワインの作り方もわからんのか！』とお説
教を受けました」

…説教で済ましてくれたんだ。

「それで『我が手本を見せてやる』つていつて一緒に厨房にいつて
ホットワインを作つてもらつたんです」

…ちょっと待てい。

…魔王様が作つたの？

「はい、私も飲ませてもらいましたけど、すこくおいしかつたです

よ

厨房に立ち、その巨躯にエプロンをしめてホットワインを作る魔
王様を思い浮かべた…だめだ、想像つかねえよ

「それで私の分までホットワインを作つてくれて、魔王様の寝室で
一緒に飲んだんです。魔王様の部屋つて本がたづつさんあるんで
すよ」

小さな体で手をいっぱいに広げて精一杯本の量を表現するアイア。

「ああ、昼間はひたすら読書をされているからな」

実際魔王様の読書量はものすごい、荷物として山のような本が今ま

で二回ほど描いているのだ。全て部屋に入れているからあの寝室がいくら広くてもちょっとした図書室だろう。

「それで私が『凄い量の本ですね！』ていつたり『五百年封印されてから現在の世界を色々学ばなければならぬ』っておっしゃつて。それから『眠れないから何か面白い話でも聞かせろ』って『結構魔王様ムチャぶりするんだな

：それで何を話したんだ？』

「…私はあまり楽しい話とか知らなくつて、それで自分の話をしたんです。

あの、私孤兎なんです。戦争で両親と弟が死んでから親戚中をたらい回しになつてて、」

「…そうだったのか

確かに悲惨な話だが正直珍しい話ではない。両親どころか自分の命があるだけまだわずかに幸運があると言えるだろう。

「私つてあんまり器用じやないんです。だからどこでもなんだか邪魔者になつちやつて、それでメイド長がお母さんの昔の知り合いだつたそうで、そのつてで一年前からここで働き始めたんです。ここには私と同じような境遇の人たちが沢山いてなんだかすぐに馴染めました。そこまで話したら魔王様は……」

何かを思い出すよつに遠い場所を見つめるアイア。

「…魔王様は？」

「…泣いておられたんですね」

魔王様が？泣く？なぜ？確かに、アイアの話は悲惨だし不条理だ。

だがこの時代には戦場に近い街なら普通に起こり得るある種ありふれた事とも言える。

アイアは言葉を続ける

「…私はなぜ泣いているのか一瞬わからなくて、戸惑いました。魔王様はその後に『すまない』と呟いたんです

『我が五百年間封じられていなければそのような思いをする者を一

度と出させなかつた

家族を失う苦しみを誰にも味あわせなかつた』と仰つたんです

ああ、そうか

朧氣に、俺は理解した。この時代に生きる俺たちにとつて戦争で身内を失うのは悲劇がありふれたこと、よくあることだ。だが五百年前の時代から復活した魔王様にとつてそれはありふれたことではない、許すことのできない悲惨な理不尽なのだ。

それ故に魔王様は涙を流す。

失うことに馴れすぎて悲しみの感情が磨耗した俺たちの代わりに。

「魔王様はその後』やはり本を読むだけでは今の世界を完璧には理解できない

実際に暮らしているものから話を聞かなければならぬ、だが外に出ることを止められているのだ』と言われたので私は『同僚にも私と同じような境遇の娘が何人かいるからその子たちとも話してみては』と言つたんです『……ああ、そうだったのか、そういうことだったのか、クソッ。

俺はバカだ、大バカのゲス野郎だ。他人のために泣ける人物を引きずり下ろして楽しんでる最低のゲスだ。

メイドを呼び出しているのは夜伽なんかのためなんかじゃない。

「私は何人かの同僚に声をかけて魔王様に話を聞かせてほしいとお願いしたんです」

おそらくはあのセリナが泣いていたのは自分の辛い過去を話していたから、思い出していたからだろう。自らへの憤りと恥で言葉の出ない俺にアイアは語りかける。

「あの、魔王様は見た目が怖いし迫力があるけど、すゞく、すゞく優しい方なんです。だからギードさんも魔王様と話して上げてください、色んな話を聞かせて上げて下さい」

彼女の澄んだ瞳を真つすぐにつめて俺は答えた。

「ああ、わかった

俺も魔王様と話してみるよ」

アイアが去っていくのを見送ると今までじっと耳を傾けていたムラマサが口を開いた。

「魔族の王、魔王と聞くからにはどのような怪物かこの世ならざるものかと最初は思っていたが、なんと聰明かつ慈悲のある賢王であったか

「それでもなけりや五百年以上も覚えられたりはしないわ」

「所でお主が御館様と話す最初の話はすでに決まっておるのか？」

「いや、まだ決まってない」

「ではまずこの際だから尻に剣が刺さつてみるとどうかと話してみては？」

「…それは勘弁してくれ」

口常七転八倒編緯 上巻とせよべ話しあしょひ（前書き）

毎度読んで下さるからいつもありがと「アレコ」
そういう方初めてまして

一応次の話からは戦闘シーンをやつてみよつと思つてこます

日常七転八倒編緯 上司とはよく話しまじょう

対話とは大事なものだ。

基本的には対話の否定である戦闘が仕事の軍人の俺がほざくのもアレな話だが。多少いけ好かない相手でも酒でものみながらのんびり話せば打ち解けることもあるし、（無論、酒癖が悪くないことが前提だが）

長い付き合いでよく見知つたと思っていた相手でも、深く対話を重ねていくと知らない意外な一面が見えてきたりすることもある。結局の所は言葉が通じるのならば、まずは話してみた方が得でありおもしろい。

……まあ実際は俺の昔いた戦場では、第一印象で危険察知が出来ないと即死ぬのであまり悠長なことは出来ないのだが。

だがここは戦場ではないし、対話しようとする相手にはこいつらもまた対話するべく共に歩み寄らねばならない。

……それが俺たちのために涙を流す人ならばなおさら。

どうかプレッシャーで俺の胃に穴が空きませんように。

神なんぞ正直信じちゃいないが、とりえずそういう祈りながら俺は魔王様の寝室のドアを叩いた。

「入るがいい…」

静かに、しかし力強い言葉に促され寝室に入る。

まず目に入るのは詰まれた本の山、山、山、本のカタゴリーは食料生産史、戦史、魔術学、経済、統計、その他。

正直無学な俺にはその他にどんな種類があるのか見当もつかない。

部屋の中央にある豪華な天蓋のついたベッドはアイアぐらいの小

柄な背丈なら十人は寝転がれそうな巨大なものであり、魔王様はそこに腰掛けっていた。

「…座つて楽にしていなさい」

ベッドの前、魔王様の正面にある椅子に俺は覚悟を決めて腰掛けた。

「アイアから話は聞いている、我はこの時代で生きるものから一人でも多く話を聞きたいのだ」

魔王様は鎧はつけておらず、蒼穹の色をしたゆつたりしたローブを纏っている。

「…俺は何を話せばいいんですか？聞いて面白い話なんか大してしりませんし……」

青く輝く鬼火の眼差しが俺を見据える。

「話したいことを話すがいい、我は本による情報では解らぬこの時代の人人が何を思い、何を背負い生きているのかをこの耳で聞きたいのだ」

本当に書かれていることはつまりは誰かのフィルターの入った情報であり、自らの眼や耳で確かめた情報を得たいということだろうか。

静かに俺は息を吐く。

「…俺の生まれた場所はここから南のラザという街で、ひい祖父さんの代から突撃槍士として軍人やつてた家系なんです。　オヤジは、あ、いえ父は、軍人であつちこつちの戦場を回つていて、家に居ないことが多かつたからあまり顔を覚えていないんです。父が居ない間は祖父から槍術や魔術を習つていました。それで俺が十四の時に父が戦場で死んで、四年後の十八才で志願兵として入隊したんですね」

「…兵役はたしか二十歳からだつたな」

「ええ、ですけど学校をでてから軍以外の仕事なんてまずなかつたですから、だつたら最初から軍にいこうと」

「そりが……所で話は変わるがギード、お前は文字は読めるか？」
はつ？ 文字を読めるかつて、俺だつてそのぐらいは。

「……別に問題なく読めますが」

ふむ、と魔王様はアゴに手を当てた。

「そうか、では文字が読めない者を知っているか？」
文字が読めないやつ？ そんなやつ今時いるのか。

「いえ、そんな人は俺の周りにはいません。居たとしたら田の見え
ない人ですかね」

魔王様は俺の表情を読み取ったように話し出した。

「なかなか不服な顔をしているなギード、今のは別にお前を侮辱す
るために聞いたのではない。統計で今の時代の識字率が九割を越え
ていると書いてあってな、本當かと思い実際に聞いてみたのだよ。
……五百年前の識字率は公用言語を設置してしばらくほどで五、六
割程度だつたからな。なるほど、兵役のためにそこには力を入れた
ということか、そこは好都合だ」

魔王様はなにやら一人ふんふんと納得している

「ギードよ、お前は今この世界の平和と戦争のサイクルについてど
う思う？」 いきなりのスケールのデカい質問にドキリとする。

「いや、その、俺はどう思うかよりどう対応するかで精一杯ですよ

…

そんな質問をされた所で所詮は俺などただの一兵卒だ。気の利いた返答を期待されても困る。

「なるほど、現実主義な軍人らしい回答だな。……私は本や資料を
集める内にこの世界のサイクルを知った。それ故に悩んだのだ、停
戦すぐのタイミングで復活した我がこの世界の安定の形としてのサ
イクルを崩すのではないかとな

青い鬼火の視線が寂しげ落ちる。

「いや、そんな、魔王様が復活してみんな喜んでいるんですよ」

「すまんなギードよ。たがな、もし疲弊した限界状態での現在の停
戦から、魔王を脅威と感じた人類側が戦闘を続行したとしたら……

その時は互いが消えるまでの凄惨なつぶし合いだ

「……」

余裕もなく引くこともない者同士がぶつかれば確かにそうなる。「だがな、アイアや他の者たち、そしてお前の話を聞いて我的考えは変わった。そもそも統計では戦争をすることに戦争以前の最高値が徐々にストップがかかり、戦争を重ねることに戦争以前の最高値が徐々に少なくなっているのだ。そして停戦のタイミングを誤れば共倒れの危険もある。つまりこのままではジリ貧か一瞬で終わるかの一択だ。それに結局の所はな、理不尽に泣く人間を仕方ない犠牲呼ばわりするという腐れ言を吐ぐのを、我はどうしてもやりたくないのだ！」

ツ

強まる威圧感と圧縮される空気、語気に力がこもつていて。ここまで声を荒げた魔王様を俺は初めて目の当たりにした。

……所で今なんか後ろの剣がピヨコンと上にハネなかつたか？「ならば、我のすることは決まった。現在のサイクルから逸脱し別の発展への道を切り開く」

それは、つまり。

「五百年続いた戦争と平和のサイクルを……打ち破るということですか？」

出来るのだろうか、世界の定めた輪を抜けることを。

出来るのだろうか、理不尽になく誰かの涙を止めることを。

「世界が肯定する物をただ一人否といい、世界が否とする物をただ一人肯定する。その程度ができずして魔王を名乗る事はできんな」
強固なる世界の環さえも不適に嘲笑うその顔はまさに正しく、魔王。

魔王。

コンコンツ

突然に鳴るノックに俺は我に帰つた。

「もしもーし？お茶持つてきましたーー魔王様いますかーー！」

元気よく響くよく知った声、ドアから現れるアイア。

「前持つて頼んでおいたのだ、ふむちょうどいい頃合いだな」

「あー…ギードさん来ててくれたんだ！」

「あ、ああ約束だつたからな」

カップを配りお茶をいれてくれるアイア

「それじゃ魔王様どうゆつくりー

他に用事があるのか足早に寝室を去る。

「…………」

彼女のいれてくれた紅茶を前に、ブイヤベースのトラウマが俺の脳裏に克明に蘇った。息がつまり腕が止まる。

……ナニコノコウチャ、マオウサマココロワイ。

そんな俺の様子を見て魔王様が声をかけた。

「案ずるなギード、紅茶は我が直々に指導した。毒の恐れはもうない」

魔王様、正直今日はそのお言葉が一番頼もしいです。

「まずは人類側と休戦条約の拡大の提案、できれば終戦条約までに…ズズッ」

「なるほど、まずはそこからで…ズズッ」

「

「あわびゅつー！」

「ぶべらつー！」

……マズ! ツ クソマズい！ 何でただの紅茶でこんなクソマズいんだ！

「おつかしーなー、なんでこうなるんだか、おつかしーなー」

「ああ、また魔王様頭抱えちゃつたよ……」

……またなんか剣がピヨコンピヨコン動いてるんだけど、あれ

ひょつとして尻に力入れると動くのかな？

それからしばらくのち人類側へ休戦条約改正への申し出が届けられそれが受け入れられたという。

暗殺四重奏編集 これはペクー・シクではありません (前編)

いつも読んでくださっている方毎度ありがとうございます
そういう方ははじめまして

この回から戦闘シーンに入ります
書きたかったから書いてみました
あとちょっとグロいです

春の暖かい日の光が山の草木を眩しく照らし、賑やかな小鳥の囀りが耳をくすぐる。

萌える緑の香りは清々しく鼻孔を通り抜け、山間に咲き乱れる山桜の木々は森に溢れる豊富な生命を感じさせた。

やはり森はいい、最近は魔王城ばかりだったからあまり訪れていなかつたが、こういう所にくると故郷の近くにあった森を思い出す。

「おーい、俺達はいつまでここをグルグル回つてりやいいんだ？」

「そう、俺の故郷の森もこんな風のどかな所で…」

「ほひ、ここは桜が咲いているのか、風流なものだな。こういうところで一杯やりたいものだ」

後ろを振り向いて連れの一人をまじまじと観察してみた。

サムライスケルトンとゾンビ僧侶。

……なんか一気にこの森が自殺の名所みたくなつちまつたな

魔王様が議会を説得し、俺達魔族国と休戦状態の人類側の最大国、帝国との条約拡大と改正の交渉と相談の申し出が帝国側に送られて、それが帝国に受け入れられてから三ヶ月。

書簡や担当官による交渉の末に、意外なことに魔族国側の提案が大きく受け入れられていた。

そして、それを今から代表者同士の会談と調印式を行い最終決定をしようというのだ。

「しかし国際間の条約改正案がわずか3ヶ月程で決まるとは随分な速さだな」

「改正案は魔王様がほとんど作ってたからだろ」

それでも城の中で見かけた担当官は今にも死にそうな顔をしていたが。

「でもよー、なんでこんな辺鄙な所で調印式なんてやるんだよ？」

「それは帝国に聞け、俺が知るか」

帝国から指定された調印式の場所と条件、まず場所は魔族国と帝国との国境から帝国側に入ったこの森の中の教会。次に条件は調印式には必ず魔王様がくること、帝国側の代表者は第一位の皇族である副皇帝がくるということだ。

「なーこれってよー、帝国領内で必ず魔王様が来いって言つてるてことはよー」

グラスが呟く。

「帝国は暗殺ガチで狙つてるんじやね？」

……たしかにそれはある、そうなるとイヤに大人しくこちらの提案を飲んだのも頷ける。

だがあえて魔王様はそれを飲んだ。そこには俺達、朱龍部隊への信頼があるからだ。

「まあ御館様なら多少の暗殺や襲撃など自力で退ける戦闘力はあるだろうがな」

……それを言つくなよムラマサ。とつあえずは調印式にあたり魔王様の尻の剣はどうするかということになつたが、あまり大柄の護衛をつけて隠すと副皇帝に対し威圧になつてしまつ。

そこで邪魔にならない背丈のアイアに出来るだけボリュームのあるメイド服を着せて、魔王様の後ろにつかせて剣を隠すという算段でいくそうだ。

……無茶するなあ。

教会の場所は山に囲まれた森の中央広場にあり、朱龍部隊の主力はそこで警護に当たつている。

副皇帝側の護衛は意外なことに最低限ほどしかいない。

朱龍部隊の前衛役の主力上位はほぼ全員が「ゴルン隊長」のような重量級の獣人族や巨人族が占めており、正直百八十センチ、七十五キロほどの体格的には人類とほぼ同じ魔人族の俺が入る隙間はない。……いや、実力的には俺は中の上くらいだし、魔人族の前衛役では結構すごいほうなんだぞ？ ホントだよ？

話はズレたが今の俺達の任務は『狙撃魔術式を扱う暗殺者の警戒と発見、排除』である。

そのために教会から一キロほど離れた、対人狙撃に最適なポイントの山の林を警戒のためにこうしてグルグル回っているのだ。

……魔術式構築、解術、解除、魔術式構築、解術、解除、
俺の右手の中で小さな炎の球がついては消える。

「なーにやつてんだギード？」

「久しぶりに実戦かもしれないからな、今の内に魔術動作の確認だよ」

「いまさらかよ、それからお前の扱いでるそれ、馬上槍スペアだよな？」

「ああ、そうだが」

俺は林を歩きながら答えた。

今俺が扱いでいるのは二メートルほどの長さ、一メートル三十五センチの円錐形の穂先のついたスピアだ。

「馬に乗つてないのになんでそんな得物なんだよ？」

「これがうちの家系の突撃槍兵の得物なんだよ！ 敵が出たらいやでも使い方見せてやる … そういうえばお前らは魔王城来る前はどこにいたんだよ？」

ムラマサとグラスの過去の話などほとんど聞いたことがない

「…別に今と大してかわんねーよ、ムラマサと組んで傭兵やつて戦場めぐりだ」

「むしろ今の方がのんびりしたものだな、アンデッドだから飯が食えずとも死なぬ体質は戦場では便利だつたぞ」

「いや、そりゃなくてお前らがアンデッドになる前の……」

『……ザツ……ザザツ……応答せよ……』

突然入る魔術無線連絡、ゴルン隊長の声に俺達三人の間に緊張が走る。

『はい、こちら対狙撃者搜索分隊、』

『ギードか、ゴルンだ、率直にいうぞ。副皇帝が偽物と判明した。判明と同時に教会へ敵兵、およそ数は二十から三十が攻め込み現在主力部隊が外で迎撃している』

『なんだって……』

『……アイアが調印式の途中に衣装でけつまよい副皇帝にぶつかつてな、その拍子にカツラとヒゲが取れた』

『……マジっすか？』

アイア……恐ろしい娘……

『魔術探索に引っかかる原始的な変装だ、正直私も影武者である可能性は考えていたがな。それでも調印式さえ無事に済めばと思つてはいたが……』

『しかし敵兵なんてどこから…』一週間前から候隊で監視を

……

『今まで使われたことのない協力な隠密迷彩術式のたぐいだ、恐らくは秘匿技術扱いの代物だらう』ステルス

『俺達はどうします？ 狙撃者探索を続けますか？』

『……いや、この乱戦で狙撃者の有用性は薄れています。それに魔王様の防御魔術を超える狙撃を単独で行える兵士はまづいない』

『ではそちらに戻りますか？』

『ギード、実は敵兵の動きはそれほど急ではない、まるで私達の足止めを狙っている節があるようだ』

『？……まさか？』

俺もゴルン隊長の危惧に気づく。

『……あれほど協力なステルスを使うのならどうにかに、恐らくはそ

「より遠くに砲撃用の兵装を隠している可能性がある、それを探せ」

それが狙いか…

『了解』

通信を切り走り出す。

「ムラマサ、グラス、今度は狙撃者じゃなくて砲台探しだ！」

一緒に通信を聴いていた一人も動き出した。

「了解！ツ…つてどこにあんだよ！？」

「砲撃に最適な位置ならここから一キロほど向こうの山頂あたりか

？」

「やたら強いステルスなら戦人機を隠してる可能性もある…ぬかるなよ！」

走り続け林を抜ける、眼前には森の中に現れた木の生えていな
い草原。

次の瞬間、視界の右端に抜ける影、イヤな予感が脳裏をよぎつ
た

「でいっ！」

いきなり俺の頭目掛け切りかかってきたフルメイルの敵兵の斬
撃を右手に持つたスピアで辛うじて受け止める、飛び散る火花と赤
熱化した敵の剣、うつすらと見える陽炎に鼻先をかする熱。

ヒートブレイド

炎熱斬撃術式か！

「二、のっ！」

鍔迫り合いの体制から右へ剣を逸らす、空いた顔面に左拳を叩
き込みとつさにくんだ魔術式を発動。

ヒートロボム

「爆熱打撃掌術式解術」

拳から手の平ほどの大きさの魔術式による魔法陣、魔術円が発
生、けたたましい爆発音とともに高圧の熱と衝撃がヘルムの面越し
に敵兵の顔面を焼き尽くす。言葉すら發せずに顔から炎を上げ
膝から崩れ落ちる敵兵、辺りに漂う肉と髪の焼ける凄絶な臭い。
いつかいでも酷い臭いだ。

戦場で何度も嗅いだこの臭いが俺の精神を戦闘態勢へと組み直す。

「ギード、前だ」

ムラマサの声に促され顔を上げた。草原の向こうに見える数人の人影。明らかに鎧や剣で武装している。

「……やるぞ、グラス、ムラマサ」

「重装甲展開術式解術」

俺のまとうライトメイルが積層状に展開、変形しつま先から頭までを覆うフルメイルへと変わる。

「重装甲展開術式解術」

ムラマサの鎧が膨張、変形し紅い光沢が印象的な重鎧に変わる。

『隊長、応答願います。』こちら分隊、砲台警護と思われる敵兵と遭遇した。戦闘を開始する』

『わかった、だが砲台発見を最優先に……おい！アイア！落ち着け！』

なんだ？まさかアイアに何かあったのか？

『隊長！アイアに何が！？』

『いや、心配はないから……』

彼女の泣き声が聞こえてきた。

『ごめんなさい…ごめんなさい…私のせいでの戦争になつてごめんなさい…！』

……いや、お前のせいじゃないから、たぶん。

暗殺阻止演闘編式 同僚とは協力しましょつ（前書き）

今回もちょっとグロい所あります

一応戦闘シーンは次の回で終わる予定です

暗殺阻止奮闘編式 同僚とは協力しましょう

『「めんなさいー！」めんなさいー私のせいでの』

『いや、アイアのせいじゃないから』

俺は通信を切つて敵兵に向かつた。スピアを腰だめに両腕で構える。

魔術式を組み立てるために思考を巡らしながら敵のつぶさに戦力を観察。

右に4、左に3の計7人。

武装は全身甲冑のフルメイル、片手持ちのショートソード五人、長柄の戦斧のハルバート一人、中度近接攻撃魔法、……狭い森に配慮した装備。

魔術式構築、出力レベル3、出力比割合を防護5、噴射5に調節。

眼前に先行した左翼の敵兵三体が迫るのをギリギリまで引きつけて、俺は魔術式を解放すると同時に前に踏み出す。

『爆熱噴射型突撃術式解術』

背中に肩幅ほどの魔術式の構成が浮かぶ魔術円が展開。一瞬の収束のあとに一メートルほどの大きさに拡大する。中心部から極大の炎の束が盛大に噴出し、巨大な爆音を立てて爆発的に発生した推力が体を押し出す。

それと同時に俺の構えたスピアの前にも魔術円が展開、円錐形に変形し盾となる魔術防御層を形成する。

背部噴出用魔術円の作動により俺の体は急激に加速、急速に流れ始める周りの景色と重く降りかかる重力に奥歯を噛み締めた。助走を始めてから三メートルほどの距離でほぼトップスピードに達する。足が地面から離れ体勢は滑空した突撃状態に移行。

そのまま前に迫る敵兵三体に突撃、最初の一人をシールドで空高く跳ね飛ばす。二人めはランスの先端部で肩を貫き通しそのまま装甲^{（アーマー）}と肩から先を引きちぎった。

まだ突撃は止まらない。

三人め、胴体真ん中にランスを半ばまで突き立てる、手に鈍く残る命を奪う手応え。

装甲越しに聞こえる「母さん」という兵士の最後の喰き。

だつたら初めからこんな所に、戦場にくるんじゃない！

スピアに新たに魔術式を組み発動させる。

『^{ハイシェイカー・ブレイク}高周振動破壊術式解術』

ツジイイイイイイツといつ特徴的な音と手首に伝わる振動、スピア先端部に発生した高周波により兵士の胴体は分解し、破壊される。上半身と下半身が分離、突撃を続ける俺のスピアから血液、臓物、髄液、骨片を盛大に撒き散らし吹き飛ばされた。

まだ突撃は止まらない。

次、後衛にいる四人へ向かいそのまま突撃を続ける。右翼から来た四人の内の大柄な重装騎士^{（スコット）}が俺の突撃を阻止すべくハルバートを上段に構えた。

残りの騎士三人が俺への牽制のために重装騎士の後方から多弾掃射^{（ファラング）}術式を発動、魔術式によつて発生した高速かつ大量の小さな鉄の弾丸が殺到する。それにより前方に張られた俺のシールドが急速に削られて損壊、無効化したが。

まだ突撃は止まらない

すでに三人を仕留めたことによりスピードが落ち、シールドもない俺を一刀両断に切り捨てるためにハルバートが勢いよく振り下ろされる

バカめ、スピードが落ちることも計算内だ！

読み通り事前に組んでいた魔術式を発動。

『左部爆熱噴射小型術式解術』
レフテリエトロジョック

俺の左肩に一十センチ程の魔術円が展開、収束し炎の束を発生。急激な推力を生み出す。左肩に発生した推力により、ランス先端を中心にして俺の体制が右へ九十度回転。急激な体制移動に追従しきれずハルバートが俺の左を通過し地面に突き刺さる。兜の面ごしに見えるは重装騎士の驚愕。

ツーっなくそおおおつー！

歯を食いしばり足を踏みしめ、体勢を崩さないようにブレーキング、右への余分な推力を殺す。スピア先端に現れるは重装騎士の無防備なわき腹。

『爆熱噴射型突撃術式解術』
ヒートロジェットアタック

再び突撃術式を発動させ、まだ高周波の効力が残るスピアをわき腹に突き立てる。高周波振動によりグズリとした手応えと共に甲冑の装甲を分解、貫通し中の肉体をえぐり取る。破片と肉片を撒き散

らしながら加速、前進。

俺が通り過ぎた後ろで脇腹から背中にかけて、胴体の約二分の一を装甲ごとスピアによってごつそりえぐり取られ、虚空の穴を開けた重装騎士がそのまま地面に崩れ落ちた。

これで四人目！

更に残り三人を仕留めるため突撃術式を解除、ブーツのピッグを作動させる。右足のブーツから飛び出たターン用ピッグを地面に深く突き立て、勢いを殺さないように百八十度ターン。腰を低くし靴裏のスパイクで地面を踏みしめ余分な推力を抑えて無力化。三人に警戒しつつ振り向き様に構える。

敵兵の一人がこちらに剣を向け多弾掃射術式を発射しようとした刹那。

『シンテン高周振動破壊術式解術』

懷に一瞬で飛び込んだ赤の重装甲胄、ムラマサが兵士の首を瞬く間に切り落とした。

その首が地面に落ちるより速く、返す刀でもう一人を袈裟切り、高周振動の刃で装甲ごと切断。血霧を上げて斜めに上半身が崩れ落ちる。

更に切りかかってきた最後の一人の一撃を流れるような摺り足の動きで回避、喉元を閃光のごとき刺突で貫き致命傷を与えた。

それは無駄のない流麗な、まさしく達人の動き。

剣なら俺よりはるかに上だな。……ならば別れたほうが得策か。

「グラス！ムラマサと組んで砲台を探索してくれ！ 俺は別の場所を探る！」

「お主一人で行く気か？」

ムラマサが太刀を納め俺を一瞥する。

「そーかい、だつたら」

グラスがこちらに杖を向けた。

『最脚力強化術式解術』

俺の足が青い光のリングに包まれる。

「これは、速力強化魔法！」

「グラス！お前……」

「へっ、カワイコちゃん探すなら足が速いにこしたこたないだろ？」

にこやかに笑うスカーフエイス。

「お前、補助魔法ちゃんと使えたんだ……」

「……だーかーらー最初に使えるつていってんだけが、ボケナス！」

！」

ムラマサ達と別れ草原から移動して俺は山頂を目指す。グラスの速力強化魔法のおかげで進むのが速い。森林地帯を強化された脚力で飛ぶように進む。

「アイツちゃんと魔法使えたんだな……ん？」

違和感に気づき足を止め周りを見渡す。違和感は耳から感じる異音。

「ガウウン……ガウン……」

かすかに聞こえるまるで鳴くよつな、泣くよつな、特徴的な音に俺は聞き覚えがある。

「これは……魔導機関の駆動音？」

『魔導機関』

魔族と個々による体力、魔力量で劣る人類が作ったその差を埋める道具。外燃機関により燃料を魔力に変える装置。

そしてこれの駆動音が戦場で聞こえるということは戦人機がいると考えてほぼ間違いはない。

俺の眼前、約三百メートル先、山の中腹の林の風景に僅かに感じる違和感に気づく、空間が歪んでいるのだ。歪みが徐々に大きく濃くなつていく。

そしてその歪みの中から異形が現れる。全長は十三メートルほど、金属でできた全身と四対の人工の眼、のっぺりとしたフォルムの頭部と長い両腕に対し短めの脚部。

腕部は円柱であり、腕の先には五本の突起がついているが手の形はしておらず五角形状に配置されている。

そしておもつとも特筆する特徴、背中にはその身長に倍する長さの巨大な砲身。

全体を評するなら長い棒を括り付けられた巨大なサルだ。しかもメタリカルな外皮の奇形体。……いやもはやサルじゃねえな。

ヴウウオオオオオオツ……

ステルスを解いたためだろう産声のじとく駆動音が鳴り響く。
そうか、哭いているのはお前か、デクよ

あれは『戦人機』

またの名をティタンギア、そして俺達魔族は蔑称としてデクと呼ぶ。個々人の戦力で魔族よりはるかに劣る人類が作り上げた魔導機関により動く巨大な兵器。

この重量級の前衛のパワーを凌ぐ巨大兵器との戦いにより俺達魔族は個人の戦闘力ではなく、連携による戦術の重視という最大の転換を迫られた。

『隊長、こちらギード、山の中腹にて敵の戦人機と遭遇』

『ギード！逃げろ！一人では……』

『……そうもいきませんよ、あのテク、砲台を背負っています』

『……なにつ！』

『新型、つてやつでしょうね』

たしかに一人では荷が重い、だが援軍を待つ時間は無くこのまま砲撃をさせるわけにはいかない。

「やるしか……ねーか」

俺だつて軍人だ死ぬ覚悟位はつけている。

あ、部屋の入口本処分しといった方が良かつたかな？

暗殺阻止戦闘編参 無理は程々にしておこう（前書き）

毎度読んで下さる方ありがとうございます
すいません、まとめきれなくて戦闘パートが次の話に続きます
次こそは終わらせてるのでご容赦を

空気を震わし鳴り響く駆動音、戦人機はのつぺりとした外観の頭部を伸ばし、金属の体をきしませて体勢を整え始めた。林の木々を派手に押し倒し方向を転換させ、巨大な砲身の先をここから下の広場の教会へと向けサルのような前傾の姿勢で狙いを定める。

長い両腕は地面に突き立てられ、衝撃に備えるためにアンカーとして固定された。

延ばされた頭部についた四対の人工眼が不規則に目まぐるしく動き回り、精密な照準をつけるべく観測術式を作動させていく。

ステルスを使用していたから砲撃するためのデータ収集がギリギリまで出来なかつたのか？

二十メートルを超える巨大な砲身に剥き出しの魔導機関が直結され、背中に背負っていた。

砲身には光が徐々に、しかし確実に集まっていく。

チャージング？、あの戦人機、ハイリニアカノーネ高電磁加速質量弾砲撃術式による砲撃ができるのか？

だとすればまともに撃てば小さな街なら一、二発で壊滅させる威力の攻撃が教会を狙つてになることになる。

おい、冗談じゃねえぞ！

戦人機の胴体形状が余り大きくないことから恐らくは搭乗型ではなく遠隔操縦型と推測する。ならば付近には駆体操縦、動力調整、指揮、そして砲撃係の最低でも四人が潜んでいるだろう。だがその場所を探す余裕はない。

やつぱり正面からやるしかないか！

ゆっくりと息を吐き出し吸い込む。右手のスピアを逆手に持ち替え、戦人機に狙いを定めた。

位置的には丁度こちらに真横を向いている戦人機、その側頭部へ。

祈るように術式を組み、スピアに込める。前へ大きく踏み込む。全身のバネを弾ませて渾身の力を込めスピアを投げ槍の要領で投擲。風切りの音を立て勢いよく戦人機に目掛けて飛ぶスピア、それに込められた魔術式が時間差解術される。

発生した突撃術式によつて槍の後方から爆音をたてて噴射炎が発生、空中で更に急加速。約三百メートルの距離を疾走し戦人機の頭部へ着弾する。

だが着弾の瞬間に派手な火花が散りスピアがひしゃげ、壊れ、砕け散る。

やはりダメかっ！ なんとなくそんな気はしたけど！

戦人機の外装は特殊合金で構成され、起動時はさらに表面が魔術層ルートによってコーティングされる。

魔族に古来から続く個人の戦闘力を重視した戦い方を、集団戦へと変えさせたその戦闘力と防御力は生半可な攻撃を寄せ付けない。

ギヨロリツと片側の四個の人工眼が稼働、こちらを一瞥する。

俺を見ているな……、来るか！？

攻撃に備え身構える、
だが

再び人工眼が稼働し観測を再開した。

明らかに俺の存在を認めながら無視している。

俺に妨害出来る戦闘力がないと思つてんのか？

一瞬頭に血が登るのをなんとか抑える。

オーケー、いいだろ？…… 小兵「こひょう」だと思つて舐めてかかるなら後悔させてやるよ、このデク野郎が！

いずれにせよ、あの砲をまともに撃たせるわけにはいかない。魔王様の防御魔術なら耐えきれる可能性はあるが周りの者は確実に巻き込まれるだろう。

隊長、朱竜部隊の同僚、そして、

クソッ何でだよ

紫色の髪と無邪気な笑顔。

なんでこんな時にあのダメイドの顔がちらつくんだよ！

今現在使える最大の切り札を放つためにイメージを高め、静かに集中し魔術式を組む。

それは今まで使つていた突撃術式よりさらに上の、魔法を教わったじいさんから最後に覚えた術式。

あくまで緊急脱出か包囲網の突貫のみに使えと言われたが……

……今はこれしかない！

ゴルン隊長から貰つた剣を引き抜き、両腕で一直線に前へ構え鎧の腕関節部を術式で操作、強固に固定する。ミスリルの強度なら保つはずだ。

まあデク野郎、地獄を見るのは俺か、それともお前か？

呼吸を整え、術式を解き放つ。

『三重展開爆熱収束型突貫術式解術』
トライブルートロオーバードライブ

俺の背中に魔術円が四枚同時展開する。

うち三枚は右肩、左肩、背中とそれぞれに展開し火柱を上げ噴射を開始した。

そして最後の一枚はさらにその後ろに展開、三枚の噴射炎を受けてそれをより強い力に収束させる。

構えた剣に魔術円に展開し円錐形のシールドを形成。更にシールド自体を高速で回転させ、貫通力を高める。通常は単発で使用する突撃術式を三重に展開、それを別の魔術円で収束させるという究極の加速突撃術式、それ故に魔力の消耗もかなり大きい。

轟音と共に発生した爆発的な加速により助走無しに体は空中へ戦人機目掛け飛び上がった。

周りの景色が歪み一瞬で流れ、重力が俺の内蔵を突き上げて、踏みつけて、ねじ込んでくる。

「 オオオオオオオオオッ！！」

気がつけば叫んでいた。いや、そうせざるを得なかつた。しかし俺の耳には俺の声が聞こえない。

究極の突撃術式による超加速は自らの声さえも虚空に置き去りにする。

俺と戦人機との距離が一瞬で詰まる。しかし俺が狙うのは戦人機本体では無い。狙いは付属品だ。

激突の瞬間に俺が見た光景は、

巨大な砲身へ突き立つと同時に、折れず曲がらず壊れずと詠われ

たミスリルの刀身が大きく湾曲する様。

激突の衝撃に耐えきれず、折れる俺の右手首と砕ける右肩
そして、

激突の寸前に発射された電磁加速弾頭が俺の体当たりで標準がズレたためだろう、教会とは別の場所に着弾、爆発する光景だった

十四才の頃、家に兵隊が来てオヤジが戦場になつた街から撤退する味方と避難する住民の時間を稼ぐために、戦人機一體相手に足止めをして戦死したと報告にきた。

お袋は黙つて淡々と報告を聴いて、兵士が帰つた後に寝室でオヤジの服を抱きしめて泣いていた。

気丈で明るいお袋が泣いたのを見たのは後にも先にもそれ一度きりで、

俺にはその光景が目に焼き付いて、一度と忘れられない。

痛エ。

泣き出したい程の激痛とそれによる呼吸の不全で目が覚める。顔に当たる砂利で自分が地面に倒れていると気づいた。

昔の夢を……みていたのか

どうやら氣を失っていたのは一瞬だつたようだ。

砲身への激突時に弾き返された着地の際、幸運にも左肩から落ちたのだろう、左肩も砕けていた。

これも胡散臭いゾンビ僧侶にも親切に接してきた日頃の行いがよ

かつたのだろうか。

おかげで頭を打つて死なずに済んだ。そしてミスリルの強度にも助けられた。ゴルン隊長が言っていた「出来るだけ良い武器を使え」というあの言葉を今更ながら噛み締める。

痛いつうことは生きてゐることだな……

だがほほ全身を打撲しておひまともに動けそうにない。痛みで息をするのもやっとだ。

ヴウオオオオオオオオ……

突如、空気を震わせる吠え声のような駆動音。

横たわる地面から伝わる振動に気づきなんとか顔を上げる。

俺の目前約三十メートル前に立つ戦人機が俺を見つめていた。砲は砲身が歪んで使い物にならなくなつたのだろう、切り離される。

その感情の無いはずの人工眼越しにはつきりと感じる操縦者の憎悪と怒り。

へつ、一週間、下手すりやそれ以上の忍耐が水の泡になつちまつたな。……人を小兵だと思ってバカにしてかかるからだよ、サル野郎

戦人機の右腕先端が唸りを上げて高速回転、青い光を上げる。恐らくは魔術式による削岩機の類。本来は塹壕を掘るための装備だ。

巨大な、途方も無い足音を立てて前進。

行き掛けの駄賃か、あるいは憂さ晴らしか、どちらにせよ標的は俺だ。

あーあ、俺も結局はオヤジと似たような死に方かな
なぜだか、ほんの少しだけそれが嬉しかった。
緩やかに、穏やかに全てを諦めて目を閉じる。

……あー、やっぱエロ本処分しどきや良かったな。

暗殺阻止戦闘編四 意外と身近な人が高レベルだったりします（前書き）

毎度読んでくださる方ありがとうございます
やつと戦闘シーン終わりです
次からはまたバカ話再開です

暗殺阻止奮闘編四 意外と身近な人が高レベルだったりします

痛みとそれによる呼吸不全を耐えながらぼんやりと思い出す。

あー、そういうや友達に金貸したまんまだつたな。

振動と共に戦人機が巨大な足を進める。

まあいつか、今更に気にしてもな。

振動がピタリと止まる、俺は力無く戦人機を見上げた。

ブツサイクなツラしてんなあ、コイツ、あつそうだ。

唸りを上げて削岩機が天高く振り上げられる。まるで空を突くようだ。

お袋、すまない……

破壊の轟音が頭上に勢いよく迫る、俺は目を固く閉ざす。が、次の瞬間猛烈な勢いで後ろに引っ張られ投げ飛ばされた。すぐ近く、といふか眼前で巨大な破碎音と共に舞い上がった細かい破片が俺に当たる。

なん……だ!?

地面にぶつかると思った刹那冷たい何かが俺を受け止めた。状況が掴めず、受け止めた相手を確かめるため後ろを振り向くとそこには。

「よーう、ギード。しばらく見ないうちにすいぶんカッコよくなつたな？え？」

見慣れた笑うスカーフェイス。

「グラス……」

ということは、

前を向くと目の前には鮮やかな紅の重甲冑を身につけた白骨の長身。

「 ムラマサあ！」

ムラマサは戦人機から視線を外さず、太刀を構えたまま返事を返す。

「ギード、お主の死に場所はまだここではないぞ。戦場で助かるのに諦めるのは阿呆のことよ」

別の場所の探索から戦闘の騒ぎを知つてここに来たのだろう。

「つーわけで、ほれ」

『ハイリペアラ外傷高治療術式解術』

グラスの杖から暖かい光が放たれ俺の治癒能力が活性化する。

「止めろ！俺までゾンビにする気か！まだ死んでないぞ！」

「……お前なあ、こんな時まで冗談言つてる場合かアホ！」

いや、俺は結構本気だぞ。

「ギード、グラス、じゃれるのはほどほどに……」

言い終わらない内に頭上から唸りながら降り注ぐ削石機。だがムラマサはそれを一瞥もせずに、緩やかな最小限の動きで舞うように回避。そのまま回避と同時に田にも止まらぬ速さで腕を斬りつける。

が、火花を上げ鋭い金属音とともに弾かれた。

「無理だ！ムラマサ、グラス、俺を置いていつもいいから下がるんだ！砲撃を防いだ時点で俺達の勝ちだ！」

戦人機の防御力は非常に高い。ある一定レベルの前衛役と後衛役の連携によつて確実な撃破が成り立つ相手なのだ。

グラスは後衛の補助役、攻撃はムラマサの刀のみ。

いくら腕が立つと言つても軽量なスケルトンの斬撃で抜ける装甲ではない。

「ヒュー、まーたカツコいこと言ひちやつてーコイツは」 治療を続けながらグラスは軽口を返す。

「だから俺は……」 その時、標準をムラマサから俺達に変えた削岩機が眼前へ大きく迫る。

「はーい、お猿ちゃんは大人しくしてねー」

『六角状魔法障壁術式解術』

前面に配置された、魔術式によつて構成される無数の六角形の障壁が削岩機を受け止める。

派手な唸りをあげながら空中に制止する巨人の拳。

「あ、ほいっと、」 グラスが軽く手をふると障壁が外側に湾曲、削岩機を跳ね返す。急に押し戻されてバランスを崩し、轟音をあげながらたたらを踏む戦人機。

「サルモドキよ、お前の相手は拙者だ」

隙を突いて巨大な膝を駆け上がり、腕や肩を幽鬼の如き動きで飛び移るムラマサ、今度は側頭部へ飛び上がり飛燕のごとき横なぎの斬撃を仕掛けた。

先程よりずっと鋭い金属音と更に大きな火花が上がる。

俺の目の前に二つの半球形の部品が音を立てて落下、戦人機の人工眼だ。

「ふむ。末端程度ならなんとか切れるものだ」

地面に音も無く着地し、飄々と、だが鋭い殺氣を込めて咳くムラマサ。

……「ウウウウオオオオオオオツー！」

怒氣を漲らせるがごとく鳴り響く駆動音。

鋼鉄の胸部から多弾掃射術式を多重発動、個人が放つものとは比べ物にならない程の量と範囲の鉄の弾丸をムラマサめがけバラまく。だがそれさえも太刀を高速回転させて弾丸を弾き、流れるような円舞の動きによる回避運動で無効化、金属丸の乱舞を悠然と突き進むムラマサ。やがて弾丸の豪雨を抜けて、巨人の死角である足元へムラマサが到達。それを迎撃するために削岩機を振り下ろす巨人。だが紅甲冑のサムライは避けようとせず頭上へ迫る破壊の鉄槌へ太刀を構えた。

「無茶だムラマサッ！」

思わず声が出る。

地を這うような衝撃と轟音、巻き上がる土煙、だが削岩機がぶち当たつたのはムラマサで地面ではなく戦人機自身の足首。その足下にはムラマサが変わらずに佇む。

まさか、激突の瞬間に斬撃を当てて削岩機の軌道を足首へズラしたのか！

もはや俺より上じるのではない、正に魔神の如き剣の腕と度胸だ。
……一体何なんだコイツらは？

先程みたグラスの術は俺の見たことがない、だが強力な防御呪文。ムラマサの剣術は魔族軍の水準を遥かに凌駕している。

「イツらは何者なんだ？」

一人の能力は明らかに流れの傭兵の持つレベルではない。

「ほう、足首はまだ保つか？」

ムラマサは削岩機の衝突にも耐えた巨人の足首を見てのんびりとつぶやく。

「前に足首狙つて壊しまくつたからなー、改修したんじゃね？ 新型だし」

治療魔術を終え俺を肩に担ぐグラス。

……つてのんきに言つてる場合か！

「だから俺は引けつて……」

「しゃーねーや、アレやるぞ、ムラマサ。アレな」

「仕方あるまいな、今は己の未熟さを噛み締めるか

「……何する気だ、お前ら？」

グラスの指先に幾つもの光が灯る。

「まあ、まずは気難しい隣人にお近付きのプレゼントだ」

『最攻撃力低下術式解術、最脚力低下術式解術』

戦人機の両腕が光の鎖で拘束され、削岩機の回転が弱まる。両足が地面から生えた同じく光の鎖に捕らわれ動きが鈍くなる。

「ヴウウオオオツ！」

叫びを上げてもがく巨人、だが鎖は外れない。

「そして我らが主役にアクセサリーを」

『最攻撃力強化術式解術、最速力強化術式解術』

青い光の輪に包まれるムラマサの四肢。

「別にアレだけで十分なのだが」「なにやら不満そうに呟くムラマサ。

俺はまたも驚かされた。通常は同時展開出来る魔術は扱う魔術のレベルによるがせいぜい一種か二種、グラスは障壁を含め五種の魔法を同時に扱っているのだ。

「じゃあいくぜムラマサ、受け取れよ！」

グラスが渾身の精神力を込めて濃密な魔術式を構成、杖から魔術

円が少しづつ展開、拡大する。俺は魔術円に浮かぶ紋様から魔術の構成を読み取った。

「おい、グラス……その魔術は蘇生魔術か？ 死にかけているやつなんてここには……」

戦闘不能者などここには居ない。

「いるじやねーかギード、目の前にピッタリの死人がよ

『塵は灰に、灰は塵に、生命の流転よ逆しまに回れ。

父と聖靈の御名において、世界の捉よ逆しまに変われ。

超高位蘇生術式解術（リザレクションエクストラ）

グラスの杖から螺旋状にねじれた魔術円が大きく展開。 そこから放たれた強烈な光がムラマサを突き刺す。

ムラマサを中心に巻き起こる田を開けられないほどの光と豪風、だがその強力な光はどこか温もりを、吹き抜ける風は生命の息吹きを感じさせた。

本能的に理解する。

今、俺の目の前には奇跡が起こっているのだと。

風と光が收まり、その中に立っていたのはムラマサではない者、いやムラマサだった者。

まず目に入つたのは全てを吸い込むほどの虚無の闇を持つ黒髪、十メートルほどの長さの黒髪が螺旋状に空間をたゆたつている。その螺旋の中心にいるのは長身のソリッドな雰囲気を持つ女性。年齢は二十代半ばほど、まるで出来すぎた彫刻のように美しく整つた顔立ちと艶めかしい唇。

そして、その眼差しには力強い強靭な意志が宿る。

肌は降り積もる積雪を思わせる程のきめ細やかな白、じく薄く見える僅かな紅が彼女が作り物の人形ではなく、生きて血の通つた人間だと気づかせる。

身につけているのはムラマサと同じ紅の重甲冑と太刀。

吹き抜けた豪風のせいか、山間から運ばれた大量の山桜の花びらが、たゆたう黒髪と共に周囲に狂ったように舞い散る。

それが気高く美しい戦女神といった佇まいの彼女と、その前に立つ醜い鉄の巨人との対比を鮮やかに彩る。

美醜と季節が一体と成るその様はあまりに幻想的で、神話的で、まばゆく、美しく、それは正に神が描く一枚の絵画。

もはや事態が上手く掴めず呆けた表情をする俺をグラスがニヤニヤと見つめている。

「おい、グラス……あの美人はどうさん?」

「どちらさんって見りやわかんだろが。

正義の美少女魔法戦士だ」

……へえー、そうなんだ。

「つて、嘘つけテメエっ！」

「ま、あれは見ての通りにムラマサの生前の姿だよ」ともなげに言うグラス。

「アイツ……女だったのか?」

「お前それぐらい骨格で見抜けよ、レティに失礼なヤツだな。俺の特別製の蘇生術式でアイツを生前の姿に巻き戻しているのさ、三分間だけだがね。そしてその間、ムラマサがスケルトンになることで制限されていた能力が最大限に発揮できるんだよ」

もはや凄腕どころではなく訳の解らんレベルの話になってしまった。

……アンデッドを生き返させる蘇生術式なんてアリなのか?

「ふむ」

手を動かしながら体の各部をチェックする美女＝ムラマサ。

既に抜いていた太刀の刃で親指を僅かに切る。血の玉が溢れる指を静かに口元を持つて行き己の血で唇に紅を刺す。

整い引き締まつた彼女の表情が僅かに妖しく綻ぶのが見えた。その艶めかしさに俺は一瞬引き込まれ辛うじて踏みとどまる。

ああ、そうかあれは楽しんでいるのだ。骨となつた身ではもうめつたには味わえない痛みの感覚と自らの血の味を。

「どうにも時間が無いのでな、早めに終わらせて貰つゞサルモドキ

もはや骨がこするかそれ声ではなく、高く柔らかな美声で告げるムラマサ。

太刀を鞘に收め、左手で掴む。

右手を柄に触れるか触れないかの位置で固定。

そのまま足を広げ腰だめに構える。

なんだあの構えは？

剣は鞘に收めるよりも、最初から抜いたほうが早く斬りつけられるだろ？に、あの構えは何か意味があるのか？

「ムラマサは……一体何をやつてるんだ？」

「ありやムラマサの国のイアイという剣術で……まあ見てりゃわかる、いや見てもたぶん何が起きてるかわからんな」「や

……何をわけ解らん事を言つてゐるんだこのゾンビは？

一方ムラマサと対峙する戦人機はグラスによつて下げられた性能を補うために魔導炉の出力を更に上げた。

「ヴウウオ”オ”オウウオオッ！

より歪な、既に吠え声に近い駆動音を上げ両腕の削石機をフル稼働させた。巨体を震わせてムラマサに襲いかかる。

しかしムラマサは微動だにせずに構えたままそれを待ち受けた。一拍を置いてどす黒い程の巨大な殺気がムラマサから溢れ、次の瞬間には針のよう収束し、消える。

それが殺気なのではなく凶悪な程緻密な魔術式なのだと俺は今更気づいた。

『虚真流因果抜刀術式一ノ太刀解術』
トツカノツルギ

キイインという高く、遠く、透き通つて響く鎧なりの調べ。

だがムラマサが刀を抜いた様子は一切無い。いや、確かに抜こうとした動きは見た。しかし次の瞬間には、既に納刀に移っていた。一方、戦人機は両の削石機がムラマサまであと少しで届く位置でピタリと動きを止めている。

何だ？ 動力伝達のケーブルを切断したのか？ だがあれは構造上は装甲の下のハズ……

やがて戦人機は再び動きだす。

右半身が右へ。

左半身は左へ。

正中線で分かたれたそれぞれの半身が地響きを立ててゆっくりと崩れ落ち、骸となつて転がる。

十メートルを超える鉄の巨人が頭から真つ二つに切断されていた。

「 なつ、なんつ」

何が起こったのか解らず混乱が俺の頭を埋め滅ぼす。

「な、何なんだこれはっ！」

「なんなんなんなんとうるせーな、ギード。あれがムラマサの魔術式だ。因果突破型魔術ていつてな、原因、過程、結果のプロセスから過程をすつ飛ばして結果のみを起こす魔術式なんだよ」

「……なんだ、そのインチキは？」

因果突破など出来る者は世界でも本当に極限られた術式だ。

「ムラマサは『斬る』ことに特化した術式剣技を極めたサムライだから、ギリギリ出来るのさ。つまりアイツが切れると確信した物は、斬る過程を取つ払つて斬つた結果のみを押しつけられるってことだな。

ムラマサ曰わく『過程を超える結果を叩きつける魔術式ゆえ、抜刀と同時に納刀が終わり、残るは錆鳴りの音と骸のみなり』っていう技何だつてよ

「気が遠くなる、何だその反則技は。

「一体お前ら……なん……なんだ……」

ヤバい。魔力切れと傷を治すために体力を消耗したためにホントに気が遠くなってきた。

「おい、ギードしつかりしろ！ムラマサ、何か気付けになるもんないか！」

こちらに向かって歩いてくるムラマサ、三分経つただろうその肉が光と化して霧散、見飽きたスケルトンに戻る。

「おお、ウイスキーなら有るぞ」

渡された皮袋から酒を飲む、口中に広がる苦味と芳香。

「くそ、すまんな。しかし、よくこんなときに酒なんて持つてたな」

淡々と答えるムラマサ。

「ああ、普段酒飲む時に骨格の中に酒を入れる袋をつけていてな。それを持っていたからだ」

「……マジで？」

俺は酒を吐き出して倒れた。

めつやだこんな職場。

暗殺阻止奮闘編伍 人と人の縁とは不思議なものです

小鳥の爽やかなさえずりが聞こえる。

木々の木漏れ日は穏やかに優しく森を照らし出す。地面の落ち葉を踏みしめながら確実に一步一步を進んでいく。

やはり森は良い所だ

……その辺に兵士の死体が転がっていなくて、ついでに俺の体調が最悪でなければ。

「うーやバかつた、今回は本当にヤバかつた、死ぬかと思った」

「死ぬ死ぬつてよー、別に死んでねーんだからグジグジいうなよ、ギード

本当に死んだらもつときついんだぞ」

「お前の経験なんぞ聞いてねえよ

実質トドメはムラマサに刺されたようなもんだろうが

「確かに拙者の飲んだ酒だがスケルトンの時に飲んだ物だから質に変化はないぞ。 骨の間を通つただけだからな」

「だからつてそんなもん飲ますな……」

戦人機との戦闘後、ムラマサの酒にトドメを刺された俺はグラスに肩を貸され、教会で合流するべく三人で森を歩いていた。

あとすぐで教会という地点では襲撃して来た重装騎士たちが所々に死屍累々と転がっている。

うちの主力部隊と殺りあつたんだ……『愁傷様でやつだな

朱龍部隊の兵士の死体はない、主力部隊ははつきりいて体力的にも魔術式的にも重量級の化け物揃いなのだ。

それが束になつて連携戦術などをやるのだから、この程度の規模の兵士では保たない。

あちこちに出来た小さなクレーターや焼け跡がその力の差を物語つている

……それだけこの兵士達は足止め用の捨て駒なんだろうよ

場合によつては、いや最初から砲撃に巻き込んで構わないもしくは巻き込むことが前提の人材。例の副皇帝の偽物もその類なのだろう。

死体、焦げ跡、破壊の痕跡、死臭と焦げた臭い、戦争が終わつた後に又再び見ることになるとは正直思いたくは無かつた。

ここまで向かう途中で交わした通信で隊長の方の戦闘は既に終了していると連絡された、残党の類とも遭遇は無かつたのである戦人機の操縦士達以外は敵兵の恐れはまずないだろう。ていうか今きたらまず俺がヤバい。

「おい、ギード、教会が見えてきたぞ。生きてるか?」

ぐつたりと力の抜けた俺を引きずりながらグラスが笑う。

「……うるせえ、俺はまだお前の仲間にはならねえぞ」

「豪儀な台詞を言えるなら無用な心配だつたな」

ムラマサがカタカタと肩の骨を揺らした。……それ笑つてんのか?

教会についた俺達を出迎えたのはまるで丸太とタルを組み合わせたような巨大な人型の山脈、即ち隊長と主力部隊の面々、総勢三十人程。

「ギード、無事か!」

「……死ぬかと思いましたがなんとか生きてますよ。隊長」

「話はムラマサたちから聞いている、砲撃を阻止したとは大したものだ。よくやつたぞ、大手柄じゃないか！」

バシリツと音を立てグローブよりでかい手が俺の背を豪快に叩く

痛えつ

「ちょっと、隊長痛いっすよ」

「ん？ああすまんな」

ふつと周りが暗くなる、気がつけば主力部隊の面々が俺を囲んでいた。

「な、なんすか？」

「やつたなギード！」バシンツ

「よくやつたぞ！」バシンツ

「お手柄じゃねえか！」バシンツ

痛い、痛い、痛い、

「さすがだな！」バシンツ

「なんでお前アイアちゃんと仲いいんだよ」バシンツ

「アイアちゃん経由でメイドさん達からのお前の評判上がっているらしいぞ、コノヤロウ！」ガスツ

「褒美がでたらなんか奢れよ」

バシンツ

バシンバシンバシンバシンバシン

痛い、痛い、痛い痛い、

バシンガスッバシンバシンボコバシングエシツ

ブチリと俺の中で何かがキレた。

「痛いつつていってんだろうがぼけども！」

手近な獣人族、巨猿種の奴を殴りつけ魔術式を発動。

「爆熱打撃掌術式解術」

爆発音と共に火球が炸裂、しかしソイ

「つるせえ、お前は最後に蹴つただろ！第一、その出来の顔面なら

黒こげにして検閲入れてやつた方が世の中のためだ！」

一応加減はしたがここまで平然とされるとなるとやはり全力で

撃つべきだったと後悔する。

重量級の前衛主力部隊の奴らはまず種族、即ち体の出来が違う。平均身長は二メートルを越え平均体重は百三十キロ以上、全員が強力な近接術式を持ち、殴り合いと後衛の壁役を兼任する生きた巨岩だ。…………そのせいでゴツくなつた結果、モテないと嘆くやつが結構いるらしいが。

「き、気にしてることいちなよギードー。体の傷より心の傷の方が痛いし癒えないんだぞ」

「……俺はついさっきケガを治したらついでにトラウマ食らつたぞ」魔力と体力はまだ戻らないが俺の両腕は完治している。本来戦場で使う治療術式は応急処置や鎮痛が主で骨折などの重傷を治すのは戦場外で時間と手間をかけて治すはずなのだが、何故かグラスの治療術式は短時間で骨折を完治させてしまった。

ムラマサの非常識さに埋もれがちだがあのグラスも十分に異常だ。

「一か俺、アイツら居なかつたら確実に死んでたな。…………もつ少し強くなるかなあ。

「お前ら、ギードで遊ぶのはほどほどにしどけ！ギード、お前はまでは馬車で休養を取つて回復しろ。戦人機の部品回収隊を向こうに派遣させたからそれが戻り次第ここを出るぞ」

隊長、ほどほども正直止めて貰いたいんですが。

「隊長、魔王様はご無事なんですか？」

隻眼に優しげな光をともし、隊長は俺の肩に手を置いた。

「うむ、最初は敵兵の数が一、三十人ほどだったのが段階的に増えていって百人を超えるほどになったが、所詮は足止めだ。問題はなかつた。魔王様もご健在だ。

お前が砲撃を阻止した後もここに残ると仰られたがさすがにマズいのでな、今は馬車で後方に引いてもらっている。部品回収は魔王様の直々の命令だ、引き受けた連中は張り切つておつたぞ。何か帝国と繋がりのある物証を揃えられれば交渉に使えるかもしれん」

部品に入る刻印等から帝国の差し金を追求出来れば今回の一件も後の交渉のアドバンテージになるだろう。戦人機の操縦士を捕まえて証言を取れればなお良い。

「なるほど。そういえば隊長、例の副皇帝の偽者は？」

「ああ、従者一人と一緒に捕らえて魔王様と共に下がらせている。どうやら戦闘員の類ではないようだし、捨て駒では情報も持つてはいないだろうがな」

「捨て駒、ですか。……あの敵兵達は砲撃に巻き込まれるのも覚悟で俺達と戦つたんですね」

隊長の視線が近くで倒れている死体に向く、鎧から覗く死体の顔は俺よりも若く見える。

「そうだ。そしてその兵士は若く経験のない者たちだ……。それゆえに捨て駒に使いやすかったのだろうな。……殺した私が言うべきセリフではないが、こんな死に方をするために兵士になつたのでは無かるうに」

俺は、俺達は兵士だ。戦いの結果としての死の覚悟はついている。それでもこんな道具の「ごとく使い潰されて死ぬのは納得がいかない。

死ぬ為に戦うじゃない、守るものと生きたいから兵士は戦うんだ。

「……まあギード、お前はまづ休め。それが今の最優先な仕事だ

隊長に促されて俺を担ぐグラスは馬車の荷台まで俺を引かずつていいく。

「セーーと、まーまづは休めや。俺とムラマサで周りは警護しつべからよ」

「……なあ、グラス、ムラマサは、お前らは一体何なんだ？。お前らの能力は流れの傭兵どこりじやないだろ。生きていた時、一体何をしてたんだ？」

土気色のスカーフェイスは俺を見ずに答える。

「別に、俺もムラマサもほどほどに僧侶やサムライやつてただけさ。……それでそれなりに生き汚かったからアンデットなんかやつてんのさ」

普段は軽口しか吐かないグラスから強い圧力を感じて俺は一瞬口をつぐんだ。

「……過去は聞くべきじやなかつたか？」

「いや、話すほどの価値のある過去じやないだけの話や。それにヨギード」

「なんだ？」

「なんかミステリアスな過去のある男のほうが女子にもてるじやん！」

「…………やかましい」

やっぱりグラスはグラスだ。

とりあえずは馬車に到着、息も絶え絶えに荷台の扉を開ける。薄暗い馬車の室内にちよづくマットが敷いてあるのを見つけ鎧のまま倒れ込む。

あーもうだめだ、指一本動かん。……ん？

倒れた俺を見下ろす紫の髪のメイド服の少女が見える。

「……アイア、なんでここにいるんだ？。魔王様と一緒にさがつたんじゃないのか？」

「あ、あの私少しなら治療術式使えるから無理を言って残らしても
らつたんです」

「…なんで残つたんだ！。ここは危険なんだぞ。第一、主力部隊の
やつらは多少焦げたり溶けたり死んだりしても無駄にしぶといから
心配はいらないよ！」

「さすがに死んじゃつたらまずいんじゃ……。あの、私ギードさん
が戦人機と戦つてケガをしたつてゴルンさんから聞いて居ても立つ
てもいられなくて…」

…ひょっとして俺のために残つたってことか？。参つたな、怒
鳴つちゃつたよ。どうしよ。

よし、気まずい空氣をなんとかすべくまずは謝ることにしよう。

「あーさつきは怒鳴つて悪かった、アイア。ゴメンほんとゴメン。
でも、ここが危ないのは本当なんだ、それにな、……戦場なんて惨
い物をアイアみたいな子が見るもんじゃないだよ」

これは俺の本音の三分の一、もう三分の一は、

俺自身がこの子に人を殺す所を見られたくないのだ。

「『めんなさい。あの、昔知つてた人がギードさんと同じように
戦人機と戦つて死んだつて聞いてて、それを思い出して怖くなつて
…、でもほんとにギードさんが無事で良かつた…』

アイアの目尻にうつすらと浮かぶ涙に気づく。俺の心中になぜ
か浮かぶ罪悪感、まったく女の涙が凶器なら少女の涙は必殺の暗器
だ。

「…その知つてる人つてのはどんな人だつたんだい？」

目尻の涙をそつと拭いながらアイアは答える。

「私が孤児だつたつて前に話しましたよね。六年前、十才だつたこ
ろ住んでいた街に帝国の兵隊が進行ってきて、家族もみんな死んで
しまつて、一人で泣いていた時にその人に助けられて避難出来たん
です。」

「そりや、まさしく命の恩人だな」

「はい、その人は軍人で私を街の人達に預けて避難する時間を稼ぐ

からつて言つてまた街に戻つていつたんです。

おつきな槍を持つてすつごく優しい人で、なんだかギードさんに似た感じの人なんですよ。

だから、ギードさんが戦人機と戦つたつて聞いてあの人みたいに死んじゅうんじゃないかつて……不安で……恐くて……」

俺に似た? 槍を持った男? ……六年前?

「なあ、アイア。君が昔いた街の名前は……」

「今はもうないんですけど……アベルつていう帝国との国境近くの街です」

「アベル、知つている。忘れられるものか。
オヤジの死んだ街の名前だ。」

「そうか、俺はオヤジの護りたかったものを護れたんだ。言葉に出来ない何か熱いものが胸に居座り、自然と涙が溢れてくる。」

「あ、あのギードさん?、泣いてるんですか?どこか痛いんですか?治療は……」

慌てだすアイアを制止し俺は涙を拭ぐ。

「何でもない、何でもないよ。うん、少し昔を思い出しだけさ」

やつぱりもう少しじゃない、もつと強くなろう。

尋問回答暗中模索編 動 初対面の人とは礼儀正しく接しましょう

「隊長、俺が尋問役ですか？」

「そうだ。ギードよお前が適任だ」

魔王様暗殺未遂事件の後、魔王城に戻った俺は体力回復のための休養とその後のちょっととした騒ぎを経て（これは後で話す）無事日常、つまり普段の護衛任務に戻った。

そして普段のように護衛をしていた所で隊長の部屋に呼び出されたのだ。

隊長らしい無駄な物がないすつきりとした実用重視の部屋と机に、小山の如き体格の隊長が背中を丸めて窮屈そうに椅子に座っている。

「実はなギード、先日捕らえられた副皇帝の影武者とその従者を取り調べたのだが、その従者から聞いた情報では自分達は役者という演じることを職業とするもの達であり、軍属のものではないと言つてゐるそうだ」

俺は聞き慣れない言葉に眉根を寄せた。

「役者…？聞いたことが無い職業ですね、演じるというのが職になるんですか」「私もいまいち実態が掴めん。ただ物語や実際の人物を模倣して人に見せることが商売だそうだ」「なるほど、そういう技能者ですか」

ということは副皇帝を演じたのもその技能を生かしたものか。
さらに従者がいうには自分達は劇団という役者の集団でリーダーは副皇帝役の男であると。

そして帝国側と契約したその男の指示で演じたといふのだ
「ではその男はなんと？」

ゴルン隊長は深く息を吐き手のひらを額に当てた。

「名前や職業は名乗つたが後はさっぱりでな、呑喝も脅しも通用せ

ん、役者といつ訳のわからん職業につくのが勿体無い程肝が座っている」

「仕方ないなら… 自白用の魔術を使うしか無いんじゃ…」

「戦人機回収部隊が回収した部品からは刻印が抹消されていて、おまけに操縦士らしき四人は毒物による自殺体で発見されている。交渉でねじり込める証拠はなく、有力な証言は役者に頼る他はないのが現状だ。魔術による自白の強要では『自白を作った可能性』を帝國側に突かれる場合がある」

「そして軍属でない役者の「ことなど我が国には関係がない戯言だとはねつける可能性がありますね」

〔深く溜め息を吐きながらテーブルにある紅茶を一気に隊長は煽つた。〕

「回収部隊の奴らはこんなことならいつそ戦人機」と国境まで引っ張つてくれれば良かつたとボヤいていたな。まあどちらにせよ、その役者から有力な証拠に繋がる証言を引き出さねばならんのだ。」

「戦人機ごと引っ張るとは大きくてたが正直あの筋ジロか毛の先まで筋纖維のような前衛主力部隊ならやりかねない。」

「それでなんで俺なんですか？尋問なら専門が…」

「それが全く屈せんのではな。ダメ元で人族に見た目が近い魔人族で懐柔出来んかと案があつてな」

ダメ元かよ、ていうか誰だその案だしたのは、出てこい突撃くらわしちゃる。

「ギード、魔王様も問題がござりて再び開戦にならぬよつて今回のことは氣を使つておられる。」

「交渉を有利に進め、問題をござれさせないためにも、一つ頼む」

「……はあ、わかりました」

「後で尋問官から尋問の要点をわかりやすく書いたしおりを渡されるから受け取つておくよつて」

「いらねえよそんなしおり。」

「ええと、俺より隊長のほうが向いてないですか？」

「うーん、」

笑いながら両手上げて『証言しないと食べちゃうぞー』とかなんてどうですか?』

「何をバカなことを……、お前が失敗したら試しにやつてみるか」
『いけますつて、身長一メートル五十センチ、体重三百キロ超の体格でオマケに隊長の笑顔すげえ怖いっすもん。』

尋問室のある建物は魔王城の離れに併せていて、そこまでを長い廊下で本館と繋いでいる。

周りには魔術によるトラップと屈強な監視役が常に幅を利かせていた。

薄暗い廊下を歩き看守に指定された尋問室へ足を踏み入れる。

殺風景な部屋、心理的圧迫を意識した間取り壁の色、わざと薄暗く照らす魔術照明、尋問による実用性を重視した合理的な部屋だ。
……合理的過ぎて尋問する俺の方が長時間いたくないんだが。

そして次に眼にはいったのは真ん中に置かれたテーブルと椅子に腰掛けた中背の男。

年は四十代程、特徴的な鷺鼻に顔の堀が深く、その奥の眼が憤怒に燃えて俺を見据える。そして頭には髪の毛が一切生えておらず、磨いたように光沢を放ち周りには血管が一、三本浮き立っていた。肌はまるでゆで上げたばかりのように真っ赤だ。

とにかくまずはつきりとわかることはこの男は怒っている。

ああ、なるほど、そういうことか

俺は即座に状況を理解、判断した。そういうことが出来なければ戦場では生き残れないのだ。

事態解決の行動を取るべく俺はドアから頭を出し声をかけた。

「ちょっと、看守くーん！部屋間違ってるよー！」

俺が言つたのは暗殺事件で捕まつた人族の男だよ。海魔族の蛸人種の男じゃないよー！」

あ、ごめんね、おっさん部屋間違えたみたい

突然立ち上がり男は叫んだ。

「誰がタコだテメエ！俺がその人族の男のベイルだよー！」

……あれ？

尋問問答暗中模索編式　いいがげん人の言つこと信じまじょう

廊下の向こう側から新人の看守がこちらへ向かって走ってきた。

「すいません、何かありましたか？」

灰色の毛並みに垂れた耳、狼の獣人族である狼人種の青年、ブラムは俺に声をかけてきた。新入りらしい少し落ち着かない態度からどうやら彼は俺より若いようだ。

「いや、ちょっとこの人、海魔族の蛸人種だよね？　俺が言ったのは暗殺事件で捕まつた人族の男だつていつたよね？　部屋間違つてない？」

「いや、あのー、一応あの人自分で人族だつて言つてるんですよ」「自信なさそうにブラムは頭をかく。

「いや、看守くん、自称じやダメだつて、ちゃんと調べないと。あんなタコ面で人族はあり得ないよ」

「おい、聞こえてんぞ、ぼけども。いいか、俺はベイル・ギャレット。年は四十一才、職業は役者、副皇帝を演技した役者だ。そこの魔人族の若造の持つてる資料と合うだろうが！正真正銘の人族だ！」

俺は持つて來ていた資料を確認、確かにあの男の言うこと一致する。

「……俺、こいつを尋問しなきゃいけないのかなあ

「ど、とりあえずやりましょうかギードさん」

氣を落ち着け直し、対面の席に着く。看守は記録のために傍らの別の机に着いた。

「あーちょっと看守くん？」

「はい、何ですかギードさん」

「あのにいたベテランの方の看守の人いないの？」

「あー先輩は昨日から腰痛めて休みなんですよ」

「……えーどじじゃあ、尋問官あと一人来るつて聞いてる？」

「あれ、聞いてないですか？ 子供さん熱だしたから後はギードさんに任せることになりましたよ」

「……マジかよ」

「どうも俺は一人でしおりを頼りに尋問しなければならんいらしゃい。」

「あーいいか、最初に確認するぞ？ お前は海魔族の蛸人種だな？」

「だーから人族だつて言つてんだろうがアホ！ つーかまず名乗れよ！」

「このタコ礼儀に厳しいな。

「…俺はギード・ウォーカー、魔人族の青銀種で兵士をやつている。今回のお前の尋問役は俺だ、いいな？」 タコ、つまりベイルは面倒くさそうに表情を曲げる。

「嫌だつつつてもどうせやるんだろうが。たくつ役者風情にこんなもんつけるたあ魔王國もずいぶん慎重だな、あ？」

ドンッとテーブルの上に投げ出されたのはベイルの両腕、その両手首が魔術封印具でくつつけられ拘束されていた。

「ふん、悪いがそんな油断を誘うことを言つても無駄だぞ。……

蛸人種なら服の下から触手を伸ばせるからな！」

「だ！か！ら！、しつけえんだよ！タコタコでよ！ 人族にそんな機能はねえ！」

「当たり前だろ、そんなこと出来るのは蛸人種ぐらいだ

「話をきけええ！」

ベイルの赤い皮膚がさらに赤く染まる。

「もし仮にお前が人族だとしてもだな、その頭と赤い皮膚はタコ特有のものだろうが

「頭そつてんのはカツラをかぶり安くするためだ！」

「赤いのは今俺がキレてるからだよ！」

「あー、ギードさんいいですか？」

看守が声をかける。

「その人、ここに来た時は肌の色は普通でしたよ。尋問が始まつてから赤くなつたんです」

と、いうことは

「なるほど、繁殖期で体色が変化する習性が……」
ガソルと机を叩いてベイルが怒鳴る。

「だまれ、俺にそんな習性は無い。つーかもう何なんだ、その蛸人種ていうのは？ 本当にいるのか？」

いいか、最初の尋問の内は『君ひょつとして蛸人種じゃない？』くらいだつたんだよ。だがな、思い返す内にだんだん腹が立つてきたら今度は『蛸人種っぽいね？』になつてそれが『蛸人種かな？』から『蛸人種だろ？』に変わつて最終的に『蛸人種だ（確定）』になりやがつたんだよ！ コンチクショウツ！！ 悔しげにまた机を叩くベイル。 ますます肌が赤く染まる。

こいつ怒つて肌が赤くなる度に他の尋問役にもタコ扱いされてたのか。

良かつた、俺の感性は間違つてなかつたんだ。

「だがな、ベイル。蛸人種をきちんと否定する材料がないとだな……」

「だからみりや わかんだろが！」

「あーギードさん実は僕、田舎育ちであんまり人族は見たことないんですけど、爺ちゃんから一発で人族と魔人族や妖人族を見抜く方法を教わつたんですよ」

「……そりやどんな方法なんだ、看守くん？」

人族と魔人族や妖人族は髪の毛の色が違うぐらいではつきりとした人種的差はない。どうやって見抜くのか？

「ええ、酔つ払つてた時の爺ちゃんが教えてくれたんですけど……人族は足の指が右八本に左八本で計十六本あるって……なにそれ見たい。」

「よし、ベイル、ちょっと靴脱げ！」

しかしまだもベイルが叫ぶ。

「んなわけねえだろアホンダラ！　あの看守の爺さんが酔つ払つてふいたホラに決まつてんだろが！」　　なんだつまんねえ。

しかし突如看守くんが立ち上がる。

「じ、爺ちゃんをバカにするなあ！」

……君おじいちゃん子だつたんだね。

勃発した看守くんとベイルの口戦を横目にとりあえず俺は尋問を進めるために渡された、尋問の要点を書いたしおりをこいつそり取り出した。

やたらファンシーに装飾された表紙の題名は『楽しい尋問入門

懐柔編』

……やつぱり洞窟編とか洗脳編とかあんのか？これ。

最初のページをめくるとなんだか背中が痒くなるような丸文字で『ファースト ロンタクトについて』といつ文章が始まつた。

……にはどんな意味があるんだ？

『お互い初めての対面はドキドキする』ことがいつぱいー、懐柔のためには第一印象をよくするためにまず最初に工夫をこらしましょつ。

最初からこきなり険悪に圧力をかけては上手に懐 柔できないぞー』

だから には何の意味があるんだよ。

顔をふと上げるとタコと狼が激しく口論を繰り広げている。

……もつだめじやねえか。

尋問問答暗中模索編参 懐柔は計画的にやつまじょう

「タコのくせに爺ちゃんバカにするなあ！」

「どこ探しても足の指十八本ある人種なんかいるわけねえだろが！ジジイのホラをいつまでも信じてるんじゃねえよ！」

「ま、まあ待てってベイル、蛸人種だつて腕が八本あつたりするじゃないか」

「だからしつけんだよお前は！ 知るかよ蛸人種なんて！」

まますますヒートアップするタコ対狼、俺も収めようとするがもはや通用しない。この陥悪さでは懐柔しようもなくお手上げである。

どうするかなあ、これ。

とりあえず打開策を講ずるためしおりを隠れてめぐる。

おっ！『ファースト コン タクトに失敗したらこうしよう』という項目発見、早速読む。

『うつかりファースト コン タクトに失敗したら取るべきルートは二つ、

一つはいつそのまま突き進んで相手に圧迫感を与えて自白を促しちゃえ！

懐柔とはちょっと違うけど情報が取れればオールオッケー！
ワンポイントアドバイス：強い光をバックにきつめに尋問すると並みの尋問相手ならあなたの迫力にクラクラきちゃうかも、強気め風尋問官でステキ自白をゲット！』

……なんかが増えてねえか？、それから書いた奴がビミョーにムカつくんだが。だが一応はプロの言うことである、素直に従おう。

「ちょっと看守くん、照明魔術で俺を後ろから照らしてくれ。強めで頼む」

「？、はいわかりました」

後ろから看守くんが照明魔術を展開、俺を背後から照らす強い光にベイルは目をしばたかせる。

「セイ、ベイルよ」 静かにそして強く語氣に力を加え威圧感を出す。

「お前がこの最イカだらつとタ」「だらつとせんなことさせびつでもいい…」

「いや、人間のアイデンティティとしてそこは負けられないんだが」「だからどうでもいいんだよ！」とにかく他の従者役の役者からお前が帝国と契約したと……おいつ！」

「…なんだよ」目をつぶり顔を背けたベイルが返事を返す。

「じつち向けよ、目つぶんな」

「眩しくて見えねえぞ」

「これでは意味がない。

「だからじつち向けよ、話してゐる時に顔背けるのは失礼だらうが…」

「わかつたよめんどくせえな」

しぶしぶ「あらじを向くベイル、だが次 の瞬間。

「うおっ眩しつ！」

叫んだのは俺だった。後ろの光がベイルの光沢ある「ト」で反射し俺の目を直撃したのだ。

「ちょっと看守くん！切つて！魔術切つて！」

「あつはい」

光が焼き付いてよく見えない。

「看守くん気をつけろー。このタ「光学魔術使うぞー！」

「だ、大丈夫ですかギードさん！ くそ、こいつなんてタ「なんだ

！」

「いい加減にしどけよ、一体何がやりたいんだよお前らは……」

あきれ気味につぶやくベイル。

「何がやりたいって……尋間に決まつてんだらうが！」

「こんな尋問初めて受けたぞ俺は」「いい加減にしどくのはお

前だ、自分が尋問されていると直覚がなによつだなー。」

看守くんがベイルを制する。

「それにな、ちょっと変わつた尋問でもそれも個性の内つてもんじ
やないか！」

もういい掛けよつと黙れ。

尋問問答暗中模索編四 そろそろ話を進めましょっ

薄暗い部屋と灰色の壁。申し訳程度についた鉄格子付きの小窓から覗く雲一つない青空にはこの場に最も足りない物、即ち自由が満ちていた。

対面の座席に座った鷺鼻の禿頭、瘦せた体、役者を名乗るベイルは視線を俺から外さずに静かに俺を観察している。

「…………」

「…………」

「……なんだよ」

「……なんか喋れよ」

「……いや、あのよ、いつこいつのは尋問役が最初にしゃべんじゃねえのかよ?」

「……そつやつて会話の出だしを人に頼るのやめない?」

「お前尋問する気あんのか」

正直に考えると、無い。

なんでこんな天気のいい日にタコオヤジと狭い部屋に引きこもらねばならんのだ。

とはいえる隊長からの命令である以上やらなきゃいけないんだけど。

テーブルに隠しながらしおりを開く、たしかまだルート2があつたはず。それに賭けるしかない。

『ファースト コン タクト に失敗した時のルート 2』

……また星が増えてるぞ。

『一度悪くなつた雰囲気を元に戻すのはとーつて大変! こんなときは相手の状態を認識するのが大事。こちらに嫌悪を抱いている場合はその緩和を、怒りを抱いている場合はそれを忘却をせましよつ。

例えは怒りの感情は長続きしません。そして血糖値が下がると怒りやすくなります。

感情的になつてゐる時は小休止をいれて糖分を補給させたほうがいいでしょう。

尋問相手は保身と義理が常に頭の中をぐるぐると回っています。感情をクールダウンさせ、保身を考えさせてこけらに情報を提供するよりコンントロールしましょ『*ツ*』

なるほど、まずは相手のコンントロールか。

「あーちょっと疲れたな、お茶でもいれて休むか。看守くん食堂に連絡してお茶とお茶菓子もつてくれるようこつてくれ、三人分な」

「は、はあ」

早めの休憩にいまいち釈然としない看守くんにそつと耳打ちする。

「今日は懐柔が目的だ、無駄に態度を硬化させる訳にはいかないんだよ」

「なるほど、わかりました……ならアイツの好きそうな生のエビとか貝辺りをついてに頼んだ方がいいですかね？」

若いのに気がつく青年だ、実に助かる。

「そうだな、なにか適当な魚介類を頼んどいてくれ

「……おい、お前ら、なんかいま魚介類つて聞こえたんだが魔王国じゃ紅茶と一緒に魚食うのか？」

「いや、そんな習慣はないぞ」

「じゃあなんで頼むんだよ?」「あれ?。

「好きじゃないの? エビとか貝とか」

「だからいいかげんタコから離れるよ」

さて、魔術連絡無線で食堂に注文をかけ、品物が来るまでの時間をおんびりと過ごす… と行きたいがこうこう気が抜ける時こそ

うつかり情報をもらすもの、雑談を装つてベイルと話してみるか。

「なあ、ベイルあんたは役者つて名乗ってるがそもそも役者つてどういう職業なんだ？ 魔王国じやそんな職業聞いたことがないんだけど」

いぶかしんだ顔でベイルが俺を見る。

「本当にしらんのか？ やれやれ、魔王国内じや国境近くの街で何回か興行をうつたんだがな…… いいか、役者つてのはな、演じる事が仕事なんだ。お前らの所でも神話とか伝説とか民話とか色々物語があるだろ？ それを劇に仕立ててそれに登場する人物を演技するのが役者なんだよ」

物語を上演するつてことか？

「あーつまり物語の登場人物を実際に自分で表現するつてことか？」

看守くん君はどう思う？」

横で聞いていた看守くんはパタパタと尻尾を振りながら自らの見解を述べた。

「僕はなんとなくわかりますよ。あれですよ。実家で正月になると親戚呼んで宴会するんですけど、酒によつてくると隠し芸大会になつてきて、父方のおじさんのモノマネが物凄い上手いんですよ。多分役者もそんな感じのことするんじゃ……」

「ああ、なるほど宴会芸の一種か！」

「ぜんぜん違うよバカヤロウ！」

またもやテーブルを叩くベイル。備品なんだから大切にしろよタ

「。

「いいか、役者つて職業は演じる事でそれを見る人間に様々な感動を覚えさせる仕事なんだよ、田舎のおっさんのお会芸と一緒にするな」

熱く役者について語りだすベイル。なんか火が付いたぞこのタマめんどくせえ。

「宴会芸バカにすんな！ おじさんのやる二丁目の肉屋のおばちゃんのモノマネはスゴい似てるんだぞ！」

看守くん、ここにいる人間は君以外おじさんのモノマネも実物のおばちゃんも知らないから、わからないから。

再び険悪になるベイルと看守くん、第一次タコ対狼戦争の勃発を回避すべく話題を変えなければ。

「ベイル、あんたが役者だつてのはよくわかってる。そして腕のある役者だからこそ副皇帝役をやれたのも推測はつく。俺達が知りたいのはそれを命じたのが帝国側の『誰か』なんだよ。ついでにその証拠に成る物があればなあい。

大人しく応じれば、あんたの待遇もそう悪くはならないはずだ」

「…………」

沈黙、か。もつとも俺の言つたことなど前の尋問の内に何度も言われているだろうが。

「…………従者をやつてた二人はどうしてる?」

「気になるのか?」

「うちの数少ない劇団員なものでね、で息災にやつてんのか?」

「ギードさん、共犯者同士の現状を伝えるのは規則で禁じられています、答えてはダメです!」

あーそういうえばしおりの端っこにそんなことが書いてあったような……ま、いいか。聞いてないフリ聞いてないフリ。

「…………ベイル、それを伝えればお前の持つ情報を全てこちらに伝えるか?」

「ギードさん! 人の話を聞いてますか! ?」

看守くん耳元で怒鳴らないで。

「…………ああ、いいぜ。ただ条件はまだつけさせてもらひがな、先ずは……」

「…………」

「…………」

「あー、とりあえずお茶にするか」

部屋の外から響く聞き慣れた声に思わず緊張感が緩む。品物を受け取る為に扉をあけるとそこは紫髪のメイド、アイアが立つていた。

「ギードさんお仕事お疲れ様! お菓子とお茶もつて来ましたよ」
ヤバい、ベイルはアイアの顔を知っている。

「あ、ああ、ありがとうなアイア。今ちょっと立て込んでいるから、じゃあな」

アイアを急いで戻らせお茶と茶菓子のアップルパイをテーブルに並べる。

「ギードさん今のかわいい娘、知り合いなんですか? 紹介とかしてもらつても……」

しない、絶対しない。

「なあ、今のメイドって教会で魔王の近くにいた娘だよな」

チツこのタコ覚えてやがったか。

「なんだよ、もしかして計画邪魔されたから仕返しやつなんて考えてんのか?」

首を横に振るベイル。

「とんでもねえよ、あの子がボカやんなきや今頃俺は砲撃で吹っ飛ばされて生きてねえからな。仕返しどころか幸運の女神様だ」「もつともだ、アイアのミスがなければ展開はかなり違っていただろ? だがそこに『イツが義理を感じるなら、

「なあ、ベイル。実はさ、俺がその砲撃を防いだヤツなんだけど」まじまじと俺を見るベイル。

「……それで?」

「え、いやだから義理とか借りとかそういうので情報を提供しどうとかそういうのないの?」

深くため息を吐きかぶりを振る禿頭。

「ムサイ男を命の恩人と挾むより可愛い女の子を恩人と挾みたいんだよね。俺としては」

「……ああ、そうかい」

やつぱりむかつなこのタコ。

紅茶のポッドにはすでに茶葉とお湯が入れてあり、人数分の力ツプにそそぎ入れ、パイを皿に取り分ける。

むかつからタコの分のパイは比較的小さかつたやつをチョイス、ぎまーみる。

「さて、休憩が終わったら続きをやってもらうから……はつ…」

席に着き力ツプを手に取った瞬間、前回植え付けられたトラウマが脳裏を最高速で駆け上がる。息がつまり、手が震え、鼓動が増加。

モウスコシヨウスコミヨウ、ソウシヨウ。

「ギードさんどうしたんですか？…ズズッ」

「今更紅茶が嫌いとか言つつもりか？…ズズッ」

「ひでぶつ…」「たわばつ…」

椅子から崩れ落ちる一人の動きは本来速いはずなのに俺の眼にはなぜかひどくゆっくりと見えた。

「う、おおあえお！？　んー！　んー！」

床の上でうめき声を上げるベイルの声さえもひどく間延びしたゆつくりとしたものに聞こえた。マエヨリモイリヨクアガツテマスヨ、アイアン。

「な、なんだこりや、新手の捕虜虐待か！」

しばらくして回復したベイルが叫びだす。赤い頬には涙のあとがうつすらとついていた。

「お前は軍属じゃないから捕虜じゃないぞ、じつちかというと逮捕した民間人への虐待かな」

「なあさら悪いわ！……おい、ところでの看守をつきからう

「ごかないんだが生きてんのか？」

あつ忘れてた。急いで様子を見てみると泡を吹いて気絶してい
た。

ちょっと看守くん！看守くーん！。

尋問問答・暗中模索編伍 ちよつとしたことや味方が敵に回ります

「うわ、やつべ」

俺は急いで床に倒れている看守くんに駆け寄る。

「おーい！ 看守くん！ 看守くん！ 生きてるかー！」

耳元で声をかけながら彼の犬顔の類をピシヤピシヤと叩く。

「ふん……ぐるむ……うぐこりぬく……あい……あい……
はす……」

なにやら呪文めいたうわごとをいいながら口から泡を吹いていた。本来狼人種の鼻はとても鋭い、それがあだになつたのだろう。しかしそれならば飲む前に気づきそなんだが。……匂いだけはなんかいいんだよなあ、匂いだけは。

とりあえず俺はほつと胸をなで下ろす。

「良かつた……生きてる」

「いやそうこう問題じやないだろお前」

チツ、誤魔化されんかタ「め。

「とりあえず彼が落ち着くまで待つか、ベイル」

悟られぬよう表情を消し、振り向く。その先にはベイルが猜疑の視線で俺を射るように見ていた。

「お前……なんで紅茶飲まなかつたんだ？ というか、俺と看守が飲むのを確認してたよな？」

「何を言つているんだよ、ちょっと考え方して遅れただけで……」

「あ……う、ギー、ド、さん……」

苦しげにだが看守くんが声をだす。

「おお！ 大丈夫か、看守くん」

「ギードさん…… 明らかに、様子見てましたね……」

ガシリと彼の手が俺の手を掴む。ヤバいコイツにもバレてる。

いつの間にかすぐ後ろに回つたベイルが拘束された手で俺の肩

を掴む。「まあ、あれだ。……白状してもらおうが」

俺の目を直視しながら暗く静かに禿頭が呟く。

あれ？ これなんか俺が尋問される方に回つてね？

おかしいよね？ なんかおかしいよね？

二十分後、全てを白状した俺の口に煉獄風味の紅茶が流し込まれた。悶絶しのた打ちまわる俺の様を終了の儀とし尋問は終わった。

「ああ、気持ち悪い…… 看守くん、なんか俺もう帰りたくないってきた。帰つていい？」

「ダメです、まだ尋問終わつてないですから」

ピシャリと言い放つ看守くん。なんかちょっと君怒つてない？

「で、どこまで話したつけ？ たしか宴会芸がどうとか……」

「忘れんなよボケつ！ 条件と引き換えに情報を話すつていつただろつが！」

ガンッと机を叩く。だからそれ備品だから大切にしうよタ！」

「よし、じゃあ早速情報を話すんだ！」

「条件まだ話してないだろが、それ以前に条件が果たされない内に誰が話すか！」

チツ、乗つてこないか。

「だがな、ちょっと待てよ、ベイル。お前今まで何度も尋問されても言わなかつたのに、条件付きとは言えなんで今更しゃべりだすんだ？ あれか、紅茶が効いたのか？」

「んなわけねえだろ、今まで言わなかつたのはお前らの出方をうかがつてたんだよ。別にお前だからとか紅茶とかいう理由じゃねえ！」

なるほど、ベイルへの尋問は圧力や恫喝はあっても肉体的な暴力はない。紅茶？ あれは事故だ、俺だって被害者だもん。ならば比較的を中心では無い従者役の役者はそれよりキツい追求は受けては

いないと踏んだのか。

「俺の出す条件、まずは役者一人の身の安全の保証だ。そして、一応魔王国とも国交のある帝国以外の人族の国が有るはずだ。……そこに移住させてやってくれ」

「帝国以外の国か、出来ないことは無いだろ？が…… 帝国に戻らなくていいのか？」

ベイルは自嘲気味に笑う。

「今更帝国に戻っても消されるだけだ。それになあつちに戻ってもどうせ役者は満足に出来ねえよ。『演劇は退廃的であり戦争勝利の妨げである』つってな、色々妨害つけたんだよ。これがな、おかげで二十人はいた団員も今じやあの一人だけ、だからなおさらあいつらをなんとかしてやりたいんだよ」

「……何故だ、だつたら何故お前は帝国の依頼を受けたんだ？そんな物請け負う義理はないはずだろうが、金か？」 テーブルの上に置かれた両手をベイルはきつく握りしめた。

「金か、それもある。だがな若造よ俺は戦争も兵隊も大嫌いでな、正直気乗りはしなかつたよ。それでも帝国の交渉役の『この調印式を無事に執り行うことが今後の確固とした平和に繋がる』という言葉を俺は信じた。俺の演技でそれを成せるなら本望だとな、もっともフタを開けりやこの様だ。……魔王も騙した役者つて名乗りで箔がつくと思ったんだがな」

ベイルの自嘲の笑みが寂しげにより強まる。

「……ベイル、あんたは団員一人の保証をしろといったが自分のことは言わなかつたな。それでいいのか？」

「いいさ、条件は軽い方が受け入れられ易い。だがこれ以上は引かないぜ、この様でも俺は一応まだ劇団の団長だからな」

言い切ったベイルの顔には晴れ晴れとした決意が見える。夢を失い、裏切られそれでも尚この男は自らに従う者のために自らを犠牲に戦おうとしている。

タコ呼ばわりして悪かつたな、オッサン。

俺は胸中で謝った。

「わかつた、その辺は俺も上と話す。だがお前の持つている情報が証拠を握れる程のものかにもかかつていてるんだぞ」

1

正直俺もこの男を助けてやりたくなつてきたが尋問役である以上は私情に流されるわけにもいかない。

「証拠が、悪いがその辺りに繋がりそうな情報は薄いかもそれんな
まいisa、条件を通すなら偽証の証言でも何でもやってや

「うん、」

思わず叫んだ俺を見てくっくっくと喉を鳴らし笑うベイル。

「魔王軍つーのも思つたより平和なもんだな。……そしてこれが最後の条件、これは俺の私的な疑問に答えて貰いたいことなんだが」
なにやら先ほどとは違つトーンの声色。

「魔王の尻についてんの、あれなに？」

- 7 -

「おーい、聞いてんのか若いの…」

ベイルの問いかけにハツと氣づき俺は顔を上げた。

「いやな、ほらその件はえーとあれだ……」

さてどうするか。今まで魔王様の尻に刺さるアレになれて、すっかりそれが非常識なものだと失念していた。ほんと慣れつて恐ろしいもんだなあ。

「あの魔王の尻に着いてんのは一体なんなんだよ」

だからそれを口にするなこのタフ。聞けるもんなら俺が聞きたいんだよコンチクショウ！ 大体お前はアレか？ 疑問に思うと何でも口に出す子供か？ 禿げてるおっさんにも「なんで禿げてるの？」とか堂々と聞く空氣読めないガキか？

わからないことは聞けつて言つたつて時と場合と人物があるんだよ。空氣読めよ空氣を、この魔王城全体に漂つ『見て見ぬ振りをしどじつ』という空氣を読め！ 読んでくれ！

「ギードさん、ちょっとといいでですか？」

今まで黙つて聞いていた看守くんが口を開く。

おっ、あれか？ 助けか？ 空氣の読める青年で助かつた！

「実は僕も最近配属されたばつかでアレ何なのが解らなかつたんですよ。ギードさん普段魔王様の護衛しているそつじやないです、教えて下さいよ」

「えつ、お前魔王の護衛なの？ ジャあアレがなにか知つてるよなか、ん、し、ゅ、つううううおおえうつ… お前も空氣読めねえのかよ！」

つづか護衛つてバラすな、教えんな！

「よお、もつたいぶらずに教えろよ、若いの。実はあの剣みたいのが何なのが知つてんだろ？」

クソ、黙れタコボウズ。えーどどつする、知らないと答えても口

イツが他の奴に聞いた場合どうなる？……

パターン1、他のヤツに聞いた場合。派閥の変な説ならまだいい。下手すれば危険と見なされて殺される可能性がある。流石に殺されるのを放置するわけにもいかんし、肝心の情報を取る前に死なれちゃ困る。

パターン2、魔王様に直接聞きに行つた場合。一番最悪だ。とりあえずこのベイルが誰にもアレについて聞かないように丸め込まねば。しかしどうする？ どうすればいい？

「だから早く教えるよ」

「うるせえ黙れタ！」考える、考えるんだ俺。イツツベストシンキング俺。

神様降りてこい！俺の脳味噌に降りてこい！

「ああ、あれはな、……一つ確認するが、お前この件について他の誰かに聞いたりしたか？」

怪訝な表情をするベイル。

「いや、お前が初めてだが？」
「よし、いける！」

「あれはな、ある特殊な魔術に使われる道具だ。その魔術の類別は『呪術』

「呪術……呪いか？」

正直今の時代、伝説や物語に出てくる呪いのような距離を無視して相手に害を与える魔術は技術的に無いとされていた。しかし魔王様は五百年前、伝説の時代の根源であり生き証人である。

多少の常識を無視した魔術を使えると予感させる存在感がある方には有る。ならば、それを利用する。

「そう、呪いだ。自動的に発動する常識を逸脱した魔術だ。魔王様に『なんでその剣、尻に刺さってるんですか？』という類の質問をした者は、それを発動のトリガーにした呪術式により心臓を止められる。」「なん……だと……？」

「さりにこの呪いのもつとも恐ろしい所は、『魔王様の尻に着いてるの何?』という話を他の人間に話し、話をされた人間が魔王様にその会話をしたと報告した場合、話を聞いた人間を逆に辿って呪術式が発動。大元の質問をした人間が死ぬ。つまりつかり他のヤツに聞いた場合もヤバい。」

「んなデタラメな！」

いやデタラメだけどな。

「ギードさん、それほんとなんですか！？」

看守くんウソだよ。

「確かに有利得ないとと思うだろうよ。だがな、そんな理由がない限り尻にあんな物つけるわけ無いだろう？」

「たつ確かに！」

ベイルと看守くんが同時に声を上げる。完璧に信じたな。

「呪術式のトリガーでない限り、あんなふざけたバカみたいな、アホの象徴のような格好で魔王城を練り歩くわけがないだろうが！！魔王様ごめんなさいほんとごめんなさい。

「そつそんな理由が……」

赤かつたベイルの肌から血の氣が引き、頭皮には冷や汗が浮いている。

「だから命が惜しければ、この件には触れず話をすを通せ。死にたくなければそうするんだ。」

「わかった……」この件に関わるのは止める

いいぞタコ。そのまま忘れる。

「なんて恐ろしい…… 魔王様にそんな呪いが……」

なにやらうつむいてブルブル震えている看守くん。面白いから

本当のこと教えるのもう少し後にしよう。

その日はそれで終了し、その後の尋問は他の尋問官に引き継がれ

た。一応俺の口添えもありベイルの条件は正式に受け入れられ、質問にも素直に答えているそうだ。

「一、二日後、俺はまだゴルン隊長の部屋に呼び出された。

「『君の間は』苦労だったなギード、今日はベイルの件を一応お前にも報告しておこうと思つてな」

相変わらず窮屈そうに椅子に座りながら隊長が書類に目を通してい。……やっぱり椅子小さいんじゃない？

「情報提供は今の所証拠に結びつきそうな物は得られてはいない。ま、帝国側の接触者の情報は得られたがな。ベイルの条件のほうは貿易先の国と交渉中だが、まあこちらはなんとかなるだろう。それと関係ないんだが一つ気になることがあってな」 隊長の顔が苦惱に歪む。

「『魔王様のアレは実は呪いのアイテムで聞くと死ぬ』派というまたふざけた派閥が出来てな。一体誰が言い出したか知っているかギード？」

「……いえ、知りません。全然知りません。そんなヤツいたら俺がぶん殴つて止めてます」

やべえ看守くんにほんとの事いつの忘れてた。隊長「めんなさいほんとうめんなさい」。

執事襲来編巻 初対面で失礼な目にあってもキレちゃだめ

外からわずかに聞こえる鳥のさえずり、魔王城の廊下から少しずつさす春の朝日が夜の薄やもを打ち払つてゆく。

時刻は早朝、かなり早い時刻だ。現在俺は魔王様の護衛の夜勤中であり、ムラマサとグラスは当番ではないので今はいない。いくら仕事といつても普段の生活サイクルと違う深夜番は流石に眠くなる。俺の頭の中の薄もやはまだ晴れずむしろ深くなつていく。

ああ、早く交代の時間にならんかな……

誰も通らない静かな廊下。退屈と眠氣でそんなことを考えていた時だ。

カツリツ

レンガ造りの廊下に極めて小さな音が反響していることに気がついた。足音らしい。徐々にこちらに近づいてくる。しかし、交代にはまだ一時間ほど早いはず、誰だ？

カツリツ

窓から朝日がさす廊下、まとう夜の幕を陽の光でゆっくりと削ぎ落しながら音の主が向こう側から近づく。

カツリツ

まず印象的なのは魔王城ではめつたに見かけない濃紺の背広姿、上着の背中の部分が裾が一段に長く分かれている。いわゆる燕尾服というやつか。首もとには真紅の蝶ネクタイ。両手の白手袋が夜の闇に浮かび上がる。

身長は百七十センチ程、年齢は二十代半ば、俺よりやや上ぐらいか？俺と同じ魔人族、青銀種を示す青みがかつた銀髪がショートヘアにカットされている。顔立ちは端整であり、中性的。美人の範囲に入るだろう。そして珍しいことにケイ素、つまりガラスによる視力矯正具である眼鏡をつけている。今どきの魔族は多少の身体の不自由は魔術で補正できるから、そんなものをつける者は少ない

のだ。

ゆっくりとした歩調で「こちら」近づき、レンズの奥の瞳で不敵に、そして静かにこちらを見つめる。正直俺は判断に迷った。服装から判断すれば男だが、そのタイトな燕尾服に包まれた体系は出る所は出て収まる所は収まっている、砂時計を連想させる女性の体系だ。

ならば女だろうとなるだろうが、そいつの着る服から連想する職業者の性別は、大体は男である。

いや、それ以前にこの魔王城にそんな職業の人間が居たのか？

「おはよう、任務ご苦労だな」

そいつはややハスキー気味な高い声で告げた。やはり女性、らしい。

やつぱり見覚えない顔だなあ。

「わつそくだが魔王様に会いたい。扉を開けてもらおう。」

ちょっと待て、いくら魔族でもこの早朝、しかも顔の解らん奴を通すわけにはいかない。

「いや、悪いが俺はあんたに見覚えが無くてな。悪いが所属と氏名は名乗つてもらおうか」 多分女、の顔が少し怪訝な表情を取る。

「やれやれ、眞面目は結構だが次からはやらんぞ。わたくしの顔と名前をしっかりと記憶しておけ。

わたくしはアテレア・リツツファー。五百年前よりわたくしの八代前の先祖が魔王様の執事を務めて以来、代々執事の家系だ。よつてわたくしも復活した魔王様の執事を務めるべく一週間前に魔王様に謁見をしたのだ

その表情に僅かに優越感に浸る笑みが見える。

一週間前ということは、俺が暗殺未遂事件後に休養を取つて休んでいた日だ。

「魔王様はわたくしの能力を認め執事として任命された。ゆえに覚

えておけ、わたくしはお前よりも立場が上だ。下僕一郎」「

はつ？ ふざけんなこのメガネ！

執事なんぞ話には聞くが実物など見たことがない。そもそも使用人ならいくらこの城の上下関係が緩くても、兵士より上ではないだろ？

「あのな、執事だか羊だか知らんが偉ぶるのは止めてもらおうか。所詮世襲で雇われたあんたが一体どの程度の能力を持つてるというんだよ？」

ふふん、ヒアテレアは俺の反論を鼻で笑い飛ばす。

「なるほど、ならば私の能力と世襲によつて継がれた経験を下僕一号に見せてやろ？……調べた所によると最近魔王様はあまり外に出たがらず、部屋にこもりがちで気分が沈んでいるそうだな」

たしかにアテレアの言つとおり、最近なぜか魔王様はふざけがちだ。

「たしかにそうだが、それがどうした？ 理由がお前にわかるのか？」

怪しくメガネを光らせる。彼女はなにやら大仰な仕草で懐から一冊の手帳を取り出す。

表紙が古そだが『まおつさまかんさつノート』となんか丸文字で書いてあるぞ。

「これはわたくしの八代前の先祖が書き記した執事業務記録だ。つまり五百年前の書物であり、歴史書としての価値もある」

いやそれ『まおつさまかんさつノート』と書いてあるじゃないか。

「ここに書いてある英知の一つ、なぜ魔王様がふざけこんでおられるかの理由を貴様に教えてやろ？ まあわたくしを朝に昼に夕に、跪き拝め奉り賜え下僕一号」

「いいからとつとと言えよ、バカ執事」

「ふん、ならば心して聞け。この書に記される、理由として推察でもうダメだこらえきれん。

「ふん、ならば心して聞け。この書に記される、理由として推察で

ある記述、それは『魔王様は面と向かってお前キライと言わると
表面上は平氣にしているが影で結構ヘムむタイプ』だ！つ

そりや暗殺なんて『お前キライ』ってレベルじゃないよな。

つーかお前の『先祖何観察してんだよ？

執事襲来編武　昔の人を尊びましょう

……意外とナイーヴだったんだな、魔王様。

メガネをスッと指で押し上げ続きを解説するアテレア。

「因みにこの記述の内容は約五百年前、親睦のために、魔王様に『城の人間の魔王様の印象が最悪『無論大嘘』』というドッキリを仕掛けた所、ドッキリばらしを受けるまで一週間部屋に引きこもったというものだ」

「何考えてんだよ、五百年前のこの城の奴らは……。つうかネタばらしが一週間後つて長いよ！」

「ドッキリ直後は平気な御様子だったんで気づかなかつたそуд。あとドッキリ報告役を決めるのに三日間もめたと書いてある

「グダグダじやねえか！ それ以前に昔の城の人間は伝えるべきことを早く伝え……」

そこまで言いかけて俺はハツと今の状態に気づく。

「ま、まあどうしても言いにくい場合つてあるよな」

「ちなみに我が御先祖はこの時『報告役を決めるじゃんけん大会で一ヌケ出来た。うれしい超うれしい』と書き残している

「いやそこは率先していけよ！」

パタンと手帳を閉じ、仰々しい仕草で懷にしまうアテレア。

「どうかね？ 下僕一号。執事の偉大きさを身に知ったのならば、朝に昼に夕にわたくしを拝み奉り……」

「黙れボケつ！ 拝む所かいたわる価値もねえぞ。わかつたのは昔の奴らがアホやつてただけじゃねえか！」

「ふう、と溜め息をつき肩をすくめる。

「やれやれ、御先祖の偉業に畏敬を抱かんとは。過去を尊ばぬ者に未来は無いぞ？」

「さっきの話が偉業なら俺は滅びの道を選ぶぞ……」

俺は思わず頭を抱えた。何だこの執事は？　何で昔の連中は魔王様イジって楽しんでんだよ？

「ふむ、ならばわたくしの能力を知れば考えもかわるかな」

「そういうや、あんたここに来る前はどこに居たんだ？　執事つーことはどこか他の家に仕えてたとか……」

「ふつ、五百年前の魔王様封印より御先祖は魔王様以外には執事として仕えずと誓いを立てた。」

「えっ？　じゃあ……」

バツと腕を跳ね上げ、姿勢をただし叫ぶ。

「ゆえに我が家系は、会計士、銀行職員、植木屋など代々職を変わってきたのだ！つ

「全然、代々執事じやねええええつー！」

執事襲来編参 情熱つて大事です（前書き）

あけましておめでとうございます。

毎度へんなキャラばかりですが今年もよろしくお願いします。

執事襲来編参 情熱つて大事です

戦場に置いて、ワケのワカらん物に出くわすことは割とある。

しかしよく観察すれば敵方の新型戦人機だつたり、酔っ払つて暴れてた味方兵だつたり、戦場漁りやつてるただの民間業者だつたりと本当の意味で妖怪じみた物はまずない。状況に飲まれず、冷静かつ早急に観察と行動を起こせば、無闇に恐れる必要はない。

「現状観察、相手特徴『中性的かつ美人な女性、胸結構ある、自称執事、アレな態度と性格、変な本持つてる』

よし、応援呼ぼう。

通信のために耳元に手を伸ばす。が、執事がその手を掴む。

「……何すんだよ、執事さん」

「それはわたくしのセリフだ。どこにかける気だ」

振りほどこうと力をいれるがなかなか離れない。結構力あんなこいつ。

「規則でな、不審人物みたら兵隊の詰め所に連絡せんといけないんだよ。執事さん

「誰が不審人物だ！」

お前だよ、お前。

「だいたいあんた元執事でもなんでもないなら、執事としての能力なんか無いだろ。」

なんとか執事の手を振りほどく。

「その心配は無用だ。わたくしには父より教わった一子相伝の執事道があるつー」

「俺執事についてよく知らんけど、執事つてそういうもんじやないだろ！？」

「なんだよ執事道って、暗殺拳法とかじやないよな？」

「いつか復活した魔王様に再び仕える為に御先祖が残した、四八項

目に及ぶ執事教育カリキュラム、それが執事道。
わたくしはそれを全て修めてきた

割合豊かな胸を張るアテレア。

「いや実務としての執事業経験が無さやダメだろ！」

「お前の言つことは確かに一理ある。下僕一号よ」

メガネの奥の瞳を光らせ漲る決意をもってアテレアは俺に答えた。

「しかし時には賭けも必要だ。古人曰わく『当たつて碎ける』といふことわざもあるではないか」

「それはことわざじやねえっ！ 失敗するやつの捨て台詞だ！」
しかし執事はひるまない。

「確かにわたくしには執事としての経験は無い。しかし魔王様に捧げる忠誠と愛は何者にも負けずこの胸にある！」

言つてることはムチャクチャだがここまで堂々とされると何故か俺が気圧される。

「だ、だつたらセコまで言つからには何か実績でもあるのか？」

「私の『魔王様ファンクラブ』の会員ナンバーは0001で、ファンレターは週三回は出しているぞ！」

「お前はただのファンじゃねえか！」

執事襲来編四 地味な仕事が大事なんです（前書き）

お正月なのでワイルドでお送りします。

執事襲来編四 地味な仕事が大事なんです

片手を耳に付け通信をかける。

「あー、こちらギード。聞こえるか？ 不審人物が……」

「だから止めろって言つてるだろうが！」

『通信妨害途絶術式解術』

バチッという音を立て通信が途絶した。これは軍用の妨害用魔術式……

「お前、軍属か！」

静かに佇みながらゆっくりとした動作で姿勢を整える。スッと伸びられた右腕は俺に向けられ、それまでユーモラスだった執事の雰囲気がシャープなそれに変わる。

補助型魔術を使ったということは後衛の兵士だったのか？

「お前…… どこの所属だつたんだ？」

「わたくしの一いつ名は魔術師、ワイザードウイザードのアテレア。ある程度は通つた二一つ名のつもりなんだがな」

「ウイザード？ 魔術を使うことが当たり前の魔族軍においてなお魔術師なんて二一つ名がつくとは、コイツ実は相当の後衛魔術士か！？ 「わたくしの元の所属は補給の要、兵站科だ！」

「デスクワークじゃねえか！ 戦闘役じゃないのかよ！」

兵站科、基本的には戦場へ効率よく物資を補給するのが任務の部隊だ。物資の確保、優先先への配送や使用スケジュールの計算など色々苦労はあるらしいが、前線にいる身にとつては書類にハンコ押せと一々うるさい配達屋にしか見えない。

「補給をバカにするな。補給がなくては戦争なんてあつといふ間に負けるぞ」

「いや、補給の大切さは知つてゐるけどな……」

「どのような最前線でも引き受ければ、どんな依頼品も魔法のよくなつてと手練手管で確実に確保し手配する。それがわたくしのウイ

ザードの由来だ！」

「そつちの魔法使いつて意味かよ！？」

アテレアの目がキッと俺を見る。その目から見える感情は俺も戦場でよく知っている感情。つまり敵意と威嚇。

「下僕一号よ。ならばお前の名前と一緒に最近までいた戦場を語つてみろ」

「……ん？」

俺はギード・ウォーカー。最近までいた戦場はベイ

ロン平原だ」

「今の名前と戦場で魔術検索をかければ、お前が兵調科の通販で何を買ったか完璧に検索出来るぞ？」

「なっ！？」

ちよつと待て。兵站科の通販はよく利用した。特に雑誌、はつきりいうとH日本の類を。おい、まさかコイツ！？

「お前も若い男性だからなあ、色々買ってるんじゃないか？　ええ、下僕一号ことギード君？　何だつたらリストにして音読してやつても良いんだぞ？」

卑怯だ！　卑怯過ぎる！　蛇の如き視線でねめ上げるアテレア、

くそ、この女に情けはないのか！？

「ま、待て、ここは落ち着いて……」

「さあ、お前は大人しくわたくしの言葉を聞いて……　あれ？、ちよつとまで」

片耳に手を当てるアテレア。誰かからの魔術通信が入ったようだ。なにやらせわしなく話始める執事。

「ちよつと、なに？　あたしこれから魔王様に会うんだけど！　え？　鎧と剣の配達先のメモ無くした？　だからそういう時は通信で確認して、だから仕事の引き継ぎで一週間もかかるのよ。あー、もうほら泣かないで！」

なにやら後ろを向いて、ゴチャヤ、ゴチャヤと話し出す執事。じつやら前職の仕事の引き継ぎが揉めているらしい。

それから十数分後。

「じゃあね、落ち着いてやれば大丈夫だから。……さあ、奴隸一号

よ！ その扉をわたくしのために開け放つがいい！」

「お前絶対そのキャラ作ってんだろ……」

執事襲来編伍　お仕事は一生懸命やつましょう

「だから部屋に入れると言つていいだろ？」「お前みたいな不審者入れられるか！」

とつとつ強硬突破に乗り出す執事を抑えつけ、抵抗を封ずる。が、その時。

「ギードよ、朝から騒がしいが、一体何事なのだ？」

扉を開き、ローブ姿の魔王様がその姿を表した。

「魔王様！　変質者が出てたので危険ですから部屋に戻つて下せー。」

「誰が変質者だ！」

「お前だお前！」

「ふむ、お前は一週間前に現れたアテレアだな。ギードよ、この者は不審者ではなく執事だぞ」

「えつ、ホントに執事なんですか？」

拘束を逃れたアテレアが立ち上がる。

「サイン下さい！　魔王様！　おはよづいざれこますー。」

「いやお前順番おかしいだる」

「それにサインは確かに一週間前にも書いたと思つが」

困惑気味に魔王様が咳く。執事、お前何枚サインもいらつ~~ハ~~だ？

「こ、ここ今回は、しきつしきつしきつ執事に取り立てて」

「アテレアよ少し落ち着いて話すがいい」

「お前いくらなんでもかみすぎだら……」

ガチガチじやねえかコイツ。

「し、執事に取り立てて頂いて一生の幸せにこの身が恩義に震えて

おります！　さあなんなりと御命令を下せいませ、魔王様！..」

お、今度はまともに言えた。

「そつか、ならばアテレアよ。汝に最初の命を下せり……」

「はつ！　なんなりと！」

跪く執事の顔に明るい笑みが見える。あー、相当嬉しいんだなあ

りや。

「一階にそろそろ新聞が届くから持つてきなさい。」

ペシッと執事の背中が固まる。お、なんだ、イヤなのか?
用はイヤなのか?

スッと立ち上ると姿勢を整え一礼するアーレア。

「かしこまりました。魔王様」

そして俺のほうへ向き直る。

「どうわけで、行つてこい下僕一郎!」

「お前が行つてこいやー!」

雑

聖剣伝番外編 狂骨が歌うは兵の夢痕【キヨウコウシガウタウハツワモノノコメ

極一部で人気のあるムラマサメインの過去番外編です。

ギャグが殆どないので「コメディなんだから笑わせる話だせよ
上屋ア！」と思つた方は読まないで上げて下さい。やや重めな話で
すから。

聖剣伝番外編 狂骨が歌うは兵の夢痕【キヨウハウシガウタウハツワモノノコメ

レンガ造りの壁と床、そこいらのテーブルでは暇を持て余した何人かの兵隊が、菓子でもつまみながら茶をすすっている。時刻は午後二時、昼食も終わり混雑激しかった戦乱時代の食堂にもようやく安寧と平和が訪れる。

「ギードさん、このベリーパイすごくおいしい！」

俺の傍らではアイアが満面の笑みでパイを味わっている。

「ああ、魔王城で作っている菓子は上等だな」

実際、砂糖やバターをケチらず作っている魔王城産の菓子はまさしく素晴らしい出来だ。俺は元は辛党だったのだが、戦場にいた二年間ですっかり甘党になつた。戦場をある程度経験していると誰でも甘党になるそうだ。向こうじゅ甘味は貴重だからな。

流石にレーショングルーツケーキ（保存のためガチガチに乾燥してある）を巡り殴り合いをしている兵士を見た時はどうかと思つたが。

「ふむ、やはり味覚という感覚は貴重だ。アイアの表情を見れば見るほど痛感させられる」

対面でチビチビと酒を飲む戦装束の白骨、ムラマサがしみじみと呟く。

そういうえばムラマサの性別は女性、しかも生前はかなりの美人。甘い物が好きだったりしたのだろうか。

「あの、ムラマサさんこれ良かつたら……」

なんだか申し訳無さそうにケーキの皿をムラマサに差し出すアイア。

「アイア、ムラマサは味覚がもうないんだよ」「何、気にするな。味覚があるのが懐かしく思えただけだ。それに拙者は甘い物は苦手でな」

なんとも気まずい一瞬の沈黙。こそ、こんな時に限つてグラスは

どつかいってやがる。

「あのムラマサさん…」

突然話かけるアイア。お？なんか和ます話題でもあるのか？

「ムラマサさんって生きていた頃、どんなだつたんですか？」

俺は思わず飲みかけた紅茶を吐き出しかけた。いや確かに気に入るけど…！

「ギードさんやグラスさんがムラマサさんは生きている時はスゴい美人だつていつてたからなんだか気になつて……」

「さあ、己の顔など大して気にした事もないからな……それにあれは過去の姿。今はこの骨身をさらした姿が拙者の全てだ」

小さな音を立て杯をテーブルに置く。

「拙者が生きていた頃、あれはもう五、六十年は昔になるか」

そう呟くとムラマサは過去を語り出した。

拙者が生まれたのはヒノモト、ムサシノクニの武将の家だつた。当時は群雄割拠、戦乱の時代。領地こそは狭いが拙者の家は武芸で土地を守り続けていた。

拙者は一番末の生まれでな、兄は六人いた。普通の家は末の娘は丁寧に育てられるらしいが、拙者はどうもそれが性に合わなくてな、兄達の武芸の練習に混じつて腕を磨くのが嫁修行より好きだつた。

やがて十三の頃、家の者と混じり拙者も合戦に出るようになつた。幾つかの生死をぐぐり抜けて魔術剣技を研ぎ澄ます内に、才能とうやつなのか、気がつけば拙者は武勇に優れる兄達よりも強くなつていたよ。

まあ顔は良かつたほうみたいだからな、求婚の類はそこそこきたのだ。ただ当時の拙者はいさか癖が悪くてな。

いかにも箱入りの姫らしくシナをつくり、「妾より強きサムライの方でなければ嫌でござります」とちょっと弱々しい口調で言ってや

る。するとホイホイ腕自慢をしにやつてくる者達を、本性あらわして木刀で滅多打ちにしてやるのが趣味だつた。いやあ、あれは結構ハマつたな。……なんだか話がずれた。

しかし近くの土地まで当時勢力を拡大していた武将がいてな。少ない手勢を率いて兄達はその武将と戦い全員散つていつた。武士らしく勇ましい最後だつた。

拙者はならば自分が家督を継ぎ、家を守ろうとしたがそれは周りに止められた。女の身で家長を継ぐことまかりならんとな。

変わりに言い渡されたのは別の勢力だつた武将、タチバナの当主に嫁ぎ同盟を組めというものだ。正直腹立たしかつたが、無理をすれば家は分裂し、消える。兄達が命掛けで守つた家を守りたかつた。だからそれに従つた。

ただ、無能ならば斬り捨ててタチバナの実権を取つてやろうとは考えてはいた。

そしてそれがアイツとの出会いだつた。

嫁入りの日は忘れもしない。桜が乱れ咲く四月の終わり、顔合わせもせずに婚礼が行われた。タチバナの当主は稀代の軍略家であり、武勇にも優れるサムライであると前評判で聞いていた。

ならばどのような大男か、豪の者かと身構えて会つてみれば、考えていたのとはとんと違つていたわ。

背は高いが、骨格は華奢、顎も細く、手足も筋肉が無い。明らかに戦場「いくわば」に立つ風体ではないのだ。おまけに前髪の頃も過ぎたところにマゲも結わらずもじゅもじゅとした髪をしていた。顔つきもどちらかというと女子「おなご」のようだな。そのくせなんだか捉えどころの無い性格のヤツだつたよ。

婚礼用の白無垢に角隠しの拙者の顔を覗きこみ、

「儂がタチバナ当主、タチバナソウカクじゃ。お主がシロツキの所のスズガネか？ 戦場で千を斬つた鬼姫の鈴鐘と聞いていたが、まるで菩薩か女神のような顔だのう

などと抜かすから思わず。

「ならばお主の知る菩薩や女神はこういうことをするのかな」

そう言い放つたあと拙者は隠し持っていた鉄扇でそいつをぶん殴つた。それが拙者とアイツの交わした初めての会話だったよ。

……え？ なぜ殴ったか？ いやあ、あの時何故か腹が立つてな。まだ若かつたから照れていたのかもしれん。

ともかくアイツは顔にアオタンをこさえたまま婚礼の儀を行つことになったのだ。今思えばアイツもなかなか骨があつたな

アイツ、ソウカクが二十で拙者が十七の頃だった。

その後拙者は嫁として家の事をする…と思つていたのだが違つた。拙者が良しとするならば戦場に立つて良しとアイツが言いおつてな。正直家の事などやりたくないなかつた拙者はアイツが指図するままに戦場で戦働きをしたよ。

アイツの前評判は全部大はずれだ。ソウカクは武功はからつきしだつた。そして軍略に優れる。これも大嘘、アイツは……優れる所か天才、鬼才の類だつたよ。ソウカクの立てた軍略に従い、周りの武将と手を組み足を組み、適度な所で裏切りをかまし、ある時は水責め、ある時は兵糧責めで城を開城させ、といった具合で戦を駆け抜けた。アイツは女という身で拙者を侮らず、誰よりも正しく拙者の価値を評価し、活用してくれたのだよ。

別に道具として見られていても構わなかつた。アイツが一番拙者を拙者らしく生きられる場所をくれる。それで十分だつた。そして気がつけば拙者は…… アイツを愛し初めていたのだ。

だが戦場にいていつまでも無事ではすまん。ある城を責め、宝物庫で一振りの刀、奥州震電左右衛門之条刃沙羅村正《オウシユウシンデンザエモンノジョウバサラムラマサ》という銘の太刀を手に入れてな。意氣揚々と城を出た所で狙撃術式で撃たれたのだ。

三日間眠り続けてな、気がついたときにはアイツがそばに居た。お前を戦場に立たすべきではなかつたと泣きながら言われたよ。医

者から聞かされた話では命に別状はないが子供は望めぬ体になつたそうだ。

拙者はその話を聞いてもそれほどこたえなかつた。むしろなんか清々してな。これでやつと混じりけも曇りもない、ただ一振りのアイツの刀になれたような気がしたのだ。

アイツには後添えなり側室なりもらつてとつと跡継ぎを造れといつておいた。結局アイツは一人の側室もつくらなかつたがな。

拙者は戦場に戻つて刀を奮い殺し続けた。ひょつとしたらあの時の拙者は単純に死にたかったのかもしれん。

ある日な、家臣の童子共の遊び相手をしてやつている最中に何故か涙が止まらなくなつた。拙者は、私はその時に初めて自分が何を失つたか気づいたのだ。バカラしいほど遅すぎる話だらう。

そしてそんなどうしようもない日々もいすれは終わる。ソウカクが肺病を患い、気づいた時にはもう末期だつた。跡継ぎは無く、ソウカクの弟ショウゲンはタチvanaの殆どの手勢を率いてソウカクと拙者のいる城を攻め立てた。

拙者も抵抗はしたが多勢に押し込められ、手傷を負い火を放たれた城の中にソウカクと残つた。拙者はソウカクに「共に死のう」といつてもらいたかつた。

「お前は、生きろ」

しかしアイツはそう言つた。

「何故だ！ 何故共に死ねと言つてくれぬ！ お前が共に死ねと言つてくれるなら、拙者は、私はすぐに全てを終わらせられるのに……」

ソウカクは瘦せた体で私を抱きしめ囁いた。

「死ぬつことはな、何にも無くなるつことなんじやよ。そんな所にお前を連れていくか。それにな、愛してる女に死ねなんて、口が裂けてもいえねえや」

手の中でゆっくりと命の火が消えてゆく感覚、ソウカクが消える。消えてしまう。

「イヤだ！　お前が、ソウカクがいないまま生きるなんてイヤなんだよ！」

失われ消える者の前に私はそう叫ぶしかなかつた。

「お前は……　優しい女さ、鬼姫とかそんなんじゃない。俺や、色んなヤツや、この国の時代がお前の生き方を歪めちまつたんだ。だから、お前はお前を生きるんだ。」

強く、愛しく私を抱きしめソウカクはゆっくりと太刀を抜く。

「お前の持ってきたこの太刀は刃沙羅村正、呪いの戦国刀だ。無限の死血山河を求め、自らに相応しい使い手を不死化するという。儂は腕はからきしだが、お前なら選ばれるはずだ」

ソウカクは刀を私の背後に回す。そつと私の唇を吸いながらあの日のように優しげに囁く。

「やっぱりお前はキレイだな。菩薩か女神様みたいだ

「……ソウカク」

村正の刃が私とアイツの胸を貫いた。

次に気がついた時、拙者がいたのは抜けるような蒼穹の下、焼け落ちた木材が辺りに散らばり、村正の刃が胸を突き抜けていた。両の腕の中には焦げた夢の残骸が朽ち果て、そして拙者は凶骨と成っていた。

婚礼の儀から八年後、ソウカクが二十八、拙者が二十五の時の話だ。

話を終え、ムラマサはまた杯に酒を注ぎ飲み始めた。

「ひつく……えつく……」

傍らのアイアは泣きじやくり言葉も出ない。

正直俺もかけるべき言葉が見つからない。予想以上に壮絶な生き様だ。

果たして残す者も託す物もなく、共に死のうと愛する者が囁く。「でもなあ、生きると俺は言えるだろ?」

そういう状況にならねばほつきとした答えは出ないだろう。それでも俺には生きるとこつ自信が無い。

「結局、拙者はアイツに自分を生きると言われたが、刀を取り戦う以外の生き方を知ることも得ることもできなんだ。そうしてここに流れ着いたということだ」

「ムラマサ、本名はスズガネって言つんだな」

「ひつぐ…えぐ、き、きれいな名前なんですね……」

「アイア、無理にしゃべんなよ…」

「それは生きていた頃の名前だ。今は妖刀によつて立つ魂にすぎん。故に拙者はムラマサだ」

さつぱつと言い放つムラマサ。男の俺が自らを女々しく感じるのは潔さ、これがサムライか。

「おーい、そろそろ時間だぞ。お前ら?」

遠くからグラスの声が響く。俺たちは急いでテーブルから立ち上がる。

「……なあ、ムラマサ」

「なんだ? ギード」

「お前の魂がその刀に入っているなら、もしその刀が折れたら……」

「ああ、その時は本当に終われるな」

「いいのか、それで?」

「構わん。それが拙者の終わりなら受け入れるだけだ」

凶骨のサムライは今日も胸を張り堂々とそこに在る。いつか終わるその時まで。

俺は心底あきれ果てる。いや、いつなる事は冷静に考えれば、至つて簡単に予測はつくだろうけれど。

「あんな、なんで俺がお前の命じられた雑用をやらなきゃならんのだ！」

姿勢良く直立する執事、アテレアが愚鈍な猿を見る視線で俺を刺す。

「ならばわかりやすく、なぜお前が取りに行くのか説明してやる。一つ、わたくしは魔王様の側を離れたくない。

二つ、ここは五階だから一階まで行くのが面倒くさい。

三つ、お前が下僕だから。

以上だ！」

以上だ、じゃねえだろアホ執事。

「俺は護衛なんだよ！ 四六時中くつついでんのが仕事なの、新聞取りに行けるかボケ！ あれか？ 執事修行ていうのは、脳味噌の比重をでんぶんより軽くする練習でも入つてんのか？」

「いや、我は別にどちらが行つても……」

「はつ、護衛？ そんな者は不要だ。魔王様の近くに仕えるのは、わたくしひとりでに十分！ むしろ城にはわたくしと魔王様の一人つきりのラブライフで良いくらいだ！」

「勝手に都合の良い妄想垂れ流してんじゃねえよ、ダメガネ！ 第一お前一人じや護衛出来ないだろ」

「心配は無用、執事の嗜みとして多少の戦闘訓練は積んでいる。もし魔王様に危険が迫つた場合、自分の身は自分で守れる程度の戦闘力はある！」

「いや、その場合はまず魔王様を守れよ！ 自分の安全だけ囁るな

「おーい、

「おーい、お前達……」

「だから早く取つてこい下僕！」

「お前が行くんだよ、アホ執事！」

「……おーいアイア、いるか？」

「だからお前は、……ん？」

気まずい雰囲気にふと気づき、視線を魔王様に向ける。魔王様は椅子に優雅に腰掛け、新聞をめくっていた。新聞の日付は今日のものだ。

「……あの、魔王様、その新聞は？」

新聞から視線を外さずに静かに魔王様は答えた。

「誰も持つて来てくれないから、アイアに頼んだのだ」

……ひょっとしたら怒つてらつしゃる？

「……すまんが独りになりたいので、一人とも部屋を出でくれないか」

ああ、やっぱり怒つてるよ…… アテレアが必死な形相で魔王様の近くに跪く。

「ま、魔王様、どうかお機嫌を御鎮め下さい。そ、そうだ！ 魔王様を讃える歌を昨日考えてきたので、今から歌いましょうか？」

マ～マ～魔王のマ～はマーマレードのマ～

何歌い出しているんだよお前は。それ絶対讃える内容じゃないだろ。

仕方なく俺はアテレアの後ろを引っ張り、ドアを指す。

「こら、最後まで歌わせろ！」

「お前はもう黙れ！」

目指すドアの先が少し開いていたことに気づく。隙間からは見慣

れたメイド、アイアが心配そうな表情で「ひらを手招きしてこる。

……なんかやな予感するなあ。

「失礼しました」アテレアを引きずつて部屋を出ると、アイアが腰に手を当てて、俺をじっと見つめる。……あれ？ アイアも怒ってる？

「ギードさん、さつき魔王様に頼まれて新聞取つて来たんだけど……」

「あ、ああ、ご苦労様」

「新聞渡した時に魔王様が『我つて結構、存在感薄いのかな？ 部下が我を無視して喧嘩するんだけど、どうしよう』っていってましたよ……」

慌てて横にいたアテレアがアイアに自己弁護を始めた。

「アイアさんといったか？ それは私のせいではなくて、横のギードのせいです……」

冷めた視線を返すアイア。

「あの、アテレアさん。私はついこの喧嘩は片一方じゃなくてどちらも悪いと想つんですけど」

「……はい」

沈黙する執事。やーいザマー＝ロ。って俺も同罪かよ！

「アイア、別に俺は悪くは……」

「魔王様は優しい方なんですから、余計な心配をさせたらダメです

よ

「……はい」

俺と執事の返事は同時だった。

去つてゆくアイアを見送りながら俺と執事はカカシのように部屋の前に立ち廻くした。……そうだとうえず「イツには一つ確認とかねば。最初に謁見している時にコイツはアレをどう思ったのか。『おい、執事。お前は……魔王様の尻についているモノが何に見え

る？』

その言葉を聞いて、アテレアの顔に俺に対する蔑みの表情が浮かぶ。嘲笑とともに俺の質問に答えた。

「何をいうかと思えば、魔王様の美しい尻に余分なものなどついてはいない！」

「そ、そうか」

返答はともかく、ひょっとしてコイツには剣が見えていないのか？
「ただ、風聞によると『バカにしか見えない剣が刺さっている』と
いう噂があるらしいがな！ もちろん、わたくしはそんなもの見え
ないぞ！」

あつ、バカ発見。

またバトルしたい病の発作が出てきました。

「で、俺の遭遇つてどうなってんのよ?」

「知るか、あれだろ、しばらく飼い殺しじゃないか」

「タコの飼い殺しですか。ははっ、じゃあここはタコツボですね」

「だったら看守部屋は犬小屋だな? ……おつなんだ、やる気か?」

いいぜ、表行こうか」

おそらくは六度目であろう、タコ対狼大戦を制止しながら、俺は溜め息をついた。

現在時刻は夜八時過ぎ、俺はまた丁寧に心理的圧迫を計算された尋問室にいた。

先に言つておくと、別に今回は尋問で訪れた訳ではない。

ベイルの供述によつて、役者に偽副皇帝を指示した人物の情報は入つたものの、問題はそこからの調査が全く進まないのである。

なんせベイルが帝国側の指示者と会つたのは帝国内、魔族国側ではその他の証言も証拠も取りようがない。おまけに書簡の類も無し。物の見事な行き詰まりである。

現在は帝国側からの音沙汰はなく、こちら側の目立つた被害は一兵士が死にかけたくらい(つまり俺だよ)で、むしろ被害は襲つた側の方が大きいだろう。

だからといって、このままあなたで済ます気は、魔王様はともかく、隊長や幹部連中達は毛頭無いだろう。無論俺もだ。一発殴り返したくなるのが人情つてもんだる。

とりあえず一応はベイルは供述をしたといつこと、団員一人は貿易先の共和国に送られるそうである。魔王様のアレもドタバタの際に見ていかつたのが幸いしたのだろう。

問題はベイルの今後だ。アレを見られている以上は国外に出すわけにはいかないし、さすがに殺すわけにもいかない。

仕方なく現在は魔王城で絶賛飼い殺し中である。そういう魔王様がベイルと話したいことがあるとかないとか……

日勤の護衛が終わった後、たまにはタコ面でも拝みに行こうかと、一つ様子を見にベイルの部屋に来てみたのだ。

「なあ、なんで他の部屋じゃなくて、また尋問室なんだよ?」

拘束具を外された手をふりながらベイルが笑う。

「そんないやそくな顔すんなよ若造、慣れるとそれ程こっこも悪くないぞ?」

「ギードさん、このタコまだ証人扱いですから、離れを出ちゃいけないんですよ。で、離れて三人で話せる部屋は尋問室しか無いっていうことで」

「…チツ」

しつとタコ呼ばわりする看守くん、舌打ちかますベイル。相変わらず仲は悪いようだ。

ベイルも飼い殺しの身だと退屈なようで、こうして雑談の相手に捕まってしまった。看守くんも現在離れにいる見張る対象が、ベイルしかいないのと夜勤の退屈のため、雑談に参加しているという訳だ。

……のんびりし過ぎだらこの城。

「そういや、いつも外とかうろついてるテカイ兵隊共が今日に限つて居ないな。狩りでもしてんのか?」

「ああ、兵隊ずっと常駐させてもしょうがないから、近くの建物の打ち壊しや補修、道路整備や土木工事やらせてるんだってよ

兵隊を一力所に置きっぱなしにするのは正直無駄である。食費や維持費をやたら食うのだ。体力のある労働力のだから力仕事は向いている、というわけで休戦後は専門の役職以外はローテーションを組み、城に一定の戦力を残す。

当番の人員は外で戦争被害地の復興や道路整備、土木工事をしているわけである。

俺は魔王様付きの護衛なのでその辺は免除されているわけだ。

「あ、そうだベイル、近い内に魔王様がお前に直接面談するとか言つてたぞ。腹決めとけよ」

ビクリとベイルの肩が震え、光沢ある額に冷や汗が走る。
「なにそれ？ ほんとかよ？ うわー、話したくなえ！ 僕絶対尻のアレずっと見ちゃうよ！」

心配する所はそこか？ 話す内容を心配しろよこのオヤジ。

「ギードさん、実は僕は魔王様のアレは見ただけでもヤバいって噂聞いたんですけど、ホント何ですかね？」

あ、看守くんに嘘だつて言うのまた忘れてた。しかもまたへんな派閥出来てるし。……なんか面白いからこのままほつとこつかな。

「あー、看守くん。さすがに見ただけでヤバいっていうのは無いんじゃないかな、多分」

ふと時刻を確認すると既に午後八時半、二時間半も雑談していた。いいかげん帰らねば。

「おい、俺そろそろ帰るからな」

俺の帰宅宣言を聞いてベイルが残念そうに声を上げる。

「別にもうちよつと居てもいいだろうが。お前彼女とかが待つてゐわけじやないんだろ？」

「余計なお世話だ、死ねタコハゲ！ ジャあな」

ドアを閉め尋問室を後にする。しかしどアの向こう側、尋問室から一人の微かな会話が聞こえた。

「……ギードさん、彼女居ないのは否定しなかつたな
「看守、それ以上いちな。悲しくなるだろ」

……アイツら仲いいじゃねえか。

黒騎士強襲死闘編 戻り討つ時じや落ち着いて

つたぐ、あのタゞ余計なことしか言わねえな。

離れを出て本邸に入つた辺りで俺はある事に気づいた。

あつ財布忘れた……

私物置き場に置きっぱなしだったのに気づき、仕方なく私物置き場のある三階へ足を向ける。

ロッカーの鍵を回し、財布を懐にしまいながら、ベイルがこれからどうなるかを少し考えてみる。

ずっとこのままはさすがに無いだろつし、国外は無理としても国内で普通に暮らすぐらいなら隊長の胸三寸で出来るんじゃないだろうか？

魔族国内でも、貿易国から移り住んだ人族の商人も少数ながら居るし、監視はつくかもしれないが、ベイルだって暮らせるはずだ。そもそも帝国に未練は無いようだし。

役者じやなくて他の仕事なら食いつくべらばいは……

ド オ ナ ッ

ツな！ なんだ！？

突如、空間を震わせ、魔王城を伝わる振動。明らかに爆発による物だ。

方向は、おそらく正門側。なんだ？ 誰か喧嘩でもして……

ド オ ナ ッ

連発している。まさか…… 城が攻撃を受けているのか！？
ならば一体誰から受けているというのか、状況を掴むため、隊長

に魔術無線をかける。

『一いちじゅうギード、隊長、先程の爆発音について確認を…』

『…ザツ…ザザツ…ギード、聞こえるか?』

『隊長、状況の確認を…』

『ギード、よく聞け、現在正門から重装騎士、数は二十から三十騎の襲撃をうけ…ザザツ…』

妙だ。ノイズが激しすぎる。

『隊長?』

『…ザツ…今…までは…ザザツ…違うタイプ…気をつけ…』

バチリと音を立て通信が途絶、繋がらなくなる。

これは通信妨害^{ジヤミング}途絶術式!?

こんな物を使って連携を阻んでくるとは、これは、この状況はまさしく、

戦争だつてのか、まだ何も終わっちゃいない、何も止まれないつていうのか?

思考を切り替え、戦闘用に組み立て直す。

現在の自分の装備を確認、

防具、鎧は前の戦闘から新調した物、

武器、剣もミスリル製のを新しく購入した。ナイフもある。槍は今は無いが、室内戦闘が主ならむしろ邪魔になるな。

次は移動場所、通常なら敵のいる正門か、魔王様の近くに行くべきだが…

あれ?

おかしい、何か引っかかる。此処を攻めるなら標的は間違いなく魔王様のはずだ。しかし、

明らかに戦力、火力が足りない。

砲撃を試みる位だから、魔王様の防御力は高いと考えている

はず、それを何か仕掛けがあるとしても、一、二十騎の兵士で仕留められると？

もし砲撃の備えがあるなら最初に打ち込むはずだ。だったら、

攻めてきたヤツは何を狙ってるんだ？

魔王様じゃなくて……まさか、

窓へ駆け寄り、離れの方角を確認する。

『暗視光学術式解術』

眼前に二十センチほどの魔術円が展開、魔術円越しに見る暗闇が透過される。

現在離れの外には見張りの兵士がいない、正門の迎撃に向かったのだ。

そして、離れからやや離れた位置にある城壁、その上に立つ、月に照らされた三つの人影。シルエットから察するに重装騎士だ。

確認した次の瞬間、巨大な跳躍と共に城内へ消える。

目標は魔王様じゃなくて、ベイルか！

「や、や、やるかよ！」

窓枠へ手をかけ、足を乗せる。そのまま、夜の風を受けながら一階を掛け落しする。

あ、つい見栄切ってやつちやつたけぞ、三階つて結構高いな

黒騎士強襲死闘編参 転がり込んだその先に

『トロシャンブ 爆裂推進補助術式解術』

空中で移動補助術式を足の裏から解術、魔術円から発生する移動補正用の衝撃波が着地の衝撃と相殺される。

ふわりと中庭の石畳の床に立つ。今のでかなり大きい音が出たが、向こうの騎士達はこちらに気づいたどうか？

少しでも注意を引いてベイルのもとへ行かせないようにしなければ。

正門と離れば逆方向、中庭から建物内部を抜け、離れまでの長い廊下を通らねばならない。

離れた周囲には脱走防止の柵と魔術トラップがある。騎士が離れまでいくなら、トラップを避け廊下を通るはず。

思考を整え、一気に駆け出す。

ならば、俺は廊下から奴らを追撃することになる公算が高い。トラップを避けずに行けばかなり時間を取られるはずだからな。

奴らの目的が救助か暗殺かはわからない。だがベイルを救助する理由は無く、救助なら騒ぎを大きくし過ぎだ。

……やっぱり殺る算段か、クソッタレ！

中庭を抜け、向こう側の建物に入る。通路はこの建物から入る構造だ。

レンガ作りの廊下を走り抜け、通路の入り口が見えて……

やっぱりおいだなすったか！

建物内、通路入り口には一人の重装騎士が陣取っていた。

薄暗い建物内でエメラルドグリーン、翠玉に輝く頭まで覆う全身甲冑、二メートル程の身長、体格に対し短い胴体と反比例して長い手足。そして最も奇異な特長、大きく肥大した太もも部と背中に背負っている何か。

こちらを確認すると同時に、その長い右手を伸ばす。多重展開する魔術円、そこから俺は術式の構成を読み取る。

中距離射撃術式かッ！

術式の発動より早く、通路横のドアを蹴破り体を転がり込ませる。同時に装甲化術式を発動、ライトメイルをフルメイルに変形させた。

『ヒートウェイブ
焦熱衝撃波術式解術』
『メタルブリットショット
鉄核弾射擊術式解術』

ドアの前を熱衝撃波と、鉄の中型弾丸が派手な唸りを上げ同時に通り過ぎていく。

面と点の同時攻めか、えげつねえな。

まだ空氣に残る熱気を感じながら、俺は戦慄に身を凍らせた。

魔術を同時展開するとは、アイツ『上位騎士』ってヤツか？

普通、人族は魔族と比べ体内に持つ魔術の素となる魔力量が著しく低い。それゆえに兵士の量で負けることはあっても質では魔族が上を保っている。

しかし、人族でも稀に、魔族以上に魔力を持つ者が生まれるという。そしてそういう者が兵士になつた場合は『上位騎士』として取り立てられるそうだ。

とにかく効果の高い中距離射撃術式が一種同時に使えるということはそれなりの実力者だろう。

「……来るか？」

部屋の中で身構えるが、追撃してくる様子がない。

徹頭徹尾、時間稼ぎに徹する気か！

たしかに中距離射撃射撃術式を得意とするなら、入り口に陣取つて魔術撃つた方が効率がいい。

多少リスクを取つても突撃するか？

出来ればあと一人、援護役のフォロワーが欲しい。しかし通信が混乱していくは援軍は……

「おい、ギード何をしているんだ？」

「うわっ！」

いきなり後ろから声が響き、思わず叫んでしまった。

振り向いた先には、テーブルの下に体育座りで潜む人影。夜の空から刺す月明かりがその姿を照らす。

中性的な美人の範囲に入る顔立ち、均整が取れた砂時計を連想させるスタイル。そして魔王城ではただ一人しか着用しない燕尾服。

「……なんでお前がここにいるんだよ、アテレア？」

アテレアはゆっくりとテーブルの下から立ち上がり、こちらに見つめる。

「食堂に夜食を食べに来た帰りに緑の騎士に出くわしてな。慌ててこの部屋のテーブルの下に避難したのだ」

「ああ、そうかい……」

「のだ。じゃねーだろ、のだ。じゃ。」

「アテレア、じゃあもう少し隠れてる。俺はこの先の離れまで行かなきやならんから。悪いがお前守つてる余裕ないんだよ」

アテレアは怪訝な表情を見せる。

「離れ？ 何の用事があるんだ？」

「奴らの目的がそこにいる証人の可能性があるからだよ。……さて、どうあの緑野郎を突破するか。せめて頭数がもう一人いればいいんだが、別の兵士と連絡も取れんし……」

「頭数、か」

普段の落ち着いた態度から想像出来ない、いたずら好きな子供のようにアテレアが微笑む。なんだ？ 「コイツなに考えてやがる。奇遇だな、ギード。わたくしもじょびそつ考えていた所だ」

「？ 考えてたって、お前何を……」

「私が援護役をしてやるから、お前が突入しろ」

「Jともなげに言い放つ執事。

「……お前、戦闘出来んのか？」

アテレアは優雅な動きでその豊満な胸元に手を伸ばす。シャツのボタンを外し、白手袋の細い指を谷間に差し入れる。

「案ずるな。用意はある」

勢いよく引き抜かれた手には薄暗闇に輝く金属光。即ち、銀食器のフォークとナイフが一セット。

「用意つてそれか！ ていうか今どつかり出した！ 少しは恥じらえよお前は！」

やつぱりコイツは非常時でも変わらん。

アテレアは「お前は何もわかつていない」とでも言いたげに首を振る。

「Jの食器はただの食器ではないのだよ。私が隙を見て集めた逸品、魔王様使用済みフォークとナイフだ！」

……この件が片付いたら、コイツ警察に突き出さつ。

黒騎士強襲死闘編四 意外と息が合つてたりします（前書き）

お待たせしました。

黒騎士強襲死闘編四 意外と息が合つてたりします

「で、なんか算段があんのか？」

俺の質問に不適に笑みを返す執事。

「……確かにこの辺りは、この十年来で新たに増築された建物な筈だ」

「あ、ああ、確かに俺もそう聞いたことがある」

魔王城建設は、魔族国の建国後、今から六百八十年前に行われた。その後、様々な規模拡張と増改築を経て、現在に至る。

「ということは最新の建築技術が使われてだろ。」

ならば問題は無い。やるぞ、ギード……なんか信用できねえなあ。

蹴破られたドア横の壁に一人で張り付き、緑騎士の様子をうかがう。

「動きは無いな。……仕掛けるか。アテレア、まず俺が突っ込むからお前は後ろから援護だ！」

「わかつてている。ギード、他の部屋には避難したメイド達がいるかもしれません、不用意に飛び込むなよ？」「

「わかつててるよ！……それからな、アテレア

「？ なんだ？」

「俺がヤバくなつたら、とつとと逃げろよ」「

一瞬キヨトンとした顔を浮かべ、俺をマジマジと見る。……なんだ？ なんか文句あんのか？

「……ふ、不要な心配だ！ お、お前は自分の心配を……」

アテレアの顔がビミョーに赤くなる。

「あのや、ただの社交辞令だから」

タイミングを合わせ、廊下に飛び出す。反応した緑騎士が「ちりに右手を伸ばし、魔術円を展開した。

奴との距離は約十一メートル、一瞬で詰められる距離ではない。
『シールド』
近接防御盾防じうと身構える。だが、

『メタリカ・マーティナ』
金属磁界操作術式解説』

背後で魔術の発動する気配に、俺は身を強ばらせた。

次の瞬間、緑騎士の左右の壁と天井に大きくひびが走る。そして壁を突き破り、棒状の鉄塊が飛び出し、緑騎士の眼前をふさぐ。

いやあれば鉄塊ではなく、

建築用の鉄骨だと！？

「Hの字型の断面、端が見えぬほど長い長さ、壁から飛び出てきたといつ事実。正しくあれば鉄骨だ。

磁力操作で建物内部の鉄骨を呼び寄せたのか。やたら新築にこだわってたのはそのためかよ！

「Hのおつー」
ゴ ゴ オ ン

緑騎士の発動した一種の中距離魔術、熱衝撃波と弾丸が鉄骨にぶち当たる。拡散される熱風と跳ね返される弾丸。

散つてゆく熱が兜の面越しに俺の頬を焦がす。剣を片手に駆け出し、緑騎士との距離をさらに詰めた。

「だつたらッ！」

緑騎士が少年のような声を上げる。鉄骨の隙間から左手を出し、魔術を撃とうと構えた。

間に合つかッ！

ならば飛び込もうと体勢を取る。しかし、

『メタル・リキッド
金属液状化術式解術』

後ろからアテレアが投げた一本の飛具、といつかナイフとフォーケが左手に突き立つ。次の瞬間、ドロリと液状化し瞬時に硬化する。緑騎士の左手が固められた。

アテレアの奴、磁力だけじゃなく金属操作も出来るのか！

後ろを振り向くと、アテレアがフォークとナイフを構えながら何やらポーズを決めている。

「貴重なコレクションを無駄にしたんだ、早くやっつけろー！」

……ひみせえよ。

俺は緑騎士に向き直り、跳躍。鉄骨のバリケードを飛び越えた。

「おりやああッ！」

気合いと共に緑騎士の胸板に飛び蹴りを叩き込む。

「うわッ……」

声を上げ後ろへたらを踏む緑騎士。結構体重があるのか、倒れずに踏みとじまた。

そのまま斬り込もうと剣を構えるが、緑騎士がこちらへ右手を伸ばし、魔術円を開いた。俺は魔術円の紋様から魔術内容を瞬時に予測。

「これは……火炎放射術式かッ！？」

ひとりの判断で剣を床に突き立て、両腕に術式をまとつ。

「燃えろオツ！」

『フレイムガノバースト
火炎放射焦熱術式解術』

「こなくそオオツ！」

『ツインニートロボムド
爆熱双打轟掌術式解術』

緑騎士の右手から約七百度に達する炎が放出。俺の突き出した両拳から発生した爆風とぶつかり合つ。

ボボオーン！

発生する白煙、陽炎の向こう側に恐らくは爆風で炎を被つたのだろう。体の所々が煙を上げる緑騎士が見えた。

剣を引き抜き、近接魔術を発動。

『ハイシエイカーブレイク
高周振動破壊術式解術』

抵抗しようと左手を上げる緑騎士、俺は構わずに左手首を一撃した。ギィンッといつ金属音。機械部品をバラまき、高周振動による火花を上げ、左手首が宙を舞う。

機……械、だとツ？ それに、血が出ない？

一瞬の疑問を振り払い、攻撃を続ける。

胸板目掛け、袈裟切りと逆袈裟切りの連撃を見舞う。そのまま勢いに任せ、肩でタックルをかました。

「うわあツ！」

胸部装甲にX字の傷を作り、叫びながら下がる緑騎士、しかし倒れない。

チツ、浅かつたか。……さつきからここにいつなんかやたら子供っぽい声だすな。

まだ抵抗を止めない緑騎士、しかしその動きが唐突に鈍くなる。よく見るとキラキラとした輝きが細い線状の何かを形づくり、緑騎士に巻きついていた。

「……ワイヤー？」

線を田で追うと俺の後ろに続いている。

振り向くといつの間にか近寄ったのかアテレアがいた。何やら両腕を曲げながら交差させて、力を込めている。ワイヤーはその指先へ繋がっていた。

「金属液状化術式を、応用、してな、ワイヤーを、作って縛ったのだ」

なかなか器用だな、お前。

緑騎士もなかなか力があるらしく、アテレアの顔が段々赤くなつてきている。

「だが、ら早く、トドメを……」

「ああ、わかった」

俺は離れへの通路入り口へ向く。

「え？ ちょっとギード……」

『ヒートロジェットアタック
爆熱噴射型突撃術式解説』

噴射炎を上げ、俺はアテレアを残して離れへの通路へ体を飛びこませた。

「後ろろじくウウウツ

「！」

「ちょっと待てえええツ

ーーー」

悪いが、急ぐんだな。

黒騎士強襲死闘編伍 中間管理職は大変です（前書き）

お待たせしました

黒騎士強襲死闘編伍 中間管理職は大変です

アテレアの怒声を背中に受け、それを反動とするように術式で加速、直線で造られた通路を滑空する。

トドメ刺すのも手間取りそうだし、時間もないからな。ま、ア
イツもヤバくなれば逃げるだろ。それよりも……

レンガで四方を造られた通路は、先行した騎士に魔術照明が破壊されたため非常に暗い。

……まずつたな。突撃術式で突つ込むんじやなかつた。

一瞬、後悔が頭をよぎる。術式の噴射炎の光により、俺の位置が丸わかりだ。

ウイイイイイイイツ

「ツ！？」

暗闇の向こう側から、突如として音が響く。かん高いような、ぐもつたような規則的な回転音。

魔導機関の駆動音ッ！？

慌てて暗視光学魔術を発動、前方を確認する。

「やつぱりいやがつたなッ！」

暗闇を透過した先に見える人影、先程の緑騎士とほぼ同じ体格とデザインの全身甲冑。そして最大の相違点、

派ツ 手な色してんなあ

きらめく血のようなクリムゾンレッド、紅玉色が甲冑を染め上げている。

次に最も驚かされたのは、騎士は走らず前傾中腰の姿勢のまま猛スピードでこちらに突撃を仕掛けているのだ。

足元には画くるぶし辺りに片側一対づつ付いた車輪が見える。それが唸りをあげ、通路の床を火花を上げながら高速回転、騎士を加速させている。

なんだありや？

自動回転する足首の車輪、それがあの騎士の機動力の源か。

やがて騎士は両手を横に広げる。それに握られているのは八十分程度の刃渡り、細いシルエットを持つ一対の両手剣。その切つ先が、両の壁に着いた刹那。

断末魔を思わせる耳をふさぎたくなる異音と共に派手な火花が通路に舞う。

高周振動術式による破壊の振動が刀身を震わせているのだ。どうやら相手は近接格闘型、真っ向から俺を迎撃つつもりらしい。

いいね、気に入つたツ！

戦闘の高揚が甘く、激しく背中を走る。いかん、本来の目的を見失いそうだ。

『ニトロフースタタック
爆熱噴射型突撃術式解術』

突撃術式を更に追加解術、加速を強める。正面から受け止めるなら、正面から跳ね飛ばすのみだ。剣を振りかぶり、すれ違い様の

一撃を引き絞るよつに狙つ。

「ツオオオオオツ！」

しかし剣を振る前に、紅騎士が右へ軌道を変更、体を寄せた。

「ハツ！」

その長身から連想しにくい高い声が響き、跳躍。更に跳ねた両足が壁に着地。

ツ！ 何だと！

車輪によつて生み出される高速で壁を疾走、捻れた軌道により右壁、天井、左壁を螺旋状に疾駆。その動きはさながら紅き亡靈を思わせる。

驚愕する俺目掛け、すれ違ひ様に双剣が走つた。

ツヤバい！

とつさに右へ身をよじる。左側頭上目掛け走る一本の剣線が、噴射魔術円と同時に張られる魔術防御盾シールドを火花を上げて一瞬の停滞の後、貫通。俺の兜をかすり通り過ぎる。

やるじやねえかツ！

追撃に備え、突撃術式を解除、両足のピッグを作動させ、ターン。後ろの紅騎士へ向き直る。姿勢を落とし、推力を殺しながら剣を構えた。

先刻の剣戦の熱がまだ冷めぬ空間、その闇の向こう側に同じくこちらに向き直つた紅騎士が見える。

「へえ、今のしのげるんだ。……やるじやん、下つ端ぽいのに。」。つたく、グリューの奴は何やつてんだか」

体躯に似合わぬ、まるで子供のような声で喋る紅騎士。……いや、さすがに子供じゃないだろ。身長一メートルはあるし。グリューツてあの縁騎士の事か？

「……知つてるか？ 人を見た目で簡単に判断するとあとで痛い目に会うんだぜ。具体的に言うと、『今』からな」

「ふうん、じゃあ手早くしてくんない？ 用事あるし時間ないからさ。あつ、時間かけて説教したいなら、あの世でやつたら？ オススメよ」

「心配すんな。手早くやるよ。但し、お前はあの世で反省だ」

「いーいセリフ吐くわね、魔族。……吠え面かかしてやる」

「楽しくやるわぜ、人族。……どうせ短い付き合いなんだからよ」

「あーーー、どうすっかな。つい啖呵切つちまつたけど。

状況観察、特筆するべき点は脚部車輪によるトリッキーな動きと、双剣による剣撃。動きから察するに、見た目は同じでも縁騎士より体重は軽いみたいだな。

機動力を殺せれば……

『あ、あざとい!』えるかあ？』

突如、頭の中に直接声が響く。魔術通信とは明らかに違う言語がダイレクトに脳に突き刺さる感覚。つづか痛い頭痛い何コレ痛い痛いイタイ。

「イタタタッ！」

思わず頭を抱えてもがく。何だこれ帝国の新兵器か！？

「イタいイタい！ なんなのコレ魔族の新兵器！？ 見れば紅騎

士ももがいでいる。これは帝国のやつの仕業じやないのか？

『え”、しゅつり” ょぐがづよい？ ……すまんな、これでいいか
？』

頭痛が急速に収まる。ていうかこの声…… 魔王様か！？

『現在音声通信が通じないので、我の思考念話を使い話している。
個人識別が面倒なので、城の中の人間全員に念話を送った。
この話は襲撃側も聞いてるので皆は注意するよう』。

先程は出力が強すぎたようだ。頭痛はそのためである。許せ『

魔王様こんなことも出来たんだ……

『現在襲撃している賊の狙いは我ではなく離れにいる証言者の可能
性がある。離れの近くの人員は離れへ集合、賊の別動隊に備えよ。
メイド等非戦闘員は本館側に退避、離れには行かないよう』。
なお、賊の装備は通常の人族とは違う物らしいという報告が来てい
るので注意を払うべし』

冷静に指示を下す魔王様。流石だ。

『こちらの正門側が片づいたら我也離れに向かおう。どれ、久しぶ
りに運動というヤツをしてみようではないか』

えつ？ ……えついやちょっと待つて、今の魔王様の姿を襲
撃側に見せるワケにはいかんだろう！

『ん？、なんだゴルンよ。何？「魔王様自らおもむく必要は無い」？
いや、そうはいうがな、我も少しば動きたいというか運動不足と
いうか……』

隊長頑張つて！ 超頑張つて！

黒騎士強襲死闘編六 隠し玉は初見だじゃね

「これは急がないと別の意味でもマズいぞ……」

ここで俺がまじついて魔王様登場なんてことになつたら田も当たられん。隊長が抑えてくれている内に早くけりをつけねば。

「な、何？ 何なの？ 魔王が来るの？」

紅騎士に動搖が見える。無理も無い、あれほどの頭痛をついつかりで起こされたのだ。

人と魔王様の存在の違いといつものをイヤといつほど思い知らされただろう。

やはり我らが魔王様は何処に見せても遜色のない、立派な魔王なのだ。……ただ一つにして致命的な一点を除いてはな。

「……おい、どうすんだ？ とつと引いたほうがいいんじゃないか、お前ら？」

「心配される筋合いは無いわ。とつととお前ブチ殺して、ターゲットの所まで行つて速攻ミッションコンプリートしてやるわよ」

やつぱり引くわきやないか。

「引いた方が後悔しないと思うがね」

『ハイシエイカーブレイク
高周振動破壊術式解術』

「ぐだぐだ抜かすならあんたがどきな」

『ハイシエイカーブレイク
高周振動破壊術式解術』

暗闇の通路を、互いが発動させた高周振動の独特な振動音が吹き抜け、響く。

無言のまま脚部車輪を回転させ、紅騎士が双剣を構え火花を散らせながら疾走。真っ直ぐにこちらへ距離を詰める。

振り上げた左剣の一撃を剣で受け、防ぐ。

高周波同士がぶつかり、断末魔のような形容詞し難い異音が響く。それに耐えながら、受け止めた剣を弾き、今度は右剣を受け止める。「それえつ！」

車輪の速度を利用し、そのまま胴体で体当たりを仕掛ける紅騎士。ヤロウッ！

両足のピッグを作動、床を突き立て、体当たりを踏み止まつた。鎧がこすれ合いギシギシと音を立て、剣がきしむ。どうやら速度はあつても体重はあまり無いみたいだ。

鎧迫りの体勢から拮抗する俺と紅騎士。紅騎士の車輪が空回りし、床を虚しくこする。

左剣で刺そつと構える紅騎士、気配を察した俺はとっさに鎧迫りを右に受け流す。

「うわっ！」

受け流しによる急激な体勢変化に車輪が対応仕切れず、前のめりになる紅騎士。それに合わせ、俺は胴に膝蹴りを叩き込み術式を発動。

『爆熱打撃脚術式解説』

膝頭に浮かぶ魔術円からけたたましい音を立て、爆風と熱が発生、胴に炸裂する。

「キヤツ！」

悲鳴を上げる紅騎士、車輪を逆回転させ後退し再び距離を取つた。

紅騎士の胴部装甲には術による焦げ痕が見えるが表面的な損傷はあまり無い。今までの帝国の鎧と比べて強度が段違いに高い。

「一か、いちいちこいつ女っぽい声だすから力抜けるんだけど。いやしかしこの体格と力は女じゃないだろうし。……オカマか？」

紅騎士は性急に剣を構え直す。動きからやや焦りが見えるな。……いや焦っているのは俺も同じだが。

斜め気味に右側へ疾走、跳躍。さつきと同じように壁走りで走り抜ける。

何度も虚偽威しを！

軌道を予測し、剣を一直線に紅騎士へ構える。一度田なら動きも少しは読める。

「喰らつとけッ！」

ヒートジェットアタック

『爆熱噴射型突撃術式解術』

術式のジェット噴射で加速、紅騎士の胴体目掛け突撃を仕掛けた。壁を走る紅騎士目掛け、剣と共に飛び出し激突しようとした迫る。

「見えてるわよ」

しかし激突の瞬間、紅騎士の左右の車輪がそれぞれ逆回転し壁を滑る。それた上体が俺の剣先を避けた。

「ちいいつ！」

通り過ぎ様に側面を走る斬撃、シールドを貫通し、迫る剣をとつさに左手の装甲で防御する。飛ぶ火花が大輪の花のように視界を埋めた。

「ぬかつたつ！」

空中で術式を解除、膝から着地。推力を殺し切れず、受け身を取りながら「ロロロロ」と床を二、三度回転。通路に派手に鎧のなる音を

響かせながら停止した。

背中がイツテ…… 腕からは血は出でいないな。

紅騎士の高周振動の効果時間が途中で切れたのだろう、装甲は削つても生身の所には到達しなかったようだ。

「寝てんじやないわよ、魔族！」

紅騎士の声が響く。車輪を走らせ、三度、じりじりへ迫つてきた。

「……チツ」

少しふらつく体を立たせ、構える。魔族の体内は豊富な魔力により恒常に身体強化魔術が働いている。体力、強度では普通の人族より遥かに上だ。この程度の衝撃なら骨も折れない。

「これでえつ！」

『ハイシエイカーブレイク
高周振動破壊術式解術』

紅騎士が双剣を空に振り上げる。

「終わりよツ！」

『セウン・ヘバン・ダウン
七重展開分霊術式解術』

紅騎士を覆うように現れる魔術円の複雑な紋様、そこから読み取れる魔術式の内容に俺は目を疑つ。

分霊！？

通路を埋め尽くすように拡大する魔術円、やがてそこから現れる六体の人影。

紅い甲冑、双剣、アンバランスに長い手足。即ち六体、オリジナルを入れて七体の疾走する紅騎士。

「五お体いバあラしてええつ！」

そのピッタリと重なった声は最早一つにしか聞こえず、

「逝いつちやいなあああツツ！？」

十四の斬撃の衝撃は、一瞬一撃のみだと錯覚する程に、寸分違わ
ず重なつて打ち込まれた。

黒騎士強襲死闘編七 しつじこヤシヌルルアツヒョウペ（前書き）

お待たせしました。

黒騎士強襲死闘編七 しつこじにヤツは引をすつてしまえ

「マズい、避けきれん！」

眼前一杯に迫る七体の紅騎士。接触した物を振動分解する十四振りの片手剣が、縦横無尽な剣の軌跡を描く。そして凶刃達が目指すのは疑いようも無く、まさしく俺。

「うつだらっしゃあああツ！」

『ハイシエイカーオフセット』

『高周振動相殺防護術式解術』

とつさの判断で両腕を組み、術式を解術。魔術円が青白い熒光を放ち、俺を包む。

甲冑装甲に振動が走り、十四の斬撃の高周波とぶつかり合つ。振動が相殺され、ただの刃となつた剣が装甲を叩いた。

「……しつぶといわねえ」

斬撃後、即座に六体の紅騎士が光の粒子と化し、分解。一人へと戻る。

通常、俺のような機動力重視の前衛の使う防護壁術式は、点ではなく面を重視した物だ。散弾など避けにくい攻撃を防ぐためであり、高威力の振動斬撃は防げない。

しかし、攻撃の原理を知れば効率的な防護は出来る。高周振動ならば同威力の振動で相殺すればよいのだ。高周振動相殺防護術式は鎧装甲に振動を走らせ、高周斬撃を無効化する術式である。

ただし剣の刀身ではなく鎧全体を走らせる必要のため、発動からの有効時間が極めて短い。一斉の斬撃ではなく連撃だつたら無効化仕切れず、やられていただろつ。

「……こういうのも含めて、兵士の優秀さなのさ。しかし『分霊術式』とは珍しい物使うな」

『分霊術式』とは魔術により自信の存在を多重展開させる術式だ。最大の特徴は『多重展開した自信存在』であるため、魔術で作った自律人形などの傀儡のような命令が必要ない。

あくまで分霊は多重展開した術者であり、分霊には独立した意志があるのだ。そのためスピード一辺倒な対応が出来る。さらにパワー・ダウンも無いため、単純に術者が増えるのに等しい。

短時間な火力の倍増などに高位の後衛兵士が一から三体ほど出して使う場合が多い。こいつのように近距離戦、しかも七体出すヤツは珍しきである。

「死ぬ前に珍しい技見れて良かつたでしょ？ ほらあ、あたしつて優しいから」

双剣を持ち無沙汰にクルリと回転、ふざけた調子で喋る紅騎士。

「じゃあ俺も優しさ返しに一つ教えてやる。……お前あの技をもう

一度俺に使つたら 負けるぞ」

ピタリ、と紅騎士の動きが停止。回していた剣を止め、俺へ右剣の切つ先を向けた。

「魔族つて面白いわあ、……この状況でギャグかますとかマジありえない」

軽い口調に殺氣が満ちる。いけるな、こいつ絶対またあの技つかうつもりだ。

「ギャグかブラフか、試してみるかい？」

紅騎士の双剣が動き、足の車輪が唸りを上げる。

「そのヤツすい挑発」

押し出される体、加速する剣、紅い亡霊の軌道が走る。

「あなたの命で買ひ上げてやる ツー！」

『セヴァン・ヘヴン・ダウングラム
七重展開分霊術式解術』

魔術円の光の中から再び現れる七体の紅騎士。猛禽の如き疾走で俺に迫る。

さつきと同じ？……いや、ちがうな

目前で七体が別れる。俺の周りを取り囲むように等分な距離で円陣を組む。

「これは防げるかしら！？」

取り囲んでからの連撃で逃げ場を完全に断つつもりか……

「死んどけえエエツ！！」

『ハイシエイカーブレイク

『高周振動破壊術式解術』

紅騎士の七重の声が響き、唸りを上げて双剣が迫る。

待つてたぜ、この時を！

『トロリアクティウマーマー』

『装甲爆散相殺防御術式解術』

俺の胸部装甲部で魔術円が展開収束。次の瞬間、頭部、胸部、背中、両肩の装甲が光を上げて爆発、破片と煙を周囲へと撒き散らす。

「ツナ！」

紅騎士の叫び声をかき消すように破片が殺到、七体の体に激しく打ち当たる。

煙越しに、集中が溶けたために一人に戻る紅騎士を確認、飛び込みながら鉄甲で固めた拳を振り上げた。

『トロボムド』

『爆熱打撃掌術式解術』

兜の側頭部をぶん殴ると同時に術式を発動、けたたましい爆発音、衝撃、熱を頭部に受け紅騎士がのけぞる。

寝とけッ！

更に胴へ前蹴りをかまし、床へと押し倒す。レンガの床に金属音を立てて、紅騎士が崩れ落ちた。

倒れた拍子に床に落ちた双剣を注意深く蹴つて遠ざける。

「二、この青髪野郎……」

転がる紅騎士が苦しげに声を出した。まだ気絶はしていないようだ。
……ん？ 青髪？ ああ、装甲を爆散して解いたため、最初は鎧に覆われていた俺の顔をみたのか。

「……お前は確かに術式の才能がある兵士だ。魔族だつて分霊を七体出せるヤツは後衛役でもまず居ない」

分霊を出すには高度な魔術式を組む能力が必要だ。接近戦に使うなら、さらにそれを速く活用出来なければならない。その意味では紅騎士の能力は才能としか言いようがないだろう。

「でもな、お前は分霊のデメリットを理解していいな」

最強に思える分霊も弱点は存在する。当然魔力の消費が大きく、術式の維持も難しい。そして最大の弱点。

「分霊は術者の存在を歪めて多重展開している。それ故に術を解き一人に戻ると、分霊のダメージも一人に統合される。

分霊の内、一人が致命傷を負えば、元に戻った際にも致命傷を追うんだ。ちょうど今のお前のような」

俺の突きつけた切つ先、その前の紅騎士の装甲に無数の破片が撃ち当たつた後が着いている。

さつき俺の使つた術式は「装甲爆散相殺防御術式」。本来は砲撃等の直撃に対し、自身の装甲を吹き飛ばして砲弾の威力を相殺する一回限りの防御術式だ。

しかし、鎧の破片を撒き散らすことで近距離戦での散弾のような効果も期待できる。

普通なら範囲が広い分威力が低いのだが、紅騎士の分霊が解けたことにより、七人分の損傷と衝撃が一人にのしかかっているのだろう。

「斬撃の時だけ分霊を出し、即座にしまつようにすれば確かにダメージは少なく済む。だがな、攻撃の瞬間を読まれれば意味が無い。つまりところ、お前は才能があつても経験が不足しているのさ」

「だまれ、魔族。あたしはまだ負けてな……」

もがきながら立ち上がろうと紅騎士が動く。無駄に元気なヤツだ。

「動くな

ハイシェイカー

ブレイク

高周振動破壊術式解術』

右足首を一閃、火花と共に車輪のついたブーツが切断され、宙を飛び、床を転がる。乾いた音が通路を反響した。

やはり血が出ない？　ここから一体……

足首の断面から覗く機械部品、金属片、チューブ。しかし血は流れず傷口は見えない。

「お前ら……　一体何者だ、なぜ血が出ない？　ホントに人間か？」「失礼なこと、あたしはちゃんとした人間だ！　魔族に疑われる筋合は無い！」

手足をジタバタと動かし、紅騎士が抗議の意志を示す。切断による痛みさえ無いのか？

「まあ、いいや。お前は後で捕虜に取るからそこで寝て……」つおつ！

突如起き上がった紅騎士が、膝をついた体勢から俺の腰にしがみつく。

「離せ、お前は…」

「行かせるか……　お前をマスターのところまで絶対に行かせるもんか！！」

叫びながら回した手はガツチリと組み合わさり外れない。マスター？　それが三人目か？

「そうかい、だつたら」

紅騎士の頭を掴み一気に床に押し倒す。仰向けに倒れた紅騎士に俺が乗る体勢になつた。

「どけ、この野郎！」

更にもがく紅騎士、俺の腰に回した手も離さない。

「そこまでやるなら付き合えよ。　地獄までな

『ニードロジェットアタック
爆熱噴射型突撃術式解術』

背中に広がる噴射用魔術円。その紋様の輝きに気づいた紅騎士が上半身を上げようとするが、無理やり押さえつけて床に密着させる。

「この、お前まさか……」

「ああ、勘がいいなお前。当たりだ」

噴射した強力なジェット推進により体が離れへ向かい加速する。それに引きずられた紅騎士の後頭部と背中が音をたてレンガの床をこすれた。

「あががががががががツツ！…！」

やがて速度が最高速と達し、紅騎士の背部と後頭部から摩擦による火花が上がる。その頃にはすでに俺の耳には紅騎士の悲鳴と、床と鎧がこすれる摩擦音と、魔術の噴射音の区別は着かなくなつていった。

「あつ、あづい！ 離して！ 熱い！」

「んー？ 何言つてるか全然聞こえないぞー？」

紅騎士を引きずりながら、離れへの扉を目指し通路を突き進む。残りは「マスター」が一人か……

結構時間がかかつたけど、あのタマ生きてるかな？

あ、ギャグ入れ忘れた……

黒騎士強襲死闘編八　「つちは」つちで大変だ（前書き）

今回はギードのいる離れ通路ではなく、奇襲を受けた正門側の話です。

黒騎士強襲死闘編八　「いつはいつまで大変だ

突撃槍士、ギード・ウォーカーが離れへの通路で紅騎士を撃破してからさかのぼること数分前。正門から騎士団による強襲を受けた城留守番組の朱竜部隊の面々達、彼らもまたそれぞれの戦いを、

「おーい、生きてるか！」

「うつせ、死んでるように見えるか！」

「俺、この戦闘が終わったら結婚……、ぬわあー！」

「おい、しつかりしろ！ 畜生！ モテるやつは死ね！」

戦つたり戦わなかつたり。

突如として強襲を開始した騎士団、現在朱竜部隊は彼らを本館正門口で押し止めていた。

「お前らしじぶといから、この程度じゃ死なねーだろ？ 俺も居るわけだし」

正門中庭にて陣取る敵兵、約四十騎。本館入り口付近では1.5メートルほどの高さの不規則な模様を描く、石の壁によるバリケードが敵の侵入を防ぎ、朱竜部隊員の盾となっていた。

部隊員による石壁防御構成魔術により周辺の構造物を集め作られた防御壁である。更にその上から重ねられた六角防御障壁術式の青い光がきらめいていた。

敵兵側からの夜闇に光が瞬き、熱風や衝撃波が壁を叩く。途切れ事の無い中距離攻撃魔術が豪雨の如く叩きつけられていた。

虎頭の獣人、獣人族虎人種のデュガを床に寝かせ治療術式を施しながら、壁の外に防御壁魔術を開発するという離れ技を演じつつも、屍人僧侶グラス・ファイバーの口調は普段と変わらない。

「大体よー、俺今日の夜からデートだったんだよ、デート。酒場のエミコーちゃん口説き落とすのに一週間通い詰めたんだぜ？これじゃ絶対行けねえよー」

デュガに愚痴りながらも、魔術の精密さと動作には一切影響は無い。

「……デートって、あんた魔王様の警護の夜勤じゃないのか？」やや苦しげに声を出すデュガ。騎士団の強襲により真っ先に負傷したのだ。

「いやー、エミコーちゃんがどうしてもこの日じゃないとダメっていうからさー。ちょっと抜け出そうかなって」

「死ね！ アンタゾンビだけどもつかい死ね！」

「んなこと言うなよ。お前だつて食堂で他のヤツと彼女の話してたじゃねーか」

「……あれは脳内彼女をいかに上手く語るかを競つてたんだ。現実

じゃ、リアルじゃないんだよ」

「……いや、うん、なんかこう、スマン」

「しかしそまだ攻撃が止まんとは」

厚い胸板と長めの両腕、二メートルを超える背丈と鎧の隙間から見える黒い体毛、そしてその両目に宿るは粗野な外觀と反する知性の光。

獣人族、巨猿種、いわゆるゴリラに似た姿であるオルボがその巨体を床に座らせたまま呟く。

「人族の癖にずいぶんと粘るな」

彼の鎧には一部焦げ痕が見えた。奇襲を受けたデュガを抱えた際に受けたのだ。

「人族にしちやういぶん魔術攻撃が長いよな。ひょっとしてあれが上位騎士なのか？」

骨格ではなく角質の硬化した特徴的な鼻角、巨猿種オルボを凌ぐ巨体と太ましい手足、鎧の装甲の下には同等以上に強靱な灰色の外皮が見える。

入り口の奥側で休息を取つていた獣人族、犀人種のドップスが声を出した。一際巨漢であるドップスの後ろ側では彼を盾とするよう十五人程の様々な種族の朱竜部隊が控えている。

「んー、上位騎士ねえ？ あれはちょっとちがうんじゃない？」

デュガの治療を済ませ、他の兵士の治療にかかりながらグラスが口を挟む。

「俺が前に見たことがある上位騎士はなんつーか、まず使う術式から違うんだよ。レベル高いの。

少なくとも外の奴らみたく一般の兵士が使いそうな術式をバカス力連射はしない。

それに数が少ないんだから、あんな一邊に数は出さないだろ」

通常の人族の兵士は魔力量が低いため、魔術の連射が出来ない。今のように身動きが出来ないほどの中距離魔術による弾幕を十分以上続けるなどまず有り得ない。

「そりゃあやつこさん、普通の兵士とはずいぶん違う格好だな。なんだあの装備は？」

オルボが壁から少し頭を出し、こちらを取り囲む敵騎士を改めて観察する。大柄な体をぢぢこませ、ひょっこり頭を出す様は何故か微笑ましく見えた。

敵兵の外装は頭から爪先までを覆う曲線主体の全身甲冑、胴体に対し明らかに長く大きい手足が末端肥大気味なシルエットを作っている。さらに両くるぶしについた車輪が回転し、移動補助を行つて

いた。

そして両太もも外側と後ろ腰部についた小型の機械らしきタル型の何か。武装は剣や長柄の戦斧だ。

「あの三つの機械みたいなやつなんだ？ 今まで見たことないぞ。それに手足がなんかデかい。

それから何だあの足の車輪？ 僕もアレ欲しいな……って、うおつ！」

のんきに観察を報告するオルボの目の前に魔術による熱波が直撃するが、グラスの魔術防御壁に防がれる。

「まー、なんにせよアイツら早めにどうにかしないと魔王様にしつちに来ちゃうんじゃね？ なんかすげー張り切ってるみたいだし」

「ああ、なんか現場主義みたいだしな魔王様。……上司としちゃ理想的かもしれないけどあの状態で出てこられてもなあ」

ぼやきつつも、獲物の破碎棍を支えにして立ち上がるドップス。

「どれ、そろそろ本格的に打つて出るか」

つられてオルボも態勢を整え始める。

「ほんじやま、行くかい？」

促され、奥側の隊員達も動き始めた。

「ちょい待ちなドップス、オルボ」

グラスの制止により二人の始めとした部隊員の動きが止まる。

「あー、今何時だっけ？」

懐から懐中時計を取り出し一瞥した。

「午後九時ちょい前か、実はよお」ボリボリと頭をかく。「ムラマサ今日は非番なんだが、夜当番変わってくれって頼んだんだよ。だからムラマサ近い内に来るかもしんねーのよ」

「ムラマサさんってあのスケルトンの？ ……で何時に来るんだよデュガの問いにグラスはのんびりと答える。

「午後十一時くらい」

「……いやアンタ全然間に合わないだろ！」

「んー、そりや普通に来たら間に合わないが、なんつうかムラマサは普段はとぼけてるけどこいつ時は鋭いっつーか」

「鋭いってそれがどうなんだよ？」

「あいつは戦場の匂いに敏感なんだ。オマケにそれが大好きでなあ

……おつ？」

入り口付近を取り囲む敵騎士団に変化が見えた。中央辺りの騎士が後ろを振り向き後方へ引っ込み始める。

「噂をすればなんとやら、か。まつたく……」

外を見ながら半ば呆れたように、少し嬉しそうに、グラスは呟く。

「じつちが動きや、あつちも合わせると、まつたくよく出来た女だよ。アイツは

「？ 女って誰の事だ？」

「そりゃー、今からやつてくる未亡人の事さ」

突如として敵兵市の陣形が割れた。どこかの国の神話で伝わる断たれた海面の如く、兵士達が左右に別れる。いや、別れさせられた現象を引き起こした存在が中央の道を堂々と、しかし俊敏に駆け出していく。

春の夜の暗闇に見えるその様は、まず桜吹雪があしらわれた蒼穹色の着流し、いわゆるヒノモトノクニーの浴衣と呼ばれる薄着の着物が現れる。

足には同じくヒノモトノクニーの物である木製のサンダル、いわゆる一枚歯の下駄が石畳の地面を軽快に叩き、音を響かせた。

後ろでにまとめられた白髪が、走る度に揺れ、不規則な銀線を描く。月夜の光が白骨とドクロを優しく、妖しく照らし出した。

カラーン、カラーンと軽快に鳴る音は下駄の物だけではない。その者自身、つまりサムライスケルトン、ムラマサの骨がぶつかり合い奏

でられる調べも含まれていいのだ。

やがて左右に別れた兵士達の内の一人が剣を構え、ムラマサの突進を止めるために切りかかる。

「斬られる覚悟のある者のみ前を塞げッ！ それが無いのならッ！」

叫びつつ、ムラマサは左手で太刀の鞘を持ち、刀を納刀。右手を柄に添える。

『シンゲン高周振動破壊術式解術』

高周振動により異音を上げる太刀を右手で抑えた。敵兵士が気合いと共に大上段から剣を振り下ろす。その起動を研ぎ澄ました長年の勘で即座に予測、すでに条件反射のレベルにまで達した回避動作で右に避けた。

敵兵士の剣が通り過ぎるより早く、抜き打ちの抜刀、真一文字の剣撃が無防備な胴部へ放たれる。

「拙者の前に、立つなッ！」

高周振動の斬撃が音速の抜刀術により吹き抜け、装甲、肉、臓物、骨を断ち切る。

刹那の狭間に散る火花、敵兵士が胴に熱を感じた時には既に、彼の上半身は分かたれて空を舞っている途中だった。

やがてそれが、鮮やかな切断劇の対価を支払うように鈍い音を立て赤を撒き散らし石置の地面に落ちる。

駆け抜けるムラマサをもう有るはずの無い背中で見送った下半身は、やがてゆっくりと倒れると何かを思い出したようにドクリと血を溢れさせた。

「 ッ！」

一瞬の内に巻き起こった無慈悲かつ、ある種の「美」さえ感じさせる切斷に、兵士達は言葉を飲み、動きを止める。ムラマサの劍氣に飲まれたのだ。

「怯むなッ！ 順次仕掛けろ！」

指揮官らしき男の声が響く。飲まれた士氣を取り戻すべく激を放つ。

「面白い、刈られるために己が首を晒すか。阿呆共が！」
悪態をつきながら、疾走の体勢を崩さずに太刀を構えた。

大ぶりな戦斧の一撃をぐぐり抜け、太股を両断。

剣撃の刺突を弾き、袈裟切りを見舞う。

幾重もの兵士とその斬撃を凌ぎ、防ぎ、切り倒し突き進む。

しかしいかに達人であるムラマサでも物量には押し切られる。直撃はしないが、徐々に着物に斬撃の痕がついていく。

「ムラマサ！ こつちだ！」

壁の上部からドップスが上体を出し破碎棍を構える。

『蒸散爆衝撃波術式解術』

破碎棍の先で空気中の水分を急速圧縮し、加熱。一部の圧力を解き放つことで指向性をもつ水蒸気爆発を発生させる術式だ。
放された熱衝撃波がムラマサへ殺到する騎士に直撃、吹き飛ばしていく。

「 ……スマン！」

水蒸気の雲を抜けて、ムラマサはドップスが顔を出す魔術構成壁へ駆け抜けた。

壁の前にたどり着き、飛びように跳躍。壁を踏み超え向こう側へ

むたむたして魔族がひしめく方へ落ひるみつて降つ立つ。

「さて、」

破れ、乱れた浴衣をバサリと翻し、ムラママサは淡々と、しかし飄々と状況を確認する。

「なにやら戦場の匂いがすると浮き足立つて来てみればこの有り様か……

一体国境警備は何をやつてこるのだ？」

「……ちょっとこの人ほんとに戦場の匂いでやつて来りやつたよ」

あきれ氣味にデュガが呟く。

「な？ 言つた通りだろ？」

でよームラマサ、ギードのヤツ知らね？

あいつ日勤で帰つたからかれこれ三時間ぐらじに立つてゐし、自分ちに戻つてんぢやないか？」

グラスの質問にムラママサが答える。

「いや、知らんな。城の近くでも見なかつた。自分の家でねてるんじゃないか？」

「今回ばギードはツいてるな。俺たちなんぞこの後飲みに行く約束だつたのにこの有り様だ。……いやもちろん野郎しかいない飲み会なんだが。

この件が終わつたらギードのやつを締め上げて酒か食い物でも奢らせたいぞ。ギードは最近メイドのアイアちゃんと仲良いつて噂だし、デジブスのぼやきのような提案に基本的にモテない朱竜部隊員達が口々に賛成の声を上げはじめた。

「さんせーい」「アイアちゃんに手出してたら口口す」「モテるやつは死ね」「何でもいい、腹減つた」「タダメシより美味しい飯は無い！」

雑多に声が溢れにわかに活氣づく。熱気が出てきた彼らをまとめ

るため、オルボは大きな両手の平を叩き合わせ打ち鳴らした。

「はーい、はい、じゃあムラマサも揃つたし、そろそろけり着けるために打つて出るか」

その両手を防御壁に付け、静かに眼を閉じイメージを練る。組み

上げた術式を魔力に乗せ解放、
『ハイストーンキヤスト』

『高度石材構成操作術式解術』

壁に走る、光の紋様を刻む魔術円。意志の力が、物質の在り方を改変していく。

壁が崩壊し腕を伝いオルボを包み込む。そのまま歩を進め、入り口の外へ出た。

全身を流動化した石が伝い、オルボを中心として巨大な四肢を形成、二メートル程の身長が延長され三メートルを超える。

やがて石の巨人は完全にその姿を成す。武骨な外観ながら、滑らかなその深緑色の表面全体には新緑の葉と咲き乱れるコスモスの花びらの見事なレリーフが刻まれていた。

「こりゃまた張り切つた細工だな。……でもどうせ戦闘終わったら崩しちゃうんじゃないの？」

グラスの指摘に既に巨人の外装に覆われて顔が見えないオルボが答える。

「俺の実家は代々石工細工職人でな。こういう細かいところほど腕をふるいたくなるのさ。ちなみに今年の初夏の流行りになると思う新緑の葉を入れてみた、結構いいだろ？」

粗暴な容姿だが、巨猿種や巨人族は手先が器用であり、細工物の職人が多い。

オルボも実家が職人の家なのでその辺の美意識にはうるさい方だ。

「じゃ行ってくらあ」

巨岩の大猿が両手で勢いよく地面を叩く。中心部のオルボより発生する魔術式による圧縮空気が四肢を駆動させているのだ。空洞の手足から時折ブシュウと空気が漏れる音が聞こえる。地面

を叩いた反動と脚力を合わせ、巨体が跳ね上げ、大きく宙を舞う。湾曲起動を描く砲弾の如く、敵の真っ只中へと落ちて言った。

「じゃあ俺も仕掛けるか」

のんびりとした動作でドップスが外へ出る。巨大な肩には両端に

金属の錨（スチーブドブースト）が打ち込まれた長大な破碎棍が担がれていた。

『蒸散爆発移動補助術式解術』

足の裏から発生した水蒸気爆発により、急激に加速。破碎棍を構え砲弾の如く敵へ突つ込んで行った。

「グラス、拙者にアレをやつてくれ」

浴衣の乱れも直さず、ムラマサは告げた。

「いきなりフルスロットルかよ。飛ばすねー」

「こういう一気に状態を変える時は出し惜しみはいかん。とつととやつてくれ

「いや、それはわかるんだが……」

グラスが気まずそうに浴衣を指差す。

「それで変身するのはマズくね？」

ムラマサの浴衣は剣戦のせいであちこちに破れ痕がつき、本体の骨が覗いている。このまま変身すれば色々見えてしまいそうだ。

「サラシと腰布は巻いてある。よしんば見えたとしても、三分ほどなら問題無い

「……いやー、そこはためらおつぜムラマサ」

なにやら揉めているグラスとムラマサを見かね、デュガが声をかける。

「お前ら何もめてんだよ？ 大体ムラマサさん、その服何？ 見たことない服だね」

「これは拙者の故郷の浴衣という服でな、懐かしんで自作したのだ。つい急いで普段着で来たらこうなってしまった……」

裾を指でつまみ広げると無数に空いた穴で向こうが見えた。

「いい生地なのにこれは勿体無いね」

「まあ、どこぞの高僧曰わく『形有る物はいづれ滅する』だ。気にして仕方ない。それからグラス、お前が口説いていたエミュー嬢から言づてを預かったぞ」

「え、なになに？ どんな愛の言葉を言いつかってきたんだ？」

「うむ、『もつと太いお客から食事に誘われちゃったから、今夜はキヤンセル。グラつち、メンゴ』だそうだ」

恐らくエミューの口調も再現したためだろう、やたらキヤペキヤピした口調でムラマサが伝言を伝えた。

「……デュガ、俺たちはもうここで死ぬんだ。あきらめよう

「ふざけんな、俺たちまで巻き込むんじゃない！」

「グラス、それはどうでもいいから早くアレをやってくれ待ちきれないどばかりにムラマサが急かす。既に彼女は戦場の空

気に焦がれているのだ。

「さっきからアレアレってなに？ なにをやるんだ？」

「……うん、まあ見てりやわかるから」

デュガの問いに答えるグラスのテンションは低いままだ。

グラスは杖を構え、精神を集中。霧散した生命情報を再構築する鮮烈かつ緻密なイメージを編む。

脳内のイメージを魔術の構成として魔力に乗せ、術式を構築。世界の理を打ち崩す「魔の術」を解き放つ。

『リザレクションエクストラ
超高位蘇生術式解術』

杖から溢れる光の槍がムラマサを突き刺す。

入り口通路を吹き荒れ、乱舞する光芒、風、そして生命の気配。

呆然とその様を見守るデュガを始めとする部隊員たち。やがて光が晴れ、現れるはムラマサだった者。あるいはムラマサになった者。

自らの発する魔力の力場により、空をたゆたう長き黒髪。

人形の如く整い、細やかな白雪の肌と研ぎ澄まされた刀身のを思
わせる眼差し。

胸元の間からサラシに包まれた形の良いバストが覗き、浴衣の裂
け目からは均整の取れた手足、なだらかかつ女性的なラインを描く
太ももなど生足が見える。

かつて東国で戦鬼と恐れられた千斬りの美姫が、再びこの世に顯
現する。

「えええええッ！」「何アレ！？」「誰だこの美人！？」「ドッキ
リ？ねえこれドッキリ！？」「ありえねえええッ！？」

口々にリアクションを取る朱竜部隊。敵兵が来ても落ち着いてい
た彼らが完全に度肝を抜かれていた。

「なあ、ムラマサ、やつぱりその格好マズクね？」
グラスの視線の先には浴衣の隙間から覗くムサマサ（生）の肢体。
「どうせ三分だ。いちいち気にしては、ふあつ……へ……」
「へくちつ！」凛々しい表情から意外なほど可愛らしい
くしゃみをして鼻を押さえる。バツが悪そうに顔をしかめ、下がつ
ていた浴衣の襟を胸元まで引き寄せた。やがて恥ずかしげに咳く。

「……春でもこの格好は少し寒いか」

朱竜部隊の反撃はまだ始まつたばかりだ。

黒騎士強襲死闘編九 道具は正しく使いましょう

「あだだだだッ！ アツい！ アツい！」
舞い散る火花の明かりが俺の顔と周囲を照らす。鉄焦げる臭いが
鼻奥を突き刺した。

「離して！ 離してつて！ 摩擦熱で背中がアツいいいいッ！」
術式加速により、流れてゆく通路の壁。紅騎士の後頭部と背中の
装甲とこすれ合い、すり減りながら痕をつけられていく床。そして、
鳴り響く摩擦音と重ねられた絶叫。

「…………うるせえな、もうじき終点だよ。歯あ食いしばれ」

加速突撃術式により、紅騎士を引きずり倒しつつ通路を疾走。走
り抜けた先に離れ館への頑丈に付錠された扉が見えた。

「めんどくせえ！」

勢いのまま、紅騎士を盾にする。

「…………キヤアアアアッッ！！」

かん高い叫びと共に派手な破碎音を立て、扉を打ち破る。散乱す
る破片、金属部品、そして扉を作るため捧げられた職人の労力。
加速突撃術式を解除、紅騎士から飛び降りる。紅騎士は扉を突き
破つたまま床をこすれ、壁にぶつかる。仰向けの体勢で動きが止ま
った。

死んだかな？

爪先で軽くこづく。壁に反響する小さな金属音。反応は無し。死
んだか、気絶したか。

確認すんのもわずらわしい。つーかなんか得体しれないから触
りたくない。

とりあえず紅騎士はほおつておいて、ベイルを確認せねば。

離れの中はやはり照明が切れ、真っ暗だ。暗い廊下を探る。「ベイイイルツ！ 看守くんツ！ 死んでるか！？ 生きてるか！？ 死んでたら『死にました』と菓子折りもつて報告しに来い！ 最低限のマナーだろ！」

「いやそれ死んでたらできませんよ、ギードさん！」

「だつたらまずお前が先例を見せるクソガキ！」

廊下に並んだ幾つかの扉、その内の尋問室が開き、狼顔と禿頭が顔を出す。どうやら無事なようだと俺も胸をなで下ろした。

明かりの消えた尋問室に入り、互いの状況を聞いてみる。

「……なんだ、まだ生きてたか。看守くん、魔王様の話は聞いているな？ 恐らく賊の目的はベイルだ。大方、口封じの暗殺狙いだろ」「緊張がやや緩和されたせいか、バタバタと看守くんの尻尾が振れる。

「いやー、僕も参りましたよ。看守役は僕しか居なかつたもんですから、明かり消してベイルと隠れてたんですね」

「こいつ兵士なのに戦場にてた事が無いって言つてたから俺も不安だつたぞ。一般兵士で、朱竜部隊じゃないそうだし」

「僕が兵士になつたのは戦争終わる直前だつたんだから仕方ないだろ！」

睨み合つタコと狼。また険悪になる一人をなだめつつ、今一番気にかかる事を聞いてみる。

「実はこっちの離れ側へ向かつた賊の別動隊が三人いるんだ。そのうち一人は通路、一人は入り口で倒した。

残り一人、見てないか？」

看守くんがキヨトンとした顔をする。

「いえ、襲撃があつてから来た人はギードさんだけですよ。敵はこっちには来てないです」

「なんだと?……」

「三人いつぺんに通路を通つたんじゃないのか? 離れの外は魔術トラップだらけ、引っかかれれば火力で黒焼き。解除しながらだと多大な時間がかかる。どこから来る気だ?」

「とにかく、孤立するのはマズい。本館側へ行くぞ」
動こうとする俺を看守くんが止める。

「待つて下さい。まだ一人いるなら、ベイルをこのまま連れていくのは交戦した場合、危険があります」

「そりや そりだが、ここにとどまるのは……」

「実は僕のロッカーには昼休みに同僚との運動用にボールが入っています」

「そういうや看守ども、時々俺の監視サボつて外で球蹴りしてるとよな」
ベイル、それマジか?

「黙れタコ! とにかくそれを使うんですよ」

「いや、敵が来てるのに球蹴りしても……」

慌てかぶりを振る看守くん。

「違いますつて! それを赤く塗るんですよ!」

「え?」

「……は?」

俺とベイルが同時に呆けた声を出す。

「そこに目鼻を書いて、僕の予備の服をつけて呑ひせば、
ベイルの囮ができますよ!」

看守くん、君つて奴は……

「イケる! イケるぞ看守くん! 君は天才だ!」

「イケるわけねえだろバカ共! 真面目にやれよ!」

いやこれ結構イケると思うけどなあ。

「じゃあ看守くん、俺も一つ案がある。ベイルをこのままこしても危険がある。変装させよう」

「それはわかりますがギードさん、ここには変装道具は……」

「それは心配無い」

この部屋には有る。必要最小限で最大の効果をもたらす変装道具の在処は既にわかっている。

俺は掃除用具のロッカーを開け、手を伸ばす。キーアイテムとなるそれを見つけ、しつかりと掴んだ。

「これを使うんだ！」

アンダースローの投げ方で「それ」を放り投げた。緩やかな放物線を描き、狙い通りベイルの頭上に「それ」が乗る。

「！」これは！』

看守くんが驚きの声を上げた。

ベイルの頭上にのるは灰色の纖維質、即ち、モップの代え（新品）

「スゴい！ 最小限の変装で最大の特徴を消してやる！ ギークさん、あなたはひょっとして天才軍師とかの生まれ代わりですか！」

「ふふ、恐ろしい…… 僕は己の才能が何より恐ろしいよ……」直立するベイルが冷めた視線で俺と看守くんのやりとりを見つめる。

「……なあ、お前ら余裕あるように見えるけど、実は結構テンパってるだろ？」

「つるせえよタコ（ロン毛）。

黒騎士強襲死闘編九 道具は正しく使いましょう（後書き）

今回わかつたこと。

- ・魔族の社会人ルールはちょっと厳しめ
- ・魔族の会話はノリ優先

黒騎士強襲死闘編十 旧友との再会が感動的とは限らない（前書き）

お待たせしました。

黒騎士強襲死闘編十 旧友との再会が感動的とは限らない

「まあ、とにかく」

こつそりと窓を窺う。暗視光学魔術によつて明確化された映像から庭には人影は無い。

「早く移動しよう。まだ最後の一人は見えないようだしな」

俺の促しに一人も動き出す。

「じゃあ僕が先行しますから、次に毛ダコ、最後にギードさんがバツクアタック対策でついてきて下さい」

「ああ、わかつた。看守くん、後ろから奇襲されたら俺のことはほつといて毛ダコ扱いで逃げるんだぞ？ 足が早いのが君の種族のとりえなんだからな」

俺の忠告に看守くんの横顔がぐつと引き締まる。

「わかつてますよ。でもギードさんも無茶はしないで下さい」

「……おい、お前ら、ナチュラルに人を毛ダコ呼ばわりするなよ！」

ベイルの頭部には先ほどからモジヤモジヤとした纖維質、つまりモップが居座つていた。俺は突つ込みながらも頭部へモップを剥がそうと伸びるベイルの手を慌て掴む。

「バカ！ 取るなよ！ 変装バレるだろ毛ダコ！」

釣られて看守くんもベイルを止める。

「そうだぞ毛ダコ！ 正体バレたらヤバいんだぞ！」

「毛ダコ毛ダコうるせえんだよお前ら！ こんなんで騙されるわけないだろ！ アレか？ 魔族は識別能力が二ワトリ以下なのか？」

「んなわけないだろ！ ちゃんと見分けてるよ！」

俺は内心ギクリとする。ベイルの言つていることは三分一ほど当たつてゐるからだ。

人族と見かけの近い魔人種や妖人種ならともかく、生物種がかなり違う獣人種は人族系の顔がいまいち判別が効かない。（実は人族系からみた獣人種もだいたいそうなのだが）

犬や猫の顔が判別できないように、大まかに年齢や性別はわかつても個人の判定が難しいのだ。

「だからぐだぐだやってないで、早くいけと……」

ズンツ

突如響く衝撃に言葉が途切れる。反射的に身構えた。

窓側、天井を破碎し、壁を真上から両断して走る何か。轟音とともに壁や天井の破片が舞い散る。

な……んだ！？

壁の半ばまで表れた切断、というより粉碎に近い破壊痕。そして、

……柱？

やや斜めから見ていたため一瞬柱だと勘違いしたが、そうではない。刀身だ。広い幅と長さをもつ一メートルはある両刃の大剣が壁を突き破っていた。

「看守くんツ！」

俺の呼びかけより早く、看守くんがベイルをドアの外へ押し出す。

「おい！ お前ら！」

「つるさい！ とつとと逃げてろ！」

壁の亀裂から覗くヤツの姿に、俺も看守くんも本能で直感したのだ。こいつは強者だと。

剣が持ち上がり、亀裂から出て行く。今度は真横からもはや打撃に近い剣戦が走る。十字に巨大な亀裂が入り、次の瞬間には壁自体が崩壊した。

ポツカリと空いた壁の大穴、夜の空から刺す月明かりがそれを照らす。

一メートルを超える背丈。自らを照らす光さえ吸い尽くすような漆黒の全身甲冑。太ましい四肢、背中と太もも部についた機械。

前の緑や紅騎士とは明らかに違う強靭な体格だ。更に得物の大剣の重さからかなりの身体強化術式を使用していると思われる。

紅や緑とは明らかに違つ、熟練の戦闘者としての威圧感がチリチリと肌を焦がす。

「バカな！ コイツ外に腐るほど設置された魔術トラップをどう抜けてきたんだ！？ 爆発が無いということは作動してないはずだぞ！」

「人族つてえのは、どいつもこいつも眞面目に正面玄関から入る気が無いのか？」

「……ベイル・ギャレットはここにいるのか？」

皮肉を無視して、黒騎士が呟く。低く冷徹な印象を抱かせる中年の男の声。

やはり、狙いはベイルか！

俺は剣を取り出し正眼に構える。コイツはここで止めなければ。

「ギードさん、俺が先に仕掛けます！」

言葉より速く、疾風のように看守くんが駆けた。両の手に握られるは「降りの鉈のような蛮刀」。

飛ぶように跳躍、同時に看守くんの体から魔術式が広がった。

「見切れるか！」

『ミラー・フォルム』
『多重投影幻身術式解術』

周囲に現れる、三体の看守くん。分霊のよつな実体ではなく、光学魔術による立体映像だ。しかし狼人種の脚力による高速移動と起動により映像と本体を見切ることは至難を極める。

それぞれが分散しながら壁や床を縦横に跳ね、疾走。二体が左右、一体が正面から切りかかる。しかし黒騎士には一切の動搖が見えない。その背中に後光のように魔術円が展開する。

『ハイ・レイヤー』
『魔術式構築無効化術式解術』

掲げられた左腕から水面に石を投ずるよつに波紋が発生、空間を震わせるよつに広がつていく。

波紋が通り過ぎた刹那、三体の看守くんが揺らぎ、消失。

「何ッ！？」

黒騎士の背部頭上から聞こえる看守くんの驚愕。立体映像三体を

団に背後から飛びかかっていたのだ。

「避ける！ 看守くん！」

俺の声が虚しく響く。飛びかかった空中からでは避けるもへった

くれも無い。

大剣が床を削りながら振られる。煙を上げ滑る剣先、途中引っかかりそうな壁を豪快に断ち切りながら後ろへ振り向く。

障害物は関係無しか！

空中の看守くんへ逆袈裟に切り上げられる大剣が迫る。

「ふんッ！」

看守くんはとっさに蛮刀を十字に組み防御を取つた。

しかし激突する大剣はやすやすと蛮刀一本をへし折る。

「うわあああっ！」

叫び声を上げ、跳ね上げられる看守くん。黒騎士の頭上を飛び越え、天井でバウンド。俺のすぐ近くの壁に激突した。

「看守ウウッ！…」

黒騎士に警戒しつつ近づく。蛮刀はへし折れ、胸部鎧には亀裂。両腕も折れているようだ。息も絶え絶えだが、幸い大剣の刃は貫通していない。……アバラの一、二本はイツてそうだけど。

「…………う、うあ」

横たわる看守くんが苦しげに声を出す。

「無理に喋るな！ じつとしてろー！」

「ギ、ギードさん……」

「なんだ、どうしたんだ？」

「ま、前々から、思つてたんですけど…… 僕の事、『看守くん』としか呼んでくれないん、ですけどひょっとして、僕の名前、お、覚えてないんじや……」

……やべーバレた。

「な、なにを言つてるんだ？ そつか、ショックで錯乱してるのか。ここで安静にしているんだ！」

慌て立ち直り黒騎士へ向き直る。

「……絶対この人覚えてないよ」

看守くんの呟きを聞こえないふりをしながら、剣を構えた。

状況観察、魔術無効化術式装備、身体強化以外の体外に発動するタイプの術式は全て発動を阻害されるか、または無効化される。無効化術式の欠点は使用中は使用者の術式も無効化され使えなくなることだ。おそらく発動距離を体外に絞り、身体強化のみに特化した殴り合い上等の超近接型、正真正銘のストロングタイプ。外の魔術トラップも感知魔術を無効化していくぐり抜けてきたのか。

「……答える、ベイル・ギャレットはここに居るのか？」

再び静かに黒騎士が問いかける。その声には感情らしき物は感じられない。

暗く、呑まれるような殺氣。剣というよりは鉄の鈍器に近い大剣を壁や天井を粉碎しながら振り回すという非常識ぶりに果たしていかなる手段で対抗するべきか。

まあ、この状況じゃやれることは一つか。

「さあな、知らねえよあんなタコ面！」

捨てゼリフトともに踏み込みをかけた。黒騎士との距離を詰める。下段に構えられた黒騎士の大剣が迎撃のために跳ね上がった。噛みつこうとする巨人の顎のごとく振りかぶられる大剣。

「ふんッ！」

気合いと共に踏み込み、大上段、頭上からの打ち下ろしを放つ。

「ぬおおッ！」

身を右によじりながら粉碎の刃を回避。俺の真横、約三センチ先を死風が抜ける。背筋を走る寒気をこらえ狙うは黒騎士の左手首。

高周振動が使えなくとも、近接から鎧の隙間をつけば！

しかし次の瞬間体勢がかしむ。打ちつけられた大剣により床が崩壊、破片に足を取られたのだ。

「うおっ、やつべえッ！」

「せいいッ！」

引き抜かれた大剣が今度は横なぎ、左から右へ足を狙つて振られた。とつさの判断で上へ跳躍。吹き抜ける超斬撃を避け… しました！

俺が空中に飛び上がった時に、すでに黒騎士は左腕を振りかぶっていた。間髪入れず放たれる鉄甲の拳。

空中では回避出来ず、防御も間に合わず、吸い込まれるように俺の胸に。

「がッ！」

めり込む拳。乾いた叫びを上げ、後ろへ吹き飛ぶ。そこから先是ゆっくりと見えた。しなる床へバウンドし、派手な音を立て壁にぶつかる。

「お、おふ、おぼ、」

胸に走る激痛に悶えながら、口中に広がるエグい酸味、胃液を床に吐き捨てた。頭部を強打するのは回避できたため意識はまだある。……いやもうこのまま寝てたいけど。

……アバラが一、二いつたか？

痛みと衝撃で体が動かない。

こりゃ本格的にヤバいぞ。

寝転がつたまま黒騎士の方を見る。ゆっくりとした動作で一步、また一步確実に瓦礫を踏みしめ近づいてくる。

「この死に神が！」

ピタリ、と歩みを止めた。場所は看守くんのすぐ近く。

おい、まさか待てお前ッ！

大剣を振りかぶる。真下には看守くん。彼の表情にはすでに諦めが見えていた。

ふつ、ふざけんなよ！

力を振り絞る。ふらつく意識を押さえつけ、這いつくばりながら声を出す。

「ま、待てよ、お前、やら、せるかよ

横隔膜がうまく動かずか細い声しか出ない。体もマトモには動かない。それでも、それだけはやらせるかよ。

気づいたのか、黒騎士の装甲に包まれた頭部がこちらを向いた。

「……ベイル・ギャレットはどうだ？」

またあの寒々しい声。「イツは本当はこれしか言えないのか？」

「答える、二」

突如始まるカウント。まさかお前！

「一」

床をかきむしる。体を立たせるため四肢に力を込める。それでも立ち上がれない。立ち上がりない！

「一」

止めろ！ 止めろ！ 止めてくれ！

「よお、俺に用があるのかい？」

声が響き、ドアが勢いよく開かれる。瘦身、鷲鼻、そしてモップ。それは本来ここにはいてはいけない男。そう、そいつは、

「な、何しにきてんだよお前は！」

ベイル・ギャレットがドアを開け佇んでいる。てつおい、逃げて無かつたのか！？

「そこあんちゃん一人組な、日頃給料が少ねえとか愚痴吐いてるただの下っ端なんだ。だからあんまいじめてやるなよ。 シ

ュバルト・ガリイ？」

ベイルの呟いた名前、シュバルト・ガリイに黒騎士がピクリと反応を示した。……なんでベイルがコイツを知ってるんだよ！？

懐かしげに、どこか寂しげにベイルは微笑む。すぐそこに立ちふさがる死に臍することなく歩を進めた。

「お前みたいにバカデカい剣振り回すタイプなんかそう何人もいる

かよ。それに太刀筋だつて覚えてるんだ、魔導鎧着込んでたつてわかるさ。こうやってツラ会わすのは除隊式以来か？」

「魔導鎧？ 除隊式？ ベイルはある黒騎士とどういう関係なんだ？ つか除隊式つてことはベイルは元軍属ということに……まあ、積もる話もあるがゆっくりもできんかシユバルト？」

「…………」

親しげなベイルの問いに沈黙を通す黒騎士。

「相変わらず、無口だなお前は」

「…………」

やがて、黒騎士はかしいだ音を立て首をひねり、困惑氣味に訪ねた。

「…………失礼ですが、どこのどなたですか？」

「…………ああああっ！ もうっ！ ドチクショウウッ！」

泣きわめきながらベイルが頭のモップを掴み床に投げ捨てた。バタバタと床を転がるモップ。バカせつかくバレてないのに取るなよ！ 露わになつたベイルの頭皮を見て、黒騎士がその正体に気づく。

「お前は…… ベイル・ギャレット！」

「だから最初からそうだつて言つてんだろボケ！」

まあ、これはしようがねえよベイル。

お待たせしました

「……とにかく、俺の事はまだ覚えてたみたいだな、シユバルト」

転がるモップから散らばるホコリ、崩れた壁から刺す月明かりがそれを照らす。

「……忘れるものか、お前のよつた男にはそつは会えん。そして、「鈍い音を立て、大剣が床に突き刺さる。その様は正しく柱としか言いよつが無い。」

「」の作戦の目的は、紛れもなくベイル、お前なのだからな

やつぱそれか！

これで確信する。あの黒鎧、シユバルトの目的はベイルの暗殺による口封じだ。このままじゃマズい！

歯を食いしばり足に力を込める。ベイルと喋っているうちにダメージを回復しなければ。

「ま、そんなもんかと思つたぜ。それでも見ず知らずのやつに殺されるよつはマシか」

どこか悟つたよつにベイルが微笑む。その顔にはすでに死を決した覚悟が見えた。

クソ、んな簡単に諦めてんじやねえぞタコハゲ！

「ベイル、私はお前を殺しに来たのではない。この作戦の目的は救出だ」

一瞬、言葉を失う。「トイシラはベイルを殺すつもりではなく助けるつもりだったのか？」

「ベイル、私と共に来い。国へ帰るぞ」

黒手甲に包まれた、太い左腕を差し出す。この手を掴めといわんばかりに。

「……どういう風の吹き回しかいまいちわからんねえな。俺を消す気がないっていうのか？」

「大人しく来れば、生命と安全は私が保証する。魔族の城にいるよりはよほどお前にとつて（・・・・・）安全なはずだ」

ベイルにとつて？ うちは捕虜の扱いはちゃんとしてるぞ！

しばしの沈黙、その後にベイルが口を開く。

「……いや、俺は行かない。軍は前からキライだつたが、おかげで反吐が出るほどキライになつたからな。それによ、魔族魔族と帝国はいうが、」

掘りの深い顔立ち、その奥の目に決意の光が宿る。

「慣れてみりやあ、存外に悪いもんじやない国だ。……俺はこの取り調べ室ぐらいしか口クに見てねえけどな」

はつきりとした拒絕。帰らないといつ意思。ベイルは寸鉄一つ帯びない身で、巨漢の黒騎士と向き合い、意志をしめしている。

ベイルのヤツ、まさか、

俺にはおぼろげに理解出来た。なぜベイルが帰国を拒むか。

団員達のためか！

団員一人は国外に送られると決定はしたが、実際に送られるのは二週間後だ。自分一人が脱出すれば、それが撤回される可能性がある。

「この男は最後まで逃げない気なのだ。

「……ベイル、それがお前の決断か」

黒騎士がゆっくりと大剣を引き抜く。己の頭上へと、天を貫くよう掲げる。

「脱出に応じない場合は、暗殺対象に切り替えないと命じられている。それでもお前は……」

その声は未だに感情の色が見えない。
斬る気かよ！

ベイルの微笑みに、寂しさが強まつて見えた。また一步、足を踏み出す。紛れもなく、この男は、「結局それかよ。ま、そんなもんだよな俺らの国は。 やれよ、別にお前を恨むつもりはないさ」生きる事を捨てている。

「……ベイル、私を恨め。私に怒れ。私を唾棄しろ。それ以外、私が背負える物は無い。それ以外は無いんだ」

初めて、黒騎士に感情が見えた。苦渋と共に大切な物を消そうとする感情だ。

止める、止める止めろッ！

もがきながら力を入れるが上手く立ち上がれない。ダメージがまだ回復していない。ベイルを、あの男を死なせたくない、任務だからとか、証言のためだからじゃなく、ただ純粹にあの男を、自らを犠牲に戦おうとする人間を死なせたくないんだッ！

死と生を分かつ断線がきらめく。その刃はただ鉄塊としか見えず。

「止めろッ、止めろおおおおおおおお…！」

ゴ オ オ オ ノ ッ ! !

ツ！ 今度はなんだ！

突如、巨大な轟音と振動が建物を揺らす。黒騎士の刃が途中で停止した。

この振動は……ツ！

発信元は頭上、おそらくは建物の真上。そしてこの轟音には戦場で覚えがあった。

加速魔術による音速を、魔術による緊急停止で止めた時に分散した衝撃「ソニックウェーブ」だ！

この城で今いる中でそれが出来る人材は、魔王様を除いて一人しかいない。

「ベイイイールッ！ そこから下がれ、下敷きになるぞ！」

「な、なんだ！？」

俺の呼びかけに、本能的にベイルが飛び退く。

次の瞬間、派手な音を立てて天井の一部が崩落、舞い散る破片の中、巨大な塊が床に突き刺さった。

「……何物か

剣を構えたまま、感情の無い声で黒騎士が墜ちてきた塊に呼びかける。

やがて塊がゆっくりと伸びる　否、立ち上がる。片膝を着いた体勢で塊は着地していたからだ。

その太ましい四肢。大きい通り過ぎ既に丸い腹周り。頑強な首。全身をくまなく覆う甲冑には、金による線が埋め込まれている。鬼「オーガ」を模した兜面、その脇には一本の牙が突きだしている。場の空気を飲み込むほど、鬪氣としか表現出来ない熱をまとっている。

その巨岩の如き武人に覚えがあつた。顔が見えずとも、体型を見ればいやでもわかる。

「　隊長ッ！」

「つ！　ギードか、ベイルはまだ生きているのか？」

俺を一瞥する隊長。状況を知るため即座に声をかけてきた。
「は、はい！　隊長の後ろにいます！」

「そうか」

黒騎士を前に、堂々と構える隊長。

「魔王様が『自分が出る』と言ひ張つておつてな。仕方なく事態を早期収束のため、魔王様の説得を他の部下に任せ、私が出張つてきたというわけだ」

あ、この人魔王様説得するのめんどくさいなってこいつ逃げてきたな。

「デスクワークばかりは体がなまるな。やはりたまには動いたほうが……ん？」

自分の両手のひらを見つめ、隊長が一瞬押し黙る。

「あ、急いで武器忘れた」

隊長オオオオオオッ！？

黒騎士強襲編十二 力押しを舐めてはいけない（前書き）

なんかスゴいお待たせして申し訳ないです。

黒騎士強襲編十一 力押しを舐めてはいけない

空気を震わせる振動とともに、黒騎士シユバルトが空けた壁の向こうへ、留置場の外で立て続けに爆炎が上がる。

恐らく、音速を超える、電磁加速式突撃術式で留置場の真上に飛んできた隊長に反応したのだろう。隊長の速度が速すぎるため、爆発が間に合わなかつたらしい。

燃え盛る幾つもの炎柱、発せられる業火の光が闇と、黒騎士と、隊長の凶相を照らす。

「ちよ、隊長オツー？」

思わず声が出た。剣を杖に、背をきしませながらなんとか立ち上がる。大剣を正眼に構える黒騎士ことシユバルト、一方全身甲冑を装備しているとはいえ、徒手空拳の隊長。体格は二メートル以上の身長と魔族でも重量級の体重を持つゴルン隊長が上回っているが、得物の有る無しの差は確実に大きい。

「……どうやら、部下がかなり世話をなつたようだな。客人よ」

無手のまま、構えもせずに隊長が黒騎士に語りかける。その態度には一切の動搖は無い。まるでいくらでも修正の効くミスだとでも言つよつに。

「金線の鎧をまとうグラノーアーク……まさかこんなところでの『雷神』と出会つとはな。引退はしていなかつたというわけか」

一方、大剣を正眼に構える黒騎士には余裕は見えない。元々感情が薄そうなヤツだったが、わずかに焦りが見える。

ていうか『雷神』て何？

「若い時は『雷神』だの『黄金鬼』だの色々恥ずかしい通り名で言われたが、今じゃ老いぼれてただの城番だ。それよりもなあ、客人。

魔族流のもてなし、たっぷりと味わって貰おうか」

はじめて隊長が構える。甲を前面に左右の手を前へ出す。顎を引き、丸いシリエットの上体を後ろへ反らす。

あれは……

訓練兵時代、徒手格闘の技法としてならづ拳闘はもつともポピュラーな技術だ。しかし俺が習った拳闘の構えは上体を前に、左右の拳は前面をガードするように構える物だ。あの構えは格闘技史の授業で見た最古の拳闘の構え。防具無しでやるのが基本だった時代の遺物。

古！ 構え古ッ！

俗に言つ「裸拳^{ベアナックル}」の構え（フォーム）。たしかに隊長の体格とあの岩のような拳なら振るうだけで十分な武器だ。しかしあの黒騎士もただ者ではない。

無言で隊長が踏み込む。体重で床が音を立てて割れ、煙が上がる。前側に構えた左腕にまとわれる紫電、絡みつく雷が魔術円を構成。あれは電磁加速拳撃術式、音速を越える拳速は一度放たれれば回避も防御も不可能だ。だが、

「ダメだ隊長！ そいつには……」

俺が言い終わるよりは早く黒騎士の背中に魔術円が展開、隊長の

術式とほぼ同時に発動。

『マスクライヴ・マジックル
電磁超加速拳撃術式解術』

『魔術式構築無効化術式解術』
ハイ・レイザー

黒騎士の左腕から放たれる空間波動、即座に隊長の術式を破壊、無効化していく。急激に加速が落ちる左拳。

「ぬんツ！」

しかし隊長の動作に変化は無い。そのまま一気に轟拳を振り抜いた。

とつさに大剣を盾に拳を受け止める黒騎士。だが勢いを殺せず、その体が後ろへ吹き飛ばされる。

「ぬおおツ！」

脚を床に擦らせながら着地、再び構え直す。大剣には隊長の巨拳の痕が残っていた。いける！ 魔術無しでも圧倒してやぞ！

「無効化術式と身体強化による接近戦重視型か」

構えたまま隊長が呴く。暗闇に隊長の隻眼が光る。

「なかなか思いきった戦い方だ。私は嫌いではないぞ、そういうやり方はな。 ギードよ」

「はつ、はい！」

いきなり名前を呼ばれ、思わずキョドつた。

「一つはレクチャーしてやる。」「一つは無効化術式使いへの対処方は大きく分けて三つある。

一つは大規模魔術で無効化を無視して吹き飛ばす。

二つめは援護役に頼んで無効化術式発動阻害術式を撃たせて更に無効化させる

たしかに力で吹き飛ばすか、専用の魔術で無効化するかが有力な方法だ。だが今その方法を使える戦力は近くにいない。

「そして三つめ、魔術は諦めて、単純に肉体でケリをつける」

やつぱりですか。ていうか、それ隊長以外ムリッスよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5378o/>

聖剣伝

2011年10月29日19時03分発行